

埼玉県和光市

えちごやま
越後山遺跡

(第2次・第6次調査)

— 宅地造成工事に伴う発掘調査報告書 —

2013. 6

和光市遺跡調査会
和光市教育委員会

埼玉県和光市

えち ごと やま
越 後 山 遺 跡

(第2次・第6次調査)

— 宅地造成工事に伴う発掘調査報告書 —

2013. 6

和光市遺跡調査会
和光市教育委員会



越後山遺跡遠景（平成12年撮影）

所在地
和光市南一丁目2447～2465外



第2次調査区全景



第2次調査区近景



第11号土坑出土ヒスイ製大珠



第7号住居跡出土土器

序 文

このたび「和光市埋蔵文化財調査報告書第50集」として、『越後山遺跡』（第2次・第6次）の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

市内には現在、埋蔵文化財包蔵地が43カ所確認されております。これらの文化財は、他の文化財とは異なり地中に埋蔵されている状態にある文化財であり、これまでも開発等にもない現状保存が困難な場合には、関係者のご協力をいただき、記録保存としての発掘調査を実施しております。

今回の第2次、第6次調査の成果内容としましては、第2次調査で旧石器時代・縄文時代・古墳時代、第6次調査で古墳時代の遺構・遺物を中心に先人達の暮らしの状況を知る上で貴重な資料を得ることができました。なお、今回の調査は、第2次調査が個人、第6次調査が（株）リゾンによる宅地造成工事に伴い行われたものであります。

埋蔵文化財をはじめ、有形・無形文化財、民俗的文化財など先人の残した文化財は、本市の貴重な財産であり、これを後世に残していく責任があります。

この報告書が、郷土の文化や歴史を学ぶにあたり、その一助として多くの市民の方々に広く活用され、埋蔵文化財についての関心と理解を深めていただく契機となることを切に願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査から本書刊行にあたり、日ごろからご指導いただいております埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、和光市文化財保護委員会及び調査の作業に携わった方々、また調査にご理解とご協力をいただきました土地所有者の方をはじめ関係の皆様へ厚くお礼申し上げます。

平成25年6月

和光市遺跡調査会会長

和光市教育委員会教育長 大久保 昭男

例 言

1. 本書は埼玉県和光市南 2447～2465 外に所在する越後山遺跡（第 2 次）、（第 6 次）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、第 2 次・第 6 次調査とも宅地造成工事に伴う事前調査である。調査面積は第 2 次調査が約 1300 m²、第 6 次調査が約 29 m²で、発掘期間は第 2 次調査が平成 11 年 10 月 21 日～平成 12 年 2 月 25 日、第 6 次調査が平成 17 年 4 月 5 日～4 月 8 日迄である。
3. 本発掘調査及び整理作業は、和光市遺跡調査会（会長：和光市教育委員会教育長大久保昭男）が事業主から委託を受けて行った。現地調査は第 2 次調査を鈴木一郎・前田秀則、第 6 次調査を鈴木一郎が担当し、室内整理は前田秀則が担当した。
4. 本書の作成は和光市遺跡調査会が行い、鈴木一郎の助言と整理作業員全員の協力を得て編集を前田秀則が行った。執筆は分担執筆を行い、文末に執筆者名を記した。
5. 付篇として第 2 次調査出土の大珠（第 11 号土坑）及び市内丸山台遺跡出土の有孔垂飾（第 5 号土坑）の鉱物分析結果を所収した。
6. 遺物の注記は、越後山遺跡（第 2 次）を「41・2 次」、越後山遺跡（第 6 次）を「41・6 次」とした。
7. 記録類の整理、遺物実測、遺物観察等の諸作業は、古川菜穂、坂口由加里、喜代吉久美子、大内一雄、野崎義成、細越美樹が主に行い、江藤直子、吉村理恵子の協力を得た。石器の実測及び観察は一部有限会社アルケリーサーチに委託した。
8. 発掘調査の写真撮影は鈴木一郎・前田秀則が行った。遺物写真は前田・古川菜穂が担当し、写真処理は大内一雄が行った。空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。
9. 本書掲載資料ならびに本発掘調査の記録類および出土遺物等は、すべて和光市教育委員会で管理・保管される。
10. 現地調査から遺物整理、報告書作成にあたっては、下記の諸氏、諸機関からご教示・ご援助を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 和光市文化財保護委員会 和光市立第四小学校
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 朝霞市立博物館 朝霞市埋蔵文化財センター
柴崎昭子 榊リノン 羽田野敏雄 江原 順 大屋道則 尾形則敏 柿沼幹夫 加藤秀之 黒尾和久
小出輝雄 渋谷寛子 高麗 正 斯波 治 下原裕司 高橋 学 照林敏郎 沼上省一 根本 靖
野沢 均 廣田吉三郎 山田尚友
11. 現地調査および室内整理作業参加者は下記のとおりである（五十音順）。
（現地調査）
青木 修 青木崇裕 遠藤由美子 及川いく子 大島謙一 大島康彦 岡嶋勇藏 菊池仁志
木南はるか 桐山順子 小池勇雄 坂口由加里 相馬邦子 乳深美代子 中川朝仁 中野栄美子
西塚恵美子 伏見康子 古川菜穂 宮永美都 宮本文子 山崎 紘
（室内整理作業）
遠藤由美子 江藤直子 及川いく子 大内一雄 桐山順子 喜代吉久美子 坂口由加里 乳深美代子
西塚恵美子 野崎義成 古川菜穂 細越美樹 吉村理恵子

凡 例

1. 本書図版の縮尺は、以下のように統一したが、例外のものについては個々にスケールを付した。
 遺構実測図 住居跡 1/60 土坑・ピット 1/30・1/60
 遺物実測図 土器実測図 1/3・1/6・1/9 土器拓影図 1/3 土製品 1/3 石器 1/1・1/3
 遺物写真 旧石器時代 石器 2/1
 縄文時代・古墳時代 土器 1/3 石器・石製品・土製品 1/3
2. 図版中の焼土・赤色塗彩にスクリーントーン（ドット）を用いた。
3. 住居平・断面図にある記号は、 F_1 ：1号炉、 U_1 ：1号埋甕、 R_1 ：炉体土器、 $P1$ ：ピット1等を示す。
4. 遺物出土図中にある次の記号は、●（土器）、□（石器）、○（礫）を示し、土器個体別分布図中の●・□・○・△・★等は出土位置をシンボルとして示した。
5. 遺物観察の数値はcmで、（ ）は復元値を示す。
6. 遺物観察表の胎土は次の表記で示している。A：砂粒、B：赤色粒、C：白色粒、D：小石、E：金雲母、F：雲母、G：石英、H：長石、I：輝石・角閃石、J：白色針状物質、K：繊維
7. 遺物観察表の色調の表現は『新訂標準土色帖』（1997年版・農林水産省監修）に従った。
8. 挿図中の方角は座標北、水系レベルは標高を示す。
9. 遺構図版中の一点鎖線は攪乱を示す。点線は推定を示す。
10. 遺構番号は前調査から継承した通し番号を順に付したが、本報告書作成時に新たに用途が判明したものや遺構番号が他調査区と重複するものが認められた。それらについては一部を欠番とし新たに新番号に振り替えた。旧番号との対応関係は下記の通りである。
 (旧→新)
 第8号土坑→P2 第59号土坑→第65号土坑 P44→P23 P68→P67
 第15号土坑→P5 第60号土坑→第67号土坑 P45→P39
 第54号土坑→P21 第61号土坑→第68号土坑 P46→P52
 第55号土坑→P11 第64号土坑→P22 P47→P57
 第56号土坑→第54号土坑 第65号土坑→第69号土坑 P65→P63
 第57号土坑→第55号土坑 第68号土坑→第70号土坑 P66→P65
 第58号土坑→第56号土坑 第69号土坑→第71号土坑 P67→P66
 (欠番) 第7号土坑、第57～64号土坑、P6・P7・P12・P14・P16・P17、P29～34、P38、P44～47、P60
11. 土器の型式分類は、縄文時代早期の燃糸文系土器については原田昌幸氏の論考（原田 1991）、中期については黒尾和久氏の論考（黒尾 1995）に準拠した。また中期土器群の編年的位置づけは新地平編年（小林謙一、中山真治、黒尾和久 2004）を基準に行った。

和光市遺跡調査会組織

役員

会 長	大久保昭男 (和光市教育委員会教育長)
副 会 長	田中 明 (和光市文化財保護委員会委員長)
副 会 長	上籙 乙夫 (和光市教育委員会教育部長)
理 事	富岡 進 (和光市文化財保護委員会委員)
理 事	後藤 女子 (和光市文化財保護委員会委員)
理 事	鈴木 夕季 (和光市文化財保護委員会委員)
理 事	矢崎 康彦 (和光市文化財保護委員会委員)
理 事	森 朋久 (和光市文化財保護委員会委員)
理 事	鈴木 敏弘 (和光市文化財保護委員会委員)
監 事	小田部玲子 (和光市文化財保護委員会委員)
監 事	副島 元子 (和光市文化財保護委員会副委員長)

事務局

事務局 長	星野 裕司 (和光市教育委員会次長兼生涯学習課課長)
事務局 員	亀井 義和 (和光市教育委員会生涯学習課課長補佐)
事務局 員	鈴木 一郎 (和光市教育委員会生涯学習課文化財保護担当統括主査)
事務局 員	中岡 貴裕 (和光市教育委員会生涯学習課文化財保護担当主事)
事務局 員	渡辺 潤 (和光市教育委員会生涯学習課文化財保護担当主事)

調査班

調査担当者	鈴木 一郎 (前出)
調査担当者	前田 秀則 (和光市文化財調査指導員・日本考古学協会会員)
主任調査員	牧田 忍 (日本考古学協会会員)

発掘・整理作業員

古川菜穂 坂口由加里 喜代吉久美子 大内一雄 野崎義成 細越美樹
江口やよい 江藤直子 角南涼子 中村二郎 福田繁男 吉村理恵子

(平成 25 年 3 月現在)

目 次

序文

例言・凡例

調査組織

目次（本文・挿図・挿表・図版）

I	市域の地形と遺跡	1
1.	市域の地形	1
2.	市域の遺跡	1
3.	越後山遺跡の概観	7
II	越後山遺跡第2次調査	15
1.	調査に至る経緯	15
2.	調査方法と発掘経過	15
3.	層序	18
4.	検出された遺構と遺物	20
(1)	旧石器時代	20
(2)	縄文時代	26
(3)	古墳時代	113
(4)	調査区出土遺物	129
III	越後山遺跡第6次調査	145
1.	調査に至る経緯	145
2.	調査方法と発掘経過	145
3.	検出された遺構と遺物	145
(1)	古墳時代	145
(2)	調査区出土遺物	150
IV	小 結	152
	引用・参考文献	154
	付篇	156
	写真図版	
	報告書抄録	

挿 図 目 次

第 1 図 市内の地形と主要道路概略図	1	第 45 図 第 12 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	64
第 2 図 和光市遺跡分布図	5	第 46 図 第 12 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.6m)	64
第 3 図 武蔵野台地と周辺地形区分図 (S=1/400000)	7	第 47 図 第 12 号住居跡出土遺物	65
第 4 図 遺跡位置図 (S=1/15000)	8	第 48 図 第 13 号住居跡平・断面図 (L=39.7m)	66
第 5 図 越後山遺跡第 1～6 次調査位置図 (S=1/2500)	9	第 49 図 第 13 号住居跡出土遺物	66
第 6 図 越後山遺跡第 1～6 次調査遺構全体配置図 (S=1/1200)	10	第 50 図 第 24 号住居跡平・断面図 (L=39.5m)	69
第 7 図 白子川中・下流域遺跡分布図 (1) (S=1/27000)	12	第 51 図 第 24 号住居跡出土遺物	69
第 8 図 白子川中・下流域遺跡分布図 (2) (S=1/27000)	13	第 52 図 第 25 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	70
第 9 図 越後山遺跡 (第 2 次) 調査位置図 (S=1/2500)	16	第 53 図 第 25 号住居跡出土遺物	70
第 10 図 試掘調査トレンチ配置図 (S=1/200)	17	第 54 図 土坑平・断面図 (1)	89
第 11 図 基本順序 (S=1/40)	18	第 55 図 土坑平・断面図 (2)	90
第 12 図 第 2 次調査遺構全体配置図	19	第 56 図 土坑平・断面図 (3)	91
第 13 図 旧石器時代調査区設定図	21	第 57 図 土坑平・断面図 (4)	92
第 14 図 T P 1・3・14・6・8・9 土層柱状図	21	第 58 図 土坑平・断面図 (5)	93
第 15 図 第 1 号ブロック・第 1 号縄群分布図	22	第 59 図 土坑平・断面図 (6)	94
第 16 図 第 1 号ブロック	23	第 60 図 ビット平・断面図 (1)	95
第 17 図 第 1 号ブロック出土石器	24	第 61 図 ビット平・断面図 (2)	96
第 18 図 第 1 号縄群	25	第 62 図 土坑出土遺物 (1)	105
第 19 図 第 7 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	28	第 63 図 土坑出土遺物 (2)	106
第 20 図 第 7 号住居跡遺物出土図 (L=39.6m)	29	第 64 図 土坑出土遺物 (3)	107
第 21 図 第 7 号住居跡土器個別分布図 (1) (L=39.6m)	31	第 65 図 土坑出土遺物 (4)	108
第 22 図 第 7 号住居跡土器個別分布図 (2) (L=39.6m)	32	第 66 図 土坑出土遺物 (5)	109
第 23 図 第 7 号住居跡土器個別分布図 (3) (L=39.6m)	33	第 67 図 ビット出土遺物	109
第 24 図 第 7 号住居跡土器個別分布図 (4) (L=39.6m)	34	第 68 図 古墳時代遺構全体配置図	113
第 25 図 第 7 号住居跡土器個別分布図 (5) (L=39.6m)	35	第 69 図 第 2 号住居跡平・断面図 (L=39.7m)	115
第 26 図 第 7 号住居跡出土遺物 (1)	42	第 70 図 第 2 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.7m)	115
第 27 図 第 7 号住居跡出土遺物 (2)	43	第 71 図 第 2 号住居跡出土遺物	116
第 28 図 第 7 号住居跡出土遺物 (3)	44	第 72 図 第 3 号住居跡平・断面図 (L=39.5m)	118
第 29 図 第 7 号住居跡出土遺物 (4)	45	第 73 図 第 3 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.5m)	118
第 30 図 第 7 号住居跡出土遺物 (5)	46	第 74 図 第 3 号住居跡出土遺物	119
第 31 図 第 7 号住居跡出土遺物 (6)	47	第 75 図 第 4 号住居跡平・断面図 (L=39.7m)	121
第 32 図 第 7 号住居跡出土遺物 (7)	48	第 76 図 第 4 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.7m)	121
第 33 図 第 7 号住居跡出土遺物 (8)	49	第 77 図 第 4 号住居跡出土遺物 (1)	122
第 34 図 第 7 号住居跡出土遺物 (9)	50	第 78 図 第 4 号住居跡出土遺物 (2)	123
第 35 図 第 7 号住居跡出土遺物 (10)	51	第 79 図 第 5 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	125
第 36 図 第 8 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	54	第 80 図 第 5 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.6m)	125
第 37 図 第 8 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.6m)	54	第 81 図 第 5 号住居跡出土遺物	126
第 38 図 第 8 号住居跡出土遺物	55	第 82 図 第 6 号住居跡平・断面図 (L=39.5m)	127
第 39 図 第 9 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	56	第 83 図 第 6 号住居跡土器個別分布及び遺物出土図 (L=39.5m)	127
第 40 図 第 9 号住居跡出土遺物	56	第 84 図 第 6 号住居跡出土遺物	128
第 41 図 第 10 号住居跡平・断面図 (L=39.6m)	59	第 85 図 調査区出土遺物 (1)	134
第 42 図 第 10 号住居跡出土遺物	59	第 86 図 調査区出土遺物 (2)	135
第 43 図 第 11 号住居跡平・断面図 (L=39.9m)	61	第 87 図 調査区出土遺物 (3)	136
第 44 図 第 11 号住居跡出土遺物	61	第 88 図 調査区出土遺物 (4)	137

第89図	調査区出土遺物(5) ……………	138	第96図	第26号住居跡掘り方平・断面図(L=38.5m) ……………	149
第90図	調査区出土遺物(6) ……………	139	第97図	第26号住居跡出土遺物 ……………	151
第91図	調査区出土遺物(7) ……………	140	第98図	調査区出土遺物 ……………	153
第92図	越後山遺跡(第6次)調査位置図(S=L/2500) ……………	146	第99図	越後山遺跡第11号土坑出土大珠実測図 ……………	156
第93図	試掘調査トレンチ配置図(S=L/200) ……………	147	第100図	丸山台遺跡第5号土坑出土有孔垂飾実測図 ……………	156
第94図	第6次調査遺構全体配置図 ……………	148	第101図	越後山遺跡第11号土坑出土大珠分析結果 ……………	158
第95図	第26号住居跡平・断面図(L=38.5m) ……………	149	第102図	丸山台遺跡第5号土坑出土有孔垂飾分析結果 ……………	158

挿 表 目 次

第1表	市内遺跡跡一覧表 ……………	4	第6表	土坑出土土器観察表 ……………	110
第2表	白子川中・下流域の遺跡一覧表 ……………	14	第7表	ピット出土土器観察表 ……………	112
第3表	第1号ブロック出土土器観察表 ……………	25	第8表	調査区出土土器観察表 ……………	141
第4表	土坑観察表 ……………	97	第9表	調査区出土土器観察表 ……………	144
第5表	ピット観察表 ……………	98	第10表	X線回折装置の設定 ……………	157

図 版 目 次

図版 1	昭和22年代の和光市土地利用動向 昭和22年米軍撮影空中写真(国土地理院所蔵)
図版 2	越後山遺跡(第2次) 遺跡透景/調査区全景
図版 3	越後山遺跡(第2次) 調査区近景(北西から)/調査区近景(南東から)
図版 4	越後山遺跡(第2次) 第1号ブロック/旧石器時代トレンチ配置状況/第1号礎群(1)/基本層序/作業風景
図版 5	越後山遺跡(第2次) 第1号礎群(2)/第1号ブロック出土遺物
図版 6	越後山遺跡(第2次) 第7号住居跡完備/第7号住居跡が(F1、F2)断面/第7号住居跡が(F3)断面/第7号住居跡遺物出土状態(1)
図版 7	越後山遺跡(第2次) 第7号住居跡遺物出土状態(2)
図版 8	越後山遺跡(第2次) 第8号住居跡完備/第8号住居跡遺物出土状態/第8号住居跡土層堆積状態/第9号住居跡/第9号住居跡が
図版 9	越後山遺跡(第2次) 第10号住居跡完備/第11号住居跡
図版 10	越後山遺跡(第2次) 第12号住居跡/第13号住居跡
図版 11	越後山遺跡(第2次) 第12号住居跡が/第12号住居跡埋壁/第13号住居跡埋壁/第25号住居跡

- 図版 12 越後山遺跡（第2次）
第25号住居跡埋裏・P4/第8号土坑/第1号土坑/第13号土坑
- 図版 13 越後山遺跡（第2次）
第15号土坑/第24号土坑/第38号土坑/第11号土坑/第11号土坑遺物出土状態/第11・16号土坑
- 図版 14 越後山遺跡（第2次）
土坑群（S・T-8・9グリッド付近）/第2号土坑断面/第5号土坑断面/第9号土坑断面/
第48・50号土坑断面
- 図版 15 越後山遺跡（第2次）
第2～5・69号土坑/第9・14・18号土坑/第20号土坑/第12号土坑/第23・34号土坑
- 図版 16 越後山遺跡（第2次）
第32号土坑/第46・47号土坑/第51号土坑/第56号土坑
- 図版 17 越後山遺跡（第2次）
土坑群（U・V-5グリッド付近）/遺跡見学会
- 図版 18 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（1）
- 図版 19 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（2）
- 図版 20 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（3）
- 図版 21 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（4）
- 図版 22 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（5）
- 図版 23 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（6）
- 図版 24 越後山遺跡（第2次）
第7号住居跡出土遺物（7）/第8号住居跡出土遺物
- 図版 25 越後山遺跡（第2次）
第9号住居跡出土遺物/第10号住居跡出土遺物/第11号住居跡出土遺物
- 図版 26 越後山遺跡（第2次）
第12号住居跡出土遺物/第13号住居跡出土遺物
- 図版 27 越後山遺跡（第2次）
第24号住居跡出土遺物/第25号住居跡出土遺物/土坑出土遺物（1）
- 図版 28 越後山遺跡（第2次）
土坑出土遺物（2）
- 図版 29 越後山遺跡（第2次）
土坑出土遺物（3）
- 図版 30 越後山遺跡（第2次）
土坑出土遺物（4）
- 図版 31 越後山遺跡（第2次）
土坑出土遺物（5）/ピット出土遺物
- 図版 32 越後山遺跡（第2次）
第2号住居跡完照/第2号住居跡出土遺物状態/第2号住居跡が跡/第2号住居跡土層堆積状態/第2号住居跡が断面
- 図版 33 越後山遺跡（第2次）
第3号住居跡遺物出土状態/第4号住居跡遺物出土状態
- 図版 34 越後山遺跡（第2次）
第4号住居跡完照/第4号住居跡土層堆積状態/第4号住居跡掘り方/第4号住居跡貯蔵穴断面/第5号住居跡完照

- 図版 35 越後山遺跡（第2次）
第6号住居跡完顔 / 第6号住居跡遺物出土状態 / 第6号住居跡土層堆積状態 / 第6号住居跡9跡 / 第6号住居跡9跡完顔
- 図版 36 越後山遺跡（第2次）
第2号住居跡出土遺物 / 第3号住居跡出土遺物 / 第4号住居跡出土遺物（1）
- 図版 37 越後山遺跡（第2次）
第4号住居跡出土遺物（2）
- 図版 38 越後山遺跡（第2次）
第5号住居跡出土遺物 / 第6号住居跡出土遺物
- 図版 39 越後山遺跡（第2次）
調査区出土遺物（1）
- 図版 40 越後山遺跡（第2次）
調査区出土遺物（2）
- 図版 41 越後山遺跡（第2次）
調査区出土遺物（3）
- 図版 42 越後山遺跡（第2次）
調査区出土遺物（4）
- 図版 43 越後山遺跡（第2次）
調査区出土遺物（5）
- 図版 44 越後山遺跡（第6次）
第26号住居跡完顔 / 第26号住居跡検出状況 / 第26号住居跡9跡 / 第26号住居跡掘り方 / 第26号住居跡貯蔵穴
- 図版 45 越後山遺跡（第6次）
第26号住居跡出土遺物 / 調査区出土遺物

I 市域の地形と遺跡

1. 市域の地形

和光市は、埼玉県南西部の荒川右岸に位置し、北は戸田市、西は朝霞市、南は東京都練馬区、東は東京都板橋区と隣接している。

和光市の地形は、市の北部を流れる荒川により形成された沖積低地（荒川低地）と武蔵野台地北東端にあたる洪積台地とに分けられる。低地部の標高は5～6m、台地部の標高は27～40m程で南の台地奥へ行くに従い高くなっている。

市内には中小河川が流れており、特に東側を流れる白子川と西側を流れる越戸川は大きな谷を形成し、行政的、地形的な区分の境ともなっている。その他、市内の中心部を流れる谷戸川は、谷中川と合流し蛇行しながら越戸川にそそいでいる。市内の台地は、荒川も含めこれ等の河川により浸食が激しく、多くの小支谷が形成されている。そのため、谷に挟まれた台地は幅の狭い複雑な形状となっている。

また、河川近くの崖地では湧水が各所で見られ、湧き水公園や寺社の池として現在も親しまれている。

2. 市域の遺跡

現在和光市内で確認されている遺跡は43カ所であり、荒川低地の自然堤防上に位置する榎堂遺跡（No.23）以外はすべて台地上に位置している。

遺跡の主な分布状況は、荒川低地に面した崖線上、白子川左岸の崖線上、越戸川・谷中川・谷戸川の支谷に面した小規模な台地上に分布している。

市内の旧石器時代の主な遺跡は、花ノ木遺跡（No.2）、四ツ木遺跡（No.4）、午王山遺跡（No.5）、柿ノ木坂遺跡（No.11）、城山南遺跡（No.18）、水久保遺跡（No.25）、妙蓮寺遺跡（No.32）、仏ノ木遺跡（No.36）が存在し、礫群のほかナイフ形石器や各種石器の集中ブロックが検出されている。特に花ノ木遺跡、柿ノ木坂



第1図 市内の地形と主要遺跡概略図

遺跡、仏ノ木遺跡ではVI～VII層での文化層が確認されている。また、城山南遺跡では第III層中から有樋型の尖頭器が検出されている。

縄文時代の主な遺跡は、四ツ木遺跡、柿ノ木坂遺跡、吹上遺跡・吹上貝塚（No.13・16）、市場峡・市場上遺跡（No.17）、城山南遺跡、白子宿上遺跡（No.19）、丸山台遺跡（No.24）、水久保遺跡、義名山遺跡（No.27）、庚塚遺跡（No.30）、妙蓮寺遺跡、越後山遺跡（No.41）、西越後山遺跡（No.42）が存在する。

早期では、城山南遺跡、白子宿上遺跡で撚糸文土器が出土し、市場峡・市場上遺跡、城山南遺跡、白子宿上遺跡、西越後山遺跡では、炉穴と貝殻痕文系土器が検出されている。

前期では、白子宿上遺跡で花積下層式土器と住居跡が検出され、吹上遺跡では黒浜式期の住居内貝塚、市場峡・市場上遺跡では黒浜式・諸磯式期の集落と同期の住居内貝塚が検出された調査区がある。

中期では、完形・半完形の土器が住居内からまとめて出土したことにより「吹上パターン」が提唱された学史的にも知られている吹上貝塚のほか、水久保遺跡・城山南遺跡で住居跡、庚塚遺跡・妙蓮寺遺跡では、勝坂から加曾利E式期の集落が検出され、越後山遺跡では、硬玉製大珠が土坑から検出されている。

後・晩期では、義名山遺跡が称名寺式期を主とする集落で、柿ノ木坂遺跡、丸山台遺跡、白子宿上遺跡が称名寺から堀之内I式期の集落である。四ツ木遺跡、吹上遺跡では検出例が少ない加曾利Bから安行式期の集落が検出されている。

弥生時代から古墳時代前期の主な遺跡は、花ノ木遺跡、峯前遺跡（No.3）、四ツ木遺跡、午王山遺跡、吹上遺跡、妙典寺遺跡（No.14）、市場峡・市場上遺跡、白子宿上遺跡、城山台遺跡（No.22）、榎堂遺跡、越之上遺跡（No.39）、越後山遺跡が存在する。弥生時代中期の遺構と遺物を伴う遺跡は、現在のところ花ノ木遺跡、午王山遺跡の2遺跡のみであるが、吹上遺跡では土器片のみ出土している。弥生時代後期では、環濠集落が目を引き、花ノ木遺跡では外郭環状道路を境に西側では二条の環濠が北西の上之郷遺跡（No.1）へ延びるように検出され、東側では一条の環濠が北東方向へ延びるように検出されている。午王山遺跡では独立丘上に二重ないし三重の環濠が展開している。吹上遺跡では一条の環濠が70m程検出されている。周溝墓は前述の環濠を伴う3遺跡のほか、四ツ木遺跡、下里遺跡（No.12）、吹上原遺跡（No.15）、白子宿上遺跡、低地の榎堂遺跡で検出されている。

古墳時代中期から後期の主な遺跡は、上之郷遺跡、花ノ木遺跡、四ツ木遺跡、午王山遺跡、下里遺跡、吹上遺跡、妙蓮寺遺跡が存在し、上之郷遺跡、吹上遺跡では5世紀代の住居跡が数軒検出されている。6世紀以降は、各遺跡での住居は軒数が多く集落を成している。現在のところ市内には、墳丘を持つ古墳は確認されていないが、周溝のみであるが、吹上原遺跡で円形の周溝が検出されている。横穴墓では、吹上原横穴墓群（No.20）、市場峡・市場上遺跡で7世紀後半代の横穴墓が検出されている。

奈良・平安時代の主な遺跡は、花ノ木遺跡、峯前遺跡、仏ノ木遺跡、吹上遺跡、市場峡・市場上遺跡、榎堂遺跡、漆台遺跡（No.43）が存在する。8世紀代の遺構は少なく、吹上遺跡で住居跡が9軒程検出されているほか、花ノ木遺跡の事業団調査分で住居跡が3軒、仏ノ木遺跡で墓が1基検出されている。9世紀代の住居跡は数多く検出され、特に新倉2丁目の花

ノ木遺跡から漆台遺跡にかけての200×700m程の台地上は一つの大きな集落と考えることができる。中でも花ノ木遺跡では、1軒の焼失住居から全国で3例目となる火焚斗のほか落とし鍵、須恵器壺等が出土し、埼玉県指定文化財に一括指定されている。

中世・近世では、数ヶ所の遺跡で箱葉研堀状の溝が検出されているが、城館跡等は現在のところ確認されていない。しかし午王山遺跡では、当時の設置状況が窺われる45基の板碑群が発見され、花ノ木遺跡では中世末から近世の墓壇群が発見されており、妙蓮寺遺跡では、中世寺院との関連が窺われる地下式墳のほか、火葬墓、土坑が検出されている。

市内の遺跡の時代による分布状況は、旧石器時代は台地の崖線上、縄文時代は市域全般の台地上、弥生時代は白子川左岸の台地上と荒川右岸の台地上、古墳時代は荒川右岸の台地上、平安時代は新倉2丁目の台地上に主な分布がみられ、弥生時代と平安時代の遺跡分布には、密集した状況が窺える。

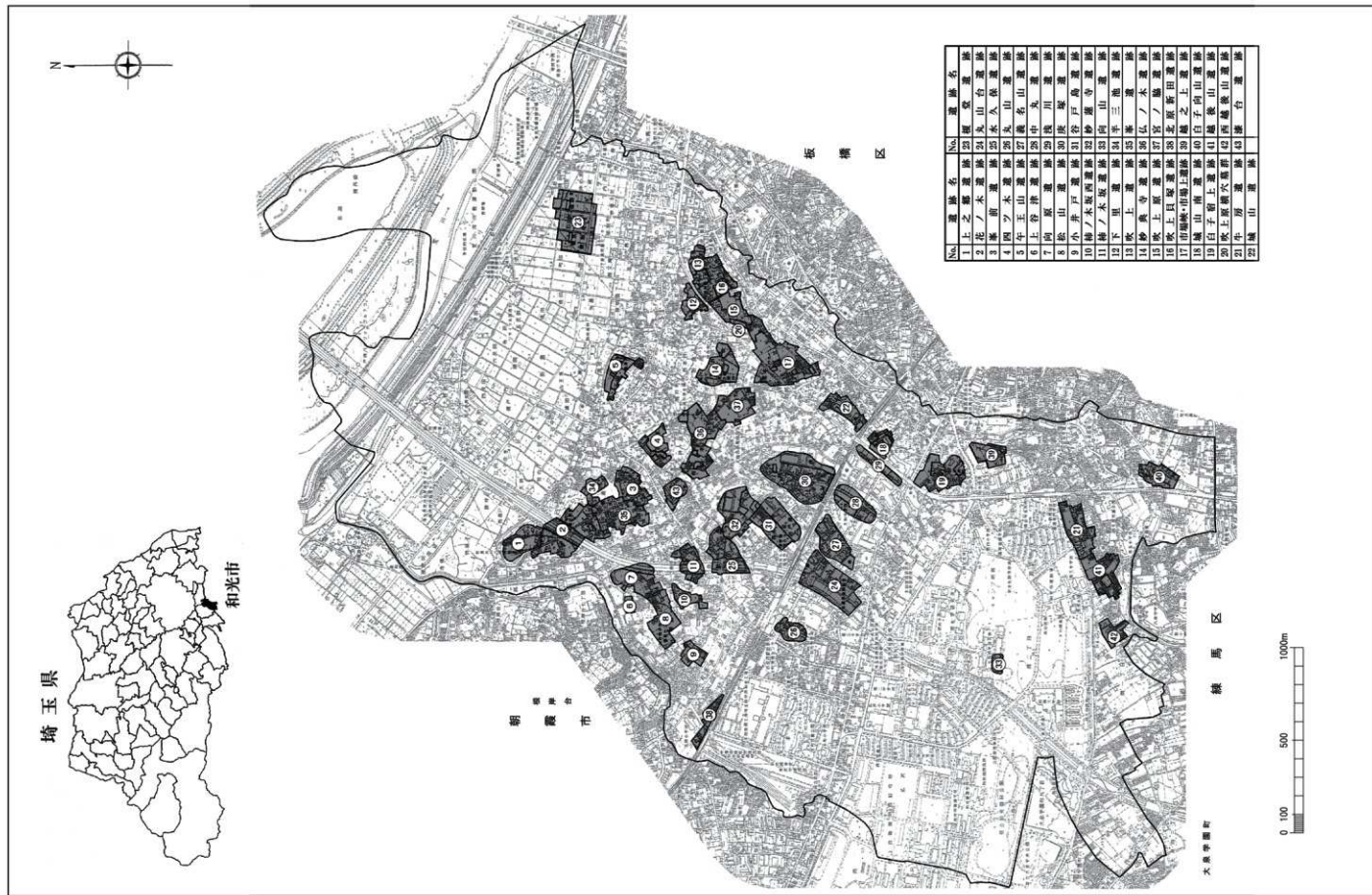
(鈴木一郎)

第1表 市内遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代・時期	所在地
1	上之郷	集	弥(後)・古	新倉2丁目3207～3210外
2	花ノ木	集	旧・縄・弥・古・奈・平・中・近	新倉2丁目3440～3443外
3	峯前	集	旧・弥・古・平	新倉2丁目2987～2989外
4	四ツ木	集	旧・縄(早～晩)・弥・古・平・近	新倉3丁目2925～2928外
5	午王山	集	旧・縄・弥・古・平・中・近	新倉3丁目2829～2834外
6	上谷津	集	縄(中)・古・平	新倉1丁目3937外
7	向原	集	縄(中)・古	新倉1丁目3848～3854外
8	松山	集	縄(中)・古	新倉1丁目4012～4020外
9	小井戸	集	縄(後)・弥(後)	新倉1丁目4252～4255外
10	柿ノ水坂西	集	縄(中)・古	新倉1丁目3786～3791外
11	柿ノ水坂	集	旧・縄(中・後)・弥・古・平	新倉1丁目3764～3773外
12	下里	集	縄・弥(後)・古・奈・近	下新倉4丁目4424外
13	吹上	集・貝	旧・縄・弥・古・奈・平・中・近	白子3丁目4417～4421外
14	妙興寺	集	縄・弥(後)・古・近	下新倉4丁目2045～2059
15	吹上原	集	旧・縄・弥・古・中・近	白子3丁目4445～4448外
16	吹上貝塚	集・貝	縄(前・中)	白子3丁目4376外
17	市場峠・市場上	集・貝・横	旧・縄(早～後)・弥・古・平・中・近	白子3丁目589～595外
18	城山南	集	旧・縄・弥・古・中	白子2丁目1043～1048外
19	白子宿上	集・貝	縄(早～後)・弥・古・平・中・近	白子2丁目1101～1107外
20	吹上原横穴墓群	横	古(後)	白子3丁目178,443,446,4外
21	牛房	集	縄(中)・弥・古	南1丁目2386～2391外
22	城山	集	縄・弥・古・平・中・近	白子3丁目735～743外
23	櫻堂	集	縄・弥(後)・古・平・中	下新倉6丁目133外
24	丸山台	集	旧・縄(後)・古・奈・平・近	丸山台2丁目25-1外
25	水久保	集	旧・縄(中)・弥・古・奈・平・中	新倉1丁目3673～3717外
26	丸山	集	縄・平・近	丸山台1丁目11-3外
27	義名山	集	縄(後)・平	丸山台2丁目23-1外
28	中丸	集	縄	丸山台2丁目8-11外
29	淺川	集	縄・平	丸山台3丁目10-9外
30	庚塚	集	旧・縄(中)・古(前)・中・近	下新倉2丁目1376～1380外
31	谷戸島	集	縄(中)・弥(後)・中・近	下新倉2丁目1233～1238外
32	妙蓮寺	集	旧・縄(中)・古(前・後)・中・近	下新倉2丁目1124外
33	向山	集	縄(中)	南2丁目1535外
34	半三池	集	縄・弥(後)・古	新倉2丁目3009～3012外
35	峯	集	旧・縄(早)・弥(後)・古・平・近	新倉2丁目3466～3474外
36	弘ノ木	集	旧・縄(中)・弥・奈・平・中・近	下新倉3丁目906外
37	宮ノ脇	集	縄(前)・古・平	下新倉3丁目1202外
38	北原新田	集	縄・弥(後)	新倉1丁目4324～4327外
39	越之上	集	縄(前・中)・弥(後)	白子2丁目1363～1378外
40	白子向山	集	縄(前・中)・弥(後)・平・中	白子1丁目1959～1961外
41	越後山	集	旧・縄(前・中)・弥(後)・古	南1丁目2447～2455外
42	西越後山	集	縄(早)・弥・古(前)・中	南1丁目2540～2545外
43	漆台	集	縄・弥・平・近	新倉2丁目3581～3605外

種別 集:集落跡 貝:貝塚 横:横穴墓

時代 旧:旧石器 縄:縄文 弥:弥生 古:古墳 奈:奈良 平:平安 中:中世 近:近世、()内は時期



第2図 和光市遺跡分布図

3. 越後山遺跡の概観

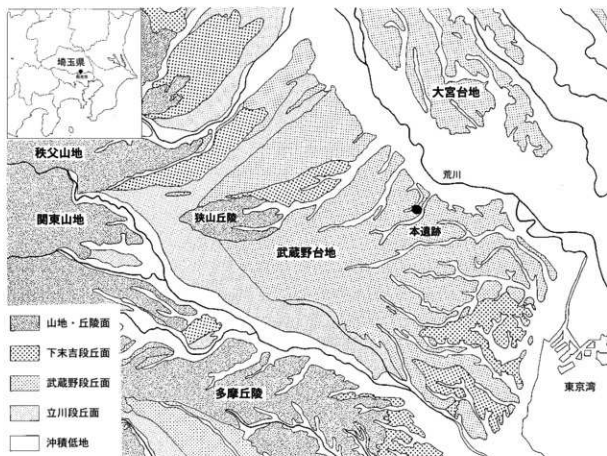
遺跡の位置 (第2～4図)

越後山遺跡は武蔵野台地の北東縁、埼玉県和光市に所在する。和光市の地形は大まかにみるとこの武蔵野台地と荒川沿岸の沖積低地(荒川低地)に大別され、その大部分を武蔵野台地が占めている。

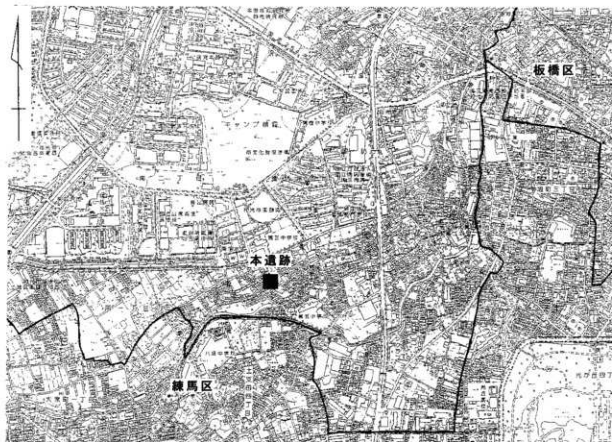
武蔵野台地は、古多摩川の扇状地として形成された台地で、北西を荒川の支流である入間川、北東を荒川、南を多摩川、西を関東山地に画された東西約50km、南北約40kmにおよぶ国内最大級の洪積台地の一つである。台地内部は時期の異なる複数の段丘面から形成されており、古い方から下末吉面、武蔵野面、立川面と続き、本市域はこのうちの武蔵野段丘上(武蔵野面)に位置している。

越後山遺跡は、市内南部、和光市南1丁目2447～2465外に所在し、現和光市駅から南へ約1.8kmに位置する。遺跡南側には、荒川の支流である新河岸川に合流する白子川が流下しており、本遺跡はその左岸緩斜面上に立地する。遺跡の標高は約36～40m、低地との比高差は約15mを測り、白子川の谷に沿った台地の縁辺は、南西側は急崖状を呈し、南東側は台地が浅く括れ沖積地から続く緩やかな斜面地形が形成されている。

今回発掘調査を行った第2・第6次地点は、第2次地点が本遺跡西寄りの台地平坦部、第6次地点がやや北東側に奥まった台地緩斜面部に位置する。



第3図 武蔵野台地と周辺地形区分図 (S = 1/400000)



第4図 遺跡位置図 (S=1/15000)

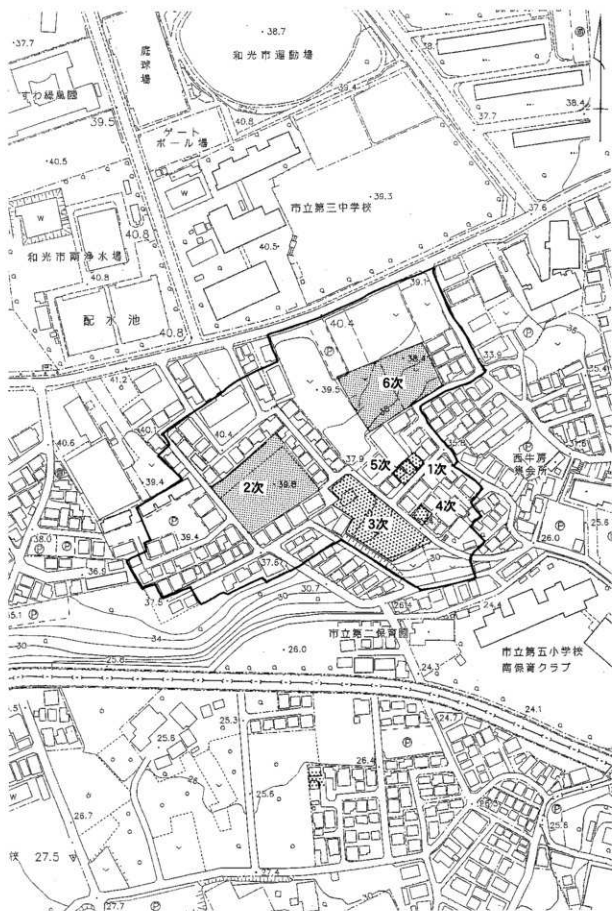
これまでの調査概要 (第5・6図)

越後山遺跡は周知の和光市埋蔵文化財包蔵地No11-041に該当する遺跡で、1999年に第1次調査が実施され、以後これまでに6次にわたる発掘調査が実施されている。ここでは今回の報告に先立ちこれまでに確認された各地区での調査成果を簡単に概観しておきたい。

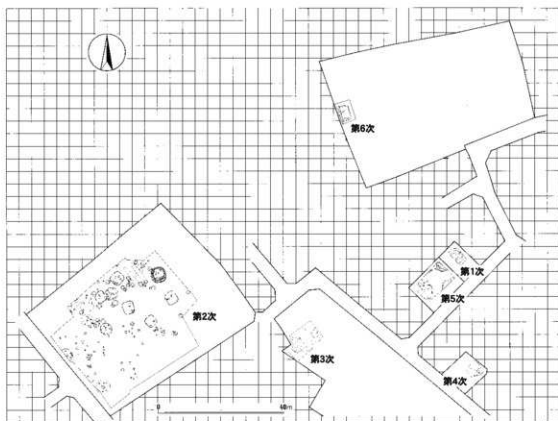
第1・4・5次調査は本道跡南東側で実施された。3地点とも個人住宅建て替えに伴うもので、第1・第5次地点が台地の平坦部、第4次地点が台地の平坦部から急傾斜地へ至る間の緩やかな斜面上に位置する。この調査では第1次地点で縄文時代中期後半の住居跡1軒、西側に隣接する第5次地点で縄文時代中期後半の住居跡2軒、土坑・ピット等9基、弥生時代後期後半の住居跡4軒、古墳時代前期の住居跡1軒、第4次地点で縄文時代中期後半の住居跡1軒、土坑3基がそれぞれ検出された(鈴木2002、2004)。

第3次調査は共同住宅建設に伴う調査で、本書報告の第2次地点から約30m南東の台地平坦部で実施された。当調査では縄文時代中期後半の住居跡1軒、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の住居跡1軒が検出された(鈴木2006)。

今回の第2・第6次調査について別項で詳細を詳述するが、第2次地点で縄文時代中期後半の住居跡9軒、土坑・ピット等111基、古墳時代前期初頭の住居跡5軒、第6次調査で古墳時代前期初頭の住居跡1軒が検出され、このほか第2次地点では旧石器時代の石器集中ブロック1ヶ所、礫群1基が検出された。



第5図 越後山道跡第1～6次調査位置図 (S=1/2500)



第6図 越後山遺跡第1～6次調査遺構全体配置図 (S=1/1200)

以上がこれまでに確認された本遺跡における大まかな調査概要である。遺跡全体に比べれば調査範囲が狭く不明な点が多いが、これらの調査成果から集落の拡がりや推定すると、弥生時代から古墳時代にかけての集落は白子川崖線に沿った台地縁辺の平坦部分を南側限界にして北側台地上に広く分布しているものと思われる。一方縄文時代では東西約130mにわたって遺構の分布が確認されている。中でも西寄りの第2次地点(本書報告)で残された土地利用痕跡の在り方は、いわゆる環状あるいは馬蹄形状の集落景観を呈し、本地点がそのような集落の中心付近に位置している様相を呈している。ただ遺跡全体でみると不明な点も多く、遺跡東半、第1・3～5次調査で検出された該期の集落がこの西側に展開する集落の範囲に含まれるのか、あるいは分離されて「双環状集落」のような二つの異なる集落が存在するかなど、その全体像については今後の調査を待たないと明らかにできない。

周辺の遺跡 (第7・8図、第2表)

本遺跡の立地する白子川流域には、旧石器時代から近・現代に至る土地利用痕跡が連続と残されており、とりわけ台地上や台地縁辺には旧石器から古墳時代の遺跡が集中している。第7・8図及び第2表は、『練馬区遺跡地図』及び『板橋区史』、朝霞市『発掘調査報告書』をもとに、本遺跡と遺跡構成の類似する白子川中・下流域を中心に作成した各時代の遺跡分布図及び該当遺跡の一覧表である。以下には、周辺に分布する主な遺跡の概要を時代ごとに説明する。

旧石器時代 練馬区の比丘尼橋遺跡 (No.1)、愛宕下遺跡 (No.2)、丸山遺跡 (No.4)、外かん道路関連遺跡 (No.6)、越後山西遺跡 (No.7)、大泉中里遺跡 (No.8)、和光市の城山南

遺跡 (No.16)、吹上遺跡 (No.21)、板橋区の成増一丁目遺跡 (No.30)、成増百向遺跡 (No.31)、成増との山遺跡 (No.32)、菅原神社台地上遺跡 (No.33)、赤塚氷川神社北方遺跡 (No.34) が挙げられる。各遺跡からは礫群・石器集中ブロックが検出されており、比丘尼橋遺跡では立川ロームX層から水晶製ナイフ形石器が、城山南遺跡ではⅢ層から有縄型尖頭器が出土している。成増百向遺跡ではIV下層とIX層から焼礫が出土した。

縄文時代 草創期は練馬区の外かん道路関連遺跡の堅穴状遺構から押圧縄文系土器が出土し、石器製作跡が検出された。和光市の城山遺跡 (No.17) では爪形文系土器が出土している。早期は練馬区の大泉中里遺跡、稲荷山遺跡、和光市の西越後山遺跡 (No.11)、越之上遺跡 (No.14)、白子宿上遺跡 (No.15)、城山南遺跡、市場峡・市場上遺跡 (No.18) から早期後半の住居跡や炉穴が検出され、板橋区の成増一丁目遺跡からは早期末の堅穴状遺構が検出された。前期は練馬区のアボ下遺跡、和光市の城山遺跡、白子宿上遺跡、城山南遺跡、市場峡・市場上遺跡、吹上遺跡、板橋区の成増百向遺跡、菅原神社台地上遺跡が挙げられる。アボ下遺跡、白子宿上遺跡、吹上遺跡、菅原神社台地上遺跡からは住居跡が検出された。白子宿上遺跡では花積下層式土器が出土し、市場峡・市場上遺跡では諸磯式期、吹上遺跡からは黒浜式期の住居内貝層が検出された。中期は練馬区のハヶ谷戸遺跡 (No.3)、和光市の西越後山遺跡、白子向山遺跡 (No.13)、白子宿上遺跡、城山南遺跡、吹上原遺跡 (No.19)、吹上貝塚遺跡 (No.20)、吹上遺跡、板橋区の菅原神社台地上遺跡が挙げられる。ハヶ谷戸遺跡からは住居跡のほか墓坑が検出されている。和光市では「吹上パターン」が提唱された吹上貝塚遺跡のほか、白子宿上遺跡、城山南遺跡、吹上原遺跡では勝坂式から加曾利E式期の住居跡が検出された。後期・晩期は和光市の白子宿上遺跡、吹上遺跡が挙げられる。白子宿上遺跡では称名寺式、堀之内式期の住居跡が検出され、吹上遺跡では安行式期の住居跡が検出されている。

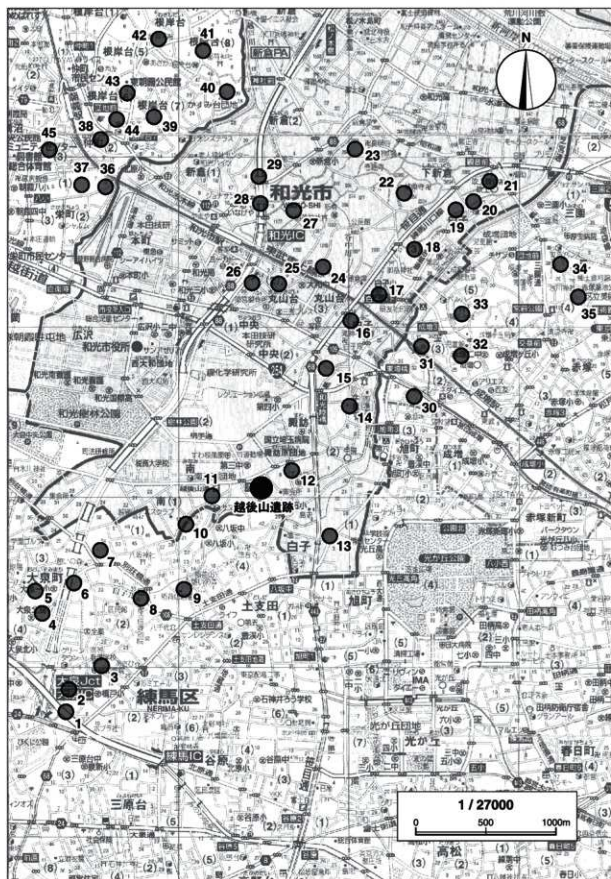
弥生時代 中期後半から後期にかけての集落が確認されており、練馬区の丸山遺跡、外かん道路関連遺跡、越後山遺跡、和光市の西越後山遺跡、越之上遺跡、白子宿上遺跡、城山遺跡、市場峡・市場上遺跡、吹上遺跡、板橋区の成増一丁目遺跡、成増百向遺跡、成増との山遺跡、菅原神社台地上遺跡、赤塚氷川神社北方遺跡が挙げられる。赤塚氷川神社北方遺跡では宮ノ台式期の住居跡が検出されている。外かん道路関連遺跡では後期の住居跡と方形周溝墓などが検出された。方形周溝墓の主体部からはガラス玉や鉄剣などが、周溝からは完形の壺が出土した。また、大量の木製品・建築部材などが出土している。吹上遺跡では環濠を伴う集落が検出された。遺物は後期の土器が主体で、指輪と思われる青銅製の環状品が出土している。菅原神社台地上遺跡は後期の住居跡が300棟前後検出された大規模な集落である。

古墳時代 練馬区の外かん道路関連遺跡、越後山遺跡、和光市の牛房遺跡 (No.12)、白子宿上遺跡、市場峡・市場上遺跡、吹上遺跡、板橋区の成増一丁目遺跡、菅原神社台地上遺跡、赤塚氷川神社北方遺跡が挙げられる。白子宿上遺跡から円形周溝墓が、菅原神社台地上遺跡からは方形周溝墓が検出されている。また、発掘調査は実施されていないが、牛房遺跡から表面採取において五領式期の遺物が出土している。吹上遺跡では5世紀代の住居跡が検出されている。赤塚氷川神社北方遺跡では住居跡から朝鮮半島南部で生産されたと思われる鉄鋌が出土している。菅原神社台地上遺跡では円墳2基が検出されており、周溝から6世紀の須恵器などが出土している。

(前田秀則・坂口由加里)



第7図 白子川中・下流域遺跡分布図(1) (S=1/27000)
 (東京都板橋区「西原遺跡」(S=1/30000)地形図を改変)



第 8 図 白子川中・下流域遺跡分布図 (2) (S = 1/27000)

第2表 白子川中・下流域の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	所在地
1	比丘尼橋	旧・縄・近	練馬区大泉町2-1他
2	愛宕下	旧・縄	練馬区大泉町4-3
3	ハッ谷戸	縄	練馬区大泉町2-17他
4	丸山	旧・縄・弥・奈・平・中	練馬区大泉町3-5他
5	橋戸A地点	縄	練馬区大泉町3-17他
6	丹心道路関連	旧・縄・弥・古・奈・平・中・近	練馬区大泉町3他
7	越後山西	旧・縄	練馬区大泉町1-43他
8	大泉中里	旧・縄	練馬区大泉町2-56他
9	稲荷山	縄	練馬区大泉町1-3他
10	越後山	縄・弥・古	練馬区大泉町1-19他
11	西越後山	縄・弥・古・中	和光市南1丁目2540～2545外
12	牛房	縄・弥・古	和光市南1丁目2386～2391外
13	白子向山	縄・弥・平・中	和光市白子1丁目1959～1961外
14	越之上	縄・弥	和光市白子2丁目1363～1378外
15	白子宿上	縄・弥・古・平・中・近	和光市白子2丁目1101～1107外
16	城山南	旧・縄・弥・古・中	和光市白子2丁目1043～1048外
17	城山	縄・弥・古・平・中・近	和光市白子3丁目735～743外
18	市場峡・市場上	旧・縄・弥・古・平・中・近	和光市白子3丁目589～596外
19	吹上原	旧・縄・弥・古・中・近	和光市白子3丁目4445～4448外
20	吹上貝塚	縄	和光市白子3丁目4376外
21	吹上	旧・縄・弥・古・奈・平・中・近	和光市白子3丁目4417～4421外
22	妙典寺	縄・弥・古・近	和光市下新倉4丁目2045～2059外
23	四ツ木	旧・縄・弥・古・平・近	和光市新倉3丁目2925～2928外
24	庚塚	旧・縄・古・中・近	和光市下新倉2丁目1376～1380外
25	義名山	縄・平	和光市丸山台2丁目23-1外
26	丸山台	旧・縄・古・奈・平・近	和光市丸山台2丁目25-1外
27	妙蓮寺	旧・縄・古・中・近	和光市下新倉2丁目1124外
28	水久保	旧・縄・弥・古・奈・平・中	和光市新倉1丁目3673～3717外
29	柿ノ木坂	旧・縄・弥・古・平	和光市新倉1丁目3764～3773外
30	成増一丁目	旧・縄・弥・古	板橋区成増1丁目
31	成増百向	旧・縄・弥	板橋区成増2、3丁目
32	成増2の山	旧・縄・弥	板橋区成増3丁目
33	菅原神社台地上	旧・縄・弥・古・中	板橋区成増5丁目
34	赤塚水川神社北方	旧・縄・弥・古・中	板橋区赤塚4丁目
35	滝戸貝塚	縄	板橋区赤塚4丁目
36	堂野道第一	縄・古・中	朝霞市栄町2丁目
37	越戸	旧・縄・近	朝霞市栄町1丁目
38	原如・越戸第二	旧・縄・近	朝霞市仲町2丁目
39	東流山・水久保	縄	朝霞市根岸台7丁目
40	南ハッ谷戸	縄・弥・古・中	朝霞市根岸台7丁目
41	稲荷山・郷戸	旧・縄・弥・古・奈・平・中・近	朝霞市根岸台8丁目
42	新井前	縄・古・中	朝霞市根岸台4丁目
43	西流山第一	縄・古	朝霞市根岸台6丁目
44	西流山第二	縄・中	朝霞市根岸台6丁目
45	平沢・原如	旧・縄・中・近	朝霞市本町2、3丁目

時代 旧：旧石器 縄：縄文 弥：弥生 古：古墳 奈：奈良 平：平安 中：中世 近：近世

II 越後山遺跡第2次調査

1. 調査に至る経緯

平成11年4月6日および同年8月5日に土地所有者の 個人 より和光市教育委員会(以下、市教育委員会)に対し、和光市南1丁目2453番1、2453番3における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認調査についてそれぞれ依頼書が提出された。

これを受けて市教育委員会では当地が周知の越後山遺跡の範囲に該当することから、同年4月13日および9月1日に遺構の有無及び範囲等の確認を目的として試掘調査を実施した(第10図)。調査は、事業予定地に幅1m、長さ4~23mのトレンチを大小24本設定して行った。その結果、事業予定地の大部分が耕作の影響により攪乱を受けていたが、複数のトレンチから縄文時代の掘り込みと多数の土器片が検出され、当該地に埋蔵文化財が遺存することが確認された。

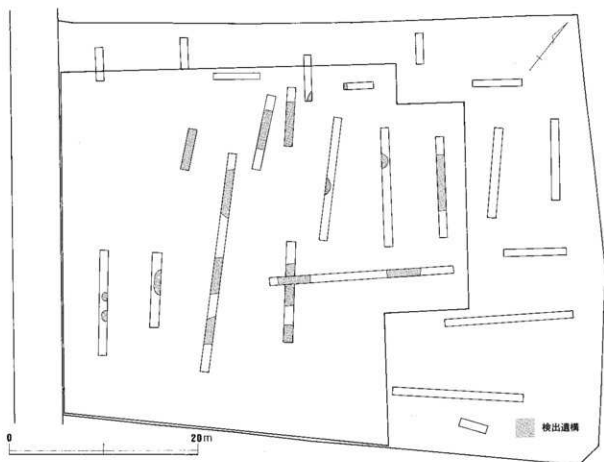
市教育委員会は 個人 にこれらの試掘調査の結果を報告し、 個人 と市教育委員会は遺跡の保存に関する協議を開始したが、遺跡の現状保存は困難とのことから本調査を行い記録保存の措置をとることとなった。調査範囲については、事業予定地約2200㎡のうち、試掘調査で遺構が確認された範囲を中心に約1300㎡を調査対象とし、調査期間は平成11年10月21日~平成12年2月25日までとした。

本調査は、和光市遺跡調査会が 個人 から委託を受けて実施した。(中岡貴裕)

2. 調査方法と発掘経過

調査方法 調査はグリッド法による平面発掘を行った。グリッドは国家座標値を基に調査区全域を網羅する4×4m四方のグリッドを設け、X軸(南北)を南側から算用数字(1~25)で、Y軸(東西)を西側からアルファベット(A~Y)で表記し、それらの組み合わせをグリッドの名称とした。

遺構の調査は、プラン確認後、種別ごとに検出された順に遺構番号を付し、原則として住居跡は土層観察用のベルトを「十」字状に設定して掘り下げ、土坑は半載して覆土の堆積状態・完掘状態等の記録を行った。遺物の取り上げは、遺構内出土遺物は極力出土位置を記録しながら取り上げ、遺構外については耕作による包含層の攪乱・削平が著しいためグリッド一括で取り上げた。また個体資料や同一個体片が纏まって出土した箇所および縄文時代の炉体土器、埋甕等については微細図を併用して作成した。一方ローム層中の調査は、道路敷設定範囲を調査対象に任意に2×2mのトレンチを設け、原則V層もしくはVII層上面まで掘り下げ遺構・遺物の有無を確認し、遺構もしくは遺物が認められた箇所は一部調査区を拡張した。実測作業は水糸方眼測量と平板測量を併用し、縮尺は全体図を1/200、遺構図面は原則1/20で記録した。写真撮影は実測記録に即して逐次行い、遺構の完掘状態、覆土の堆積状態、遺物の出土状況などを35mm判・中型カメラを使用して撮影し、これに中判カメラを併用した。空中写真撮影は外部委託した。標高の数値は東京湾水準(TP)を使用した。ベンチマー



第10図 試掘調査トレンチ配置図 (S=1/200)

ク (BM) は40.8mである。

発掘経過 発掘調査は平成11年10月21日から重機2台による表土除去作業から開始した。重機による掘り下げは、調査区の全面が近・現代の耕作の影響により攪乱を受けていたため、表土以下攪乱を除去した面、Ⅱ層上位(原地形面標高39.45m前後)もしくは場所によってはⅢ層上位、標高39.3m前後まで掘削した。同作業には7日を要し、29日に仮設事務所・トイレの設置、併せて発掘器材の搬入を行った。その後11月1日に杭打ちを外部委託にて行い、翌2日より人員導入による本格的な発掘調査を開始した。遺構の掘り下げは古墳時代の住居跡から着手し、第2・3・4号住居跡を11日に、第5・6号住居跡の調査を16日から開始した。18日に第2・3・6号住居跡の床面までの掘り下げを終え、土層観察・実測作業・写真撮影を行った。引き続き縄文時代の第7号住居跡の調査を19日から開始し、28日に最初の遺物取り上げを行った。第7号住居跡はいわゆる「吹上パターン」状に遺物が出土することから以後の掘り下げは順次遺物の出土位置を記録しながら掘り進めた。次いで翌29日に第8号住居跡、12月1日からは第9号住居跡の調査を開始した。第9号住居跡は炉跡のみ遺存しており、調査は柱穴の検出作業を中心に進めた。第4号住居跡を除く古墳時代の調査は、第2・3号住居跡が29日、第5・6号住居跡が12月3日に終了した。12月6日からは第4・7・8・9号住居跡の掘り下げと並行して、S・T-4・5グリッド、S・T-U-8・9グリッド、V-5グリッド、0・P-6・7グリッドに分布する土坑・ピットの調査に着手し、併せて周辺の遺構の検出作業を進めた。その結果、覆土は残っていなかったが第12・13号住居跡の炉跡と埋甕が検出された。次いで15日に第7号住居跡の土層図作成、同日第4号住居跡の実測作業、

写真撮影を終え、第7号住居跡は継続して炉跡・柱穴・周溝など住居施設の調査に移行した。年内の作業は12月27日まで行い、翌12月28日から翌年1月5日まで作業を中断した。

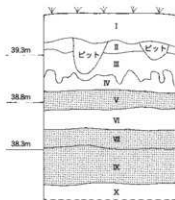
年初は1月6日から現地作業を開始し、継続して第7号住居跡の調査、並行してO・P・Q-2～4グリッド、S・T-2グリッドを中心に分布する土坑・ピットの掘り下げに着手し、1月18日に土坑・ピットの実測作業・写真撮影を終了した。調査区西半に分布する第10・11・12・13号住居跡の調査は、翌1月19日から開始した。第10・11号住居跡は掘り込みが認められたが、第12・13号住居跡は前述したように覆土が残っておらず、そのため炉跡・埋甕の調査と柱穴の検出作業を中心に進めた。1月22日に休日を利用して遺跡見学会を実施した。その後1月26日に第10・24・25号住居跡、31日に第11・13号住居跡の調査を終え、2月2日に空中写真撮影を行った。縄文時代の調査は翌3日に第7・12号住居跡の実測作業・写真撮影、7日に全体図作成を行い全て終了した。ローム層中の調査は2月14日から2月25日まで約10日間実施し、25日に現地における発掘業務を全て終了した。

最終的に検出された遺構は、旧石器時代のブロック1ヶ所、礫群1基、縄文時代の竪穴住居跡9軒、土坑・ピット等111基、古墳時代の住居跡5軒である。

3. 層序

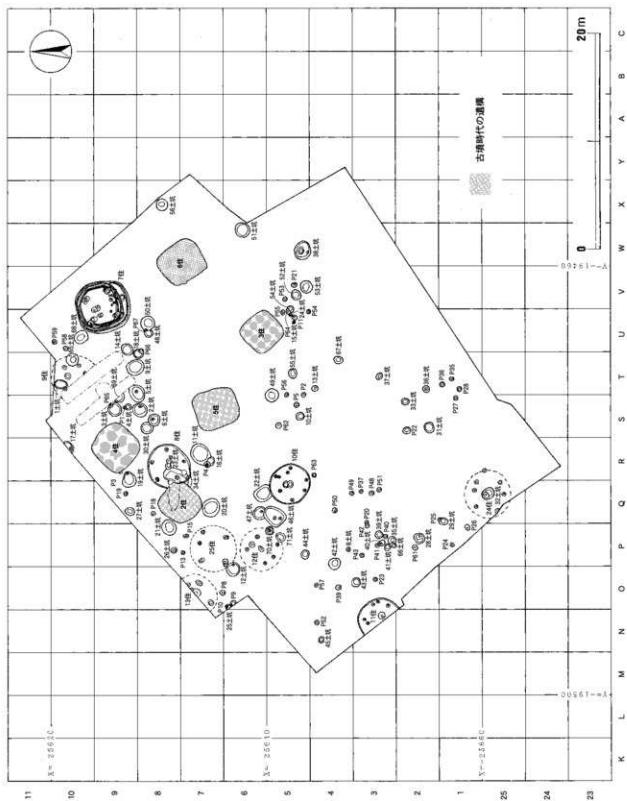
前述したように、調査区の全域が後世の耕作や攪乱により削平されていた。このため第II層（縄文時代の遺物包含層）もその際大きく削られており、場所によっては表土下が直接ロームに移行する区域も認められた。確認された文化層は縄文時代（第II層）1枚、旧石器時代（第III層下部からIV層中位）1枚の計2枚で、古墳時代については層的に捉えることが困難で遺構確認面は第II層に求めた。

- 第I層 黒褐色土 表土（耕作土）・攪乱層。
- 第II層 暗褐色土 縄文時代の遺物包含層。
ローム粒を多量、赤色粒子を少量含む。
- 第III層 黄褐色土 ソフトローム層。上位には褐色土が混在する。
- 第IV層 黄褐色土 ハードローム層。赤色粒子・黒色粒子を若干含む。
- 第V層 暗褐色土 立川ローム第I黒色帯に相当する。
- 第VI層 黄褐色土 ハードローム層。層上部において、始良丹沢バミス(AT)がブロック状に見られる。
- 第VII層 暗褐色土 立川ローム第II黒色帯上部に相当。
- 第IX層 暗褐色土 立川ローム第II黒色帯下部に相当。
- 第X層 黄褐色土 酸化鉄を若干含む。



第11図 基本層序 (S=1/40)

(前田秀則)



第12図 第2次調査遺構全体配置図

4. 検出された遺構と遺物

(1) 旧石器時代

概観

旧石器時代の調査では、調査区に対して15ヶ所試掘坑を設定して確認調査を実施した（第13図）。掘削深度はTP 8がV層中位、TP 1がX層上位、ほかはすべてVII層中まで行った。

その結果、2地点（TP 8・TP 9）で遺物の集中が認められ、個々に分析・分類を行いブロックと隣群に分けた。出土層位は隣群がIII層下部からIV層上位、ブロックがIV層上位から中位に分布の中心をもち層位的に重複する部分もあることから本遺跡ではそれらを第1文化層として捉えることとした。

第1文化層

ブロック

第1号ブロック（第15・16図・写真図版4）

V～X-5・6グリッドで検出された。平面分布は約5×3.5mの範囲に分布する。垂直分布は38.5～38.8mにかけて分布し、標高38.7m付近に分布のピークをもつ。遺物総数は33点で、石核1点、二次調整剥片5点、使用痕のある剥片3点、剥片22点で構成され、このほか礫2点が散在する。石器の石材は黒曜石14点、チャート17点で、接合は2個体1接合が2組認められた。

出土石器（第17図1～6、写真図版5）

二次調整剥片（1・2）

1・2はチャート製で、1は縦長の剥片である。打面は隣打面でも背面には主要剥離面と同方向の剥離痕がみられ、左側縁は折れ、欠損している。右側縁に二次加工が施されている。

2は横長不定形な剥片で、左側縁に二次加工が施されている。打面は複剥離面打面で、背面は主要剥離面に対し同方向、180度方向、90度方向と多方面の剥離痕で構成され、背面には礫面が残っている。

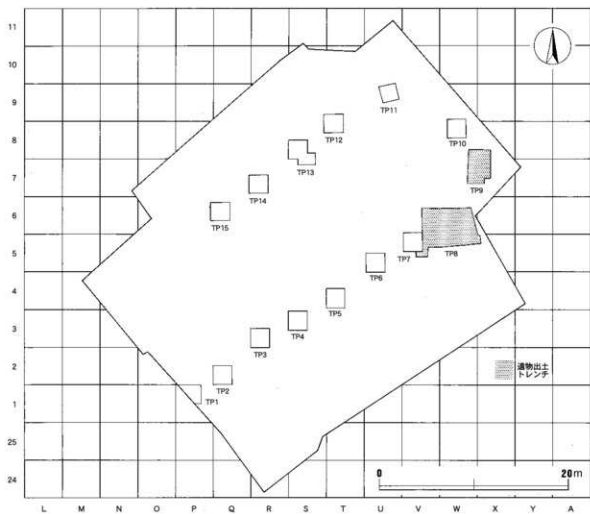
使用痕のある剥片（3・4・5）

3～5は不純物を含む黒色透明の黒曜石製で、4・5は横長不定形な剥片である。4は平坦打面を有し、背面構成は全て主要剥離面の方向と同方向である。5の背面には主要剥離面と同方向、180度方向、90度方向の剥離痕が認められる。3は打面側が欠損している。

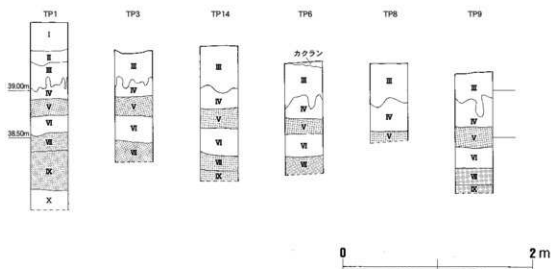
以上からこれらの剥片の剥離技術は、打面調整を施さず、頻繁に打面を移動しながら作出されていると考えられる。また自然面があまり認められないことから、剥片剥離作業の後半段階に作出された剥片と思われる。

石核（6）

6は不純物を含む黒色透明の黒曜石製。打面調整は施さず、打面・作業面を頻繁に入れ替えながら剥離が進行しており、主要剥離面上には、小形で横長不定形な剥片が作出された痕跡がみられる。



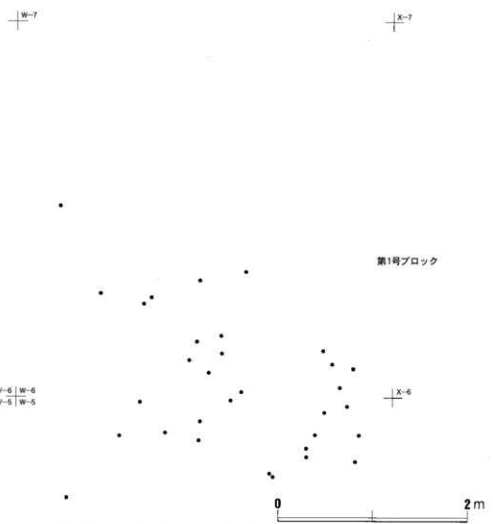
第13図 旧石器時代調査区設定図



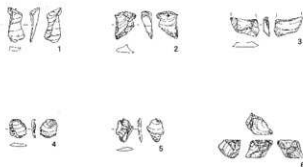
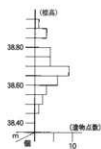
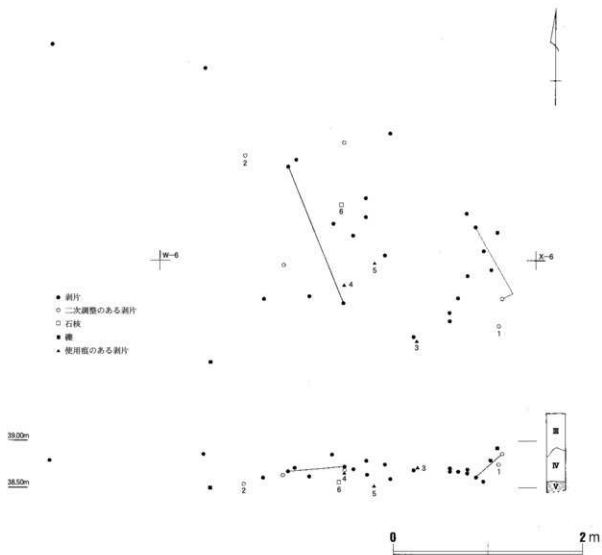
第14図 TP1・3・14・6・8・9土層柱状図



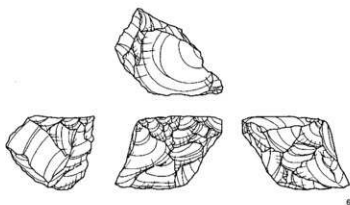
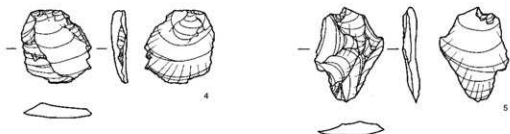
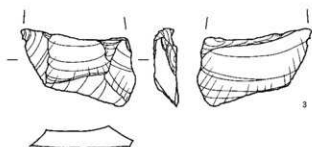
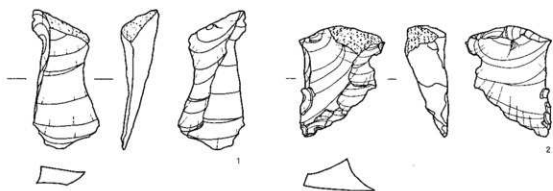
- 石塚
- 礎



第15図 第1号ブロック・第1号雑群分布図



第16図 第1号ブロック



第17図 第1号ブロック出土石器

第3表 第1号ブロック出土石器観察表

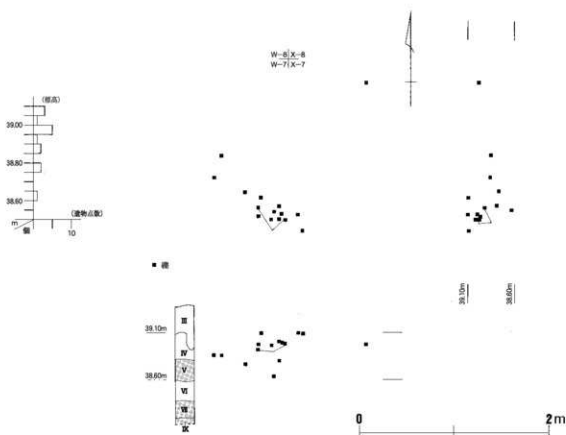
番号	所属	標高 (m)	器種	石質	法 量				備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
1	1号ブロック	38.740	二次調整剥片	チャート	3.48	2.11	0.94	3.1	左側縁欠損
2	1号ブロック	38.525	二次調整剥片	チャート	3.06	2.24	1.12	10.6	
3	1号ブロック	38.709	使用痕のある剥片	黒曜石	1.82	3.35	0.58	3.0	打面側欠損
4	1号ブロック	38.652	使用痕のある剥片	黒曜石	2.04	1.83	0.30	1.2	
5	1号ブロック	38.617	使用痕のある剥片	黒曜石	2.35	1.92	0.33	1.2	
6	1号ブロック	38.557	石核	黒曜石	2.03	2.83	1.93	9.4	

礫群

第1号礫群 (第15・18図、写真図版5)

構成礫15点。W・X-7グリッドで検出された。約5m南西側には第1号ブロックが位置する。平面分布は約1.6×1.7mの範囲に分布し、分布域ほぼ中央約1mの範囲に集中域が認められる。垂直分布は38.5~39.1mにかけて分布し、標高38.9m付近に分布のピークをもつ。

礫は完形礫が6点、他は破砕礫で占められる。石質はチャートが3点、他は砂岩である。礫は6点が非赤化で、他は赤化しておりそのうち2点に黒色付着物が認められた。接合は1個体2接合が一組認められた。(前田秀則)



第18図 第1号礫群

(2) 縄文時代

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、住居跡9軒、土坑62基（埋設土器土坑3基、陥し穴1基を含む）、ピット49基である。これら検出遺構の調査区における位置関係は第12図のとおりである。以下、各遺構の個別説明・形態的特徴について記述する。

住居跡

9軒検出した。このうち、遺構のほぼ全形が確認できたのは第7・8・10号住居跡の3軒のみで、第11号住居跡が全形の約1/2、他は攪乱による覆土の削平・流失が著しく、第9・24号住居跡が炉跡と柱穴、第12・13号住居跡が炉跡・埋裏と柱穴、第25号住居跡が埋裏と柱穴の位置関係から住居跡とした。

第7号住居跡（第19図、写真図版6・7）

位置 調査区北側のU・V-9・10グリッドで検出した。周辺には2m北西に第9号住居跡、西側には近接して土坑群が位置する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、Ⅱ層下位で遺物の集中と方形に広がる住居プランを確認し掘り下げを開始した。床面に到達した時点で周溝が3条検出され、周溝の広がる範囲に沿って調査を進めた。

形状・規模 新旧3条の周溝を検出した（内側周溝A、中間周溝B、外側周溝C）。住居形状は周溝Aプランでは円形基調だが、拡張とともに徐々に四隅が丸みを帯びる胴張りの隅丸方形プランへと変化したと推測される。規模は最終的な外側のプラン（周溝C）で4.9×4.7m、中間のプラン（周溝B）で径4.2m前後、最も内側のプラン（周溝A）で径3.5m前後を測る。主軸方位は、炉跡の位置と主柱穴の配置から外側のプラン（周溝C）がN-20°-W、内側と中間のプラン（周溝A・B）がN-30°-W前後を示す。

覆土 8層に分層した。1～4層が堅穴覆土、5層が貼床ならびに掘り方の埋め戻し土、6・7層が周溝充填土、8層が周溝覆土である。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び炭化粒、焼土粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 焼土粒を少量、ローム粒及び炭化粒を多量含む。

第3層 暗褐色土 ローム粒及び炭化粒を少量含む。

第4層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第5層 明褐色土 ローム粒及びロームブロックを含む。

第6層 明黄褐色土 ロームブロックを多量含む。

第7層 暗黄褐色土 ローム粒及びロームブロックを多量含む。

第8層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

壁・床面 壁はほぼ直線的に立ち上がり、残存壁高30～50cmを測る。床面は各プランともローム層中（Ⅳ層下位）にあり、最終的な外側のプラン（周溝C）では全面に堅緻な貼床が施されていた。

主柱穴 P1～P9が想定できる。住居の拡張に伴い（周溝A→周溝B→周溝C）、P1・P2・P3・P4→P5・P6・P7・P8→P5・P6・P7・P9への変遷を想定した。P5・P6・P7の3基については反復利用が想定され、3基とそれぞれ隣り合うP10～P14は支柱穴と

して機能したものと推測される。主柱穴を構成する各4基の柱間は、最終的な外側のプラン（周溝C）で2.5m前後、中間のプラン（周溝B）で2.3～2.5m、最も内側のプラン（周溝A）で2～2.3mを測り、各々4基は方形に配置されている。

周溝 3条とも全周する。周溝AとBは同心円状に、周溝BとCは北壁下と東壁下で重複して廻る。周溝の深さは、外側が約20cm、内側と中間が10～15cmを測る。

炉跡 床面中央北西寄りに地床炉2基（F₁・F₂）と、埋甕炉1基（F₃）を検出した。このうちF₁とF₂は重複しており、新旧関係はF₁→F₂（古→新）である。古期の炉（F₁）の掘り方は、深さ約20cmを測る。新規の炉（F₂）の掘り方は、径約60cm、深さ約15cmを測り内部に口縁部と胴部下半を欠く浅鉢が（R₁）正位に埋設されていた。F₁・F₂の西側に近接するF₃は、掘り方の平面プランが略円形を呈し、長径55cm、短径45cm、深さ20cmを測る。炉底の赤化・焼け込みはF₁・F₂は顕著であったが、F₃は軽微であった。

各炉の覆土は、R埋設時の充填土（第1層・第3層）、土器内覆土（第2層）を含め、各3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

第2層 赤褐色土 焼土粒・ブロックを含む。

第3層 明黄褐色土 焼土ブロックを含み、被熱により底面が硬化する。

第4層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を少量含む。

第5層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を含む。

第6層 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを多量含む。

第7層 暗黒褐色土 ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。

第8層 暗褐色土 焼土粒を微量含む。

第9層 暗褐色土 ロームブロックを含む。

埋甕 検出されなかった。ただ主柱穴の配置や炉跡・周溝との位置関係から推察すると各プランの南側に位置するP24・P25・P26の3基の掘り込みは、それぞれ各住居の埋甕抜き後の掘り方の可能性がある。

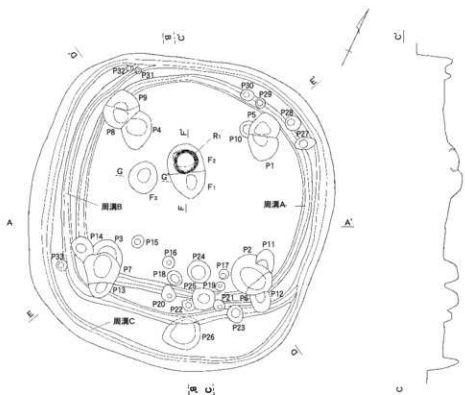
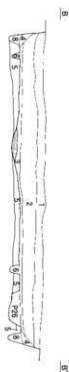
時期 加曾利E1式期

備考 新旧の柱穴や周溝の重複から2度の拡張と上屋の建替えが推測される。

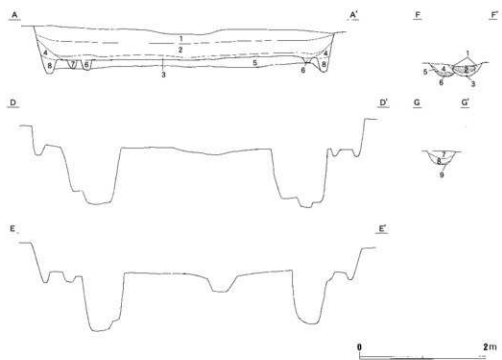
遺物の出土状況（第20～25図）

遺物の出土状況を観察する前に、住居西側（遺物83の南側）の空白部について若干記しておきたい。この箇所は土層観察用のベルト（第19図）が配置されていた個所で、空白はベルト除去時に遺物の出土位置を記録せずに不用意に遺物を取り上げてしまった調査ミスによるもので、周囲の遺物分布状況からも明らかなようにこの個所に遺物が分布することは確実である。

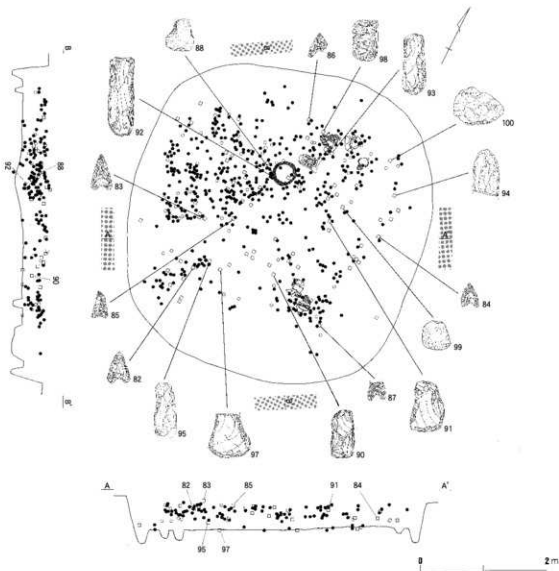
遺物の分布は住居中央から東側への集中は希薄で、住居軸方向の北東側と西側に多く出土し、南側では一部南東側に集中している。断面的に見れば、住居廃絶後、壁際から覆土の形成が進み、廃絶竪穴中央が凹地化した初期の時点から遺物の廃棄が始まり、それが連続的というよりも、複数の間層と遺物の集中を挟んで埋没完了に至るまで継続して遺物の廃棄が行われている様相が窺われる。以下は、図示した土器（第21～25図）の出土状況を廃絶竪穴



Plt No.	深 (cm)
1	77
2	90
3	74
4	83
5	76
6	87
7	80
8	80
9	31
10	71
11	67
12	76
13	89
14	40
15	59
16	47
17	19
18	49
19	21
20	38
21	18
22	19
23	26
24	16
25	14
26	19
27	14
28	31
29	36
30	15
31	14
32	17
33	18



第19图 第7号住居跡平・断面图 (L = 39.6m)



第20図 第7号住居跡遺物出土図 (L=39.6m)

の埋没過程に対応させて観察する。覆土中の土器は、垂直分布で見ると、覆土下位から中位に分布する一群、埋没完了前後の覆土上位に分布する一群に概ね二分され、覆土下位から中位では半完形個体や大形破片が集中し、覆土上位は小破片が多く集中している。第21図 2・3・5・6・7・38、第22図 4・12、第23図 13・14・17、第25図 33・34は床面上10~30 cmの覆土 2 下位から上位にかけていわゆる断面レンズ状に分布する土器群で、住居廃絶後、壁際からの覆土の形成が進み、廃絶竪穴中央が凹地状を呈する時期にいち早く廃棄された一群と思われる。2・3・5・6・13・34は単独、4・7・12・14・17・33・38は主要部分と接合破片が近接して分布している。このうち 4 は単独で廃棄されたものが廃棄後に破損した可能性がある。7 は主要部分が下位に口縁部の接合小片 3 片が上位に分布しており、住居内へは投棄されたような出土状態を示唆している。以上の土器群の平面的な位置関係は 2・3・7・38が炉跡 F₂ の北東側、5・6・12が住居南東側、14・34が住居南側に纏まりをもって分布し、他は 4 が炉跡 F₂ の西側、13が住居南西側、17が住居北西側にそれぞれ分布してい

る。これ以降に廃棄された土器群が垂直分布に対照すれば覆土2上位に分布する第23図18・19・20、第24図24・28、覆土2上位から覆土1に分布する第22図9・11、第23図21・22、第24図26・29、覆土1に分布する第22図8・10、第23図23、第24図25・27・30・31、第25図35・36・37となり、層的に18・19・20などの廃棄が先行することは確実であるが、分布する土器の時期別様相、土器接合資料の平面上でのバラツキ、垂直分布の高低差などからすると個々の遺物の廃棄時期を明確に区分することは困難で、この覆土2上位から覆土1における遺物の廃棄は断絶することなく継続的に行われている様相が窺われる。なお覆土1から出土した土器の内、第24図30は土器様相からみて明らかに二次的な流れ込みである。

覆土中以外の土器個体としては、炉跡F₁に埋設されていた炉体土器（第21図1）と貼床構築土中から出土した第24図32、床面付近から出土した第23図15・16を確認した。

出土遺物（第26～35図1～101、写真図版18～24）

土器（1～74）

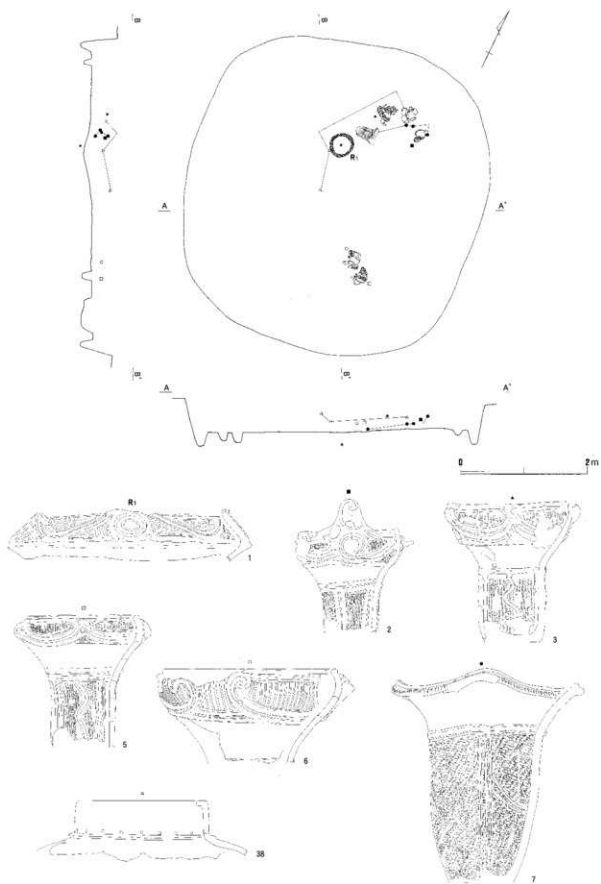
呈示した74点は、第21図～25図に示した個体資料38点と覆土内出土の36点である。

1は現高8cm。F₁に埋設されていた炉体土器（R₁）である。肩部が「く」の字状に強く内屈する浅鉢で、口縁部と胴部下半を欠失する。文様構成は胴部上半に降帯による弧状と三角区画文の組み合わせを円文を介して5単位施文し、区画内に縦・斜位の沈線と渦状の沈線、円文内に同心円・縦沈線を施文する。胎土は粗く、砂粒・小石を多く含み、色調は橙色（5YR6/6）を呈する。

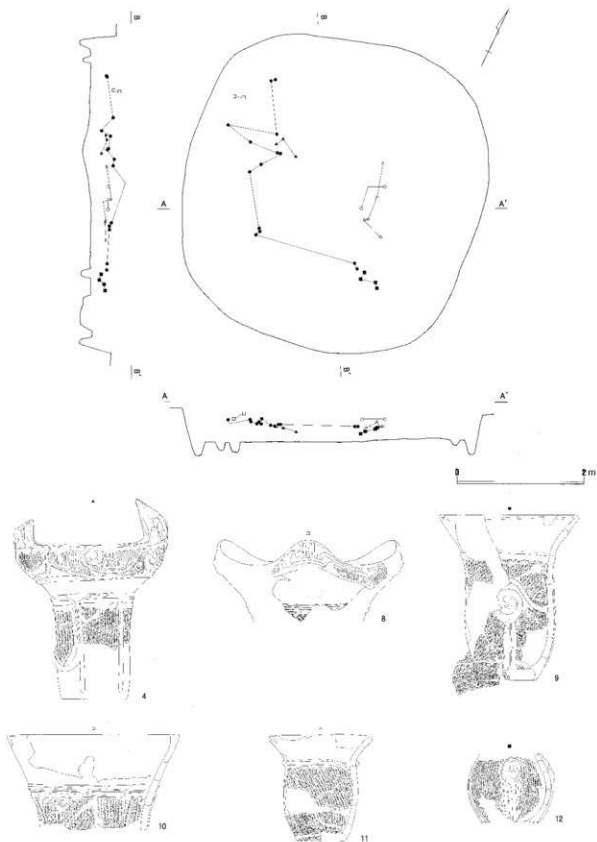
2は口径15.8cm、現高21.2cm。直線状の胴部から頸部で括れ、口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢で、口縁部から胴部4/5が遺存する。口縁部は1単位把手が付され、把手下と連繋して横S字状のモチーフが上部を2分割した降帯で施文され、それを横位に連繋する突起状渦巻文を連結したモチーフが6単位施文される。頸部は無文帯を形成し、胴部との境に2本1対の降帯が横走りする。胴部は同様の降帯が4単位垂下し、実測図では凶化できていないが、対応する2区画に蛇行降帯が垂下する。地文はLの捺糸文が口縁部は斜位、胴部は縦位に施される。胎土は密で、色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。

3は口径20.5cm、底径8.8cm、器高22.4cm。直線的な胴部から口縁部が大きく開いて立ち上がる深鉢で、口縁部から底部にかけて遺存する。口唇部は粘土を厚く貼り付け平坦に作出されている。口縁部は降帯による口唇部から垂下する突起状の渦巻文を連結する弧状のモチーフが2本1対の降帯で5単位施文される。頸部は無文帯を形成し、胴部との境に1条降帯が横走りする。胴部は同様の降帯で4単位に縦位区画され、区画間に蛇行降帯が垂下する。地文はLの捺糸文が口縁部・胴部とも縦位に施される。胎土は密で、色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。

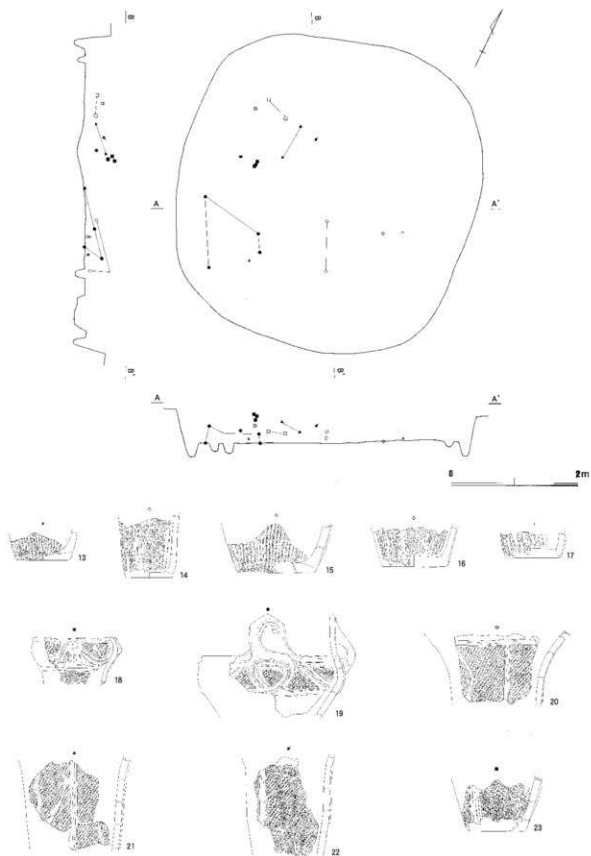
4は口径21.6cm、底径（10.6cm）、器高（32cm）。胴部が直線的に立ち上がり、頸部で括れ、口縁部が内湾するキャリバー形の深鉢で、口縁部から胴下半部にかけて遺存する。口縁部は大小1対の把手が付され、把手下と連繋して降帯による横「S」字状のモチーフと1本ないし2本1対の降帯による弧状のモチーフが表出され、区画内には棒状工具の先端による単沈線が充填される。頸部は無文帯を形成し、胴部との境に2本1対の降帯が横走りする。胴部はRの捺糸文を地文とし、懸垂降帯と懸垂降帯から延びる2本1対の降帯による鉤状モチ



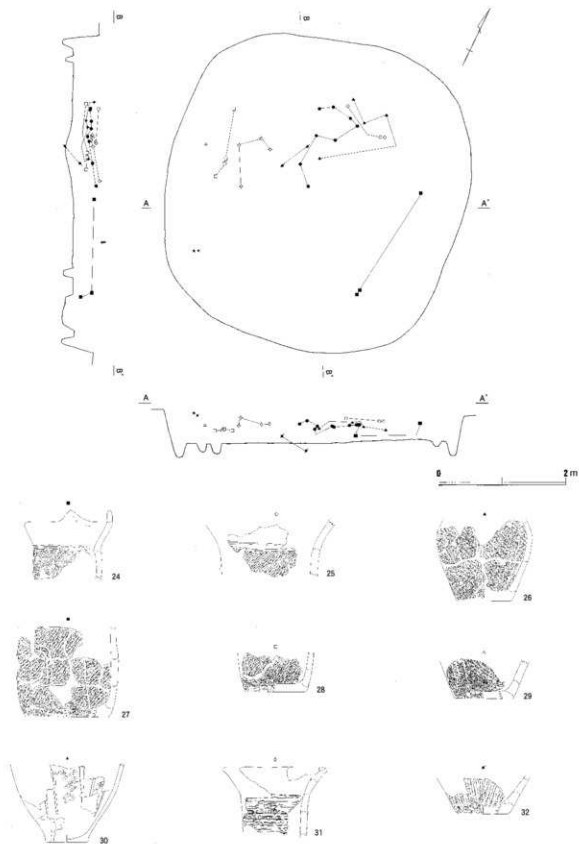
第21图 第7号住居跡土器個体別分布图(1) (L = 39.6m)



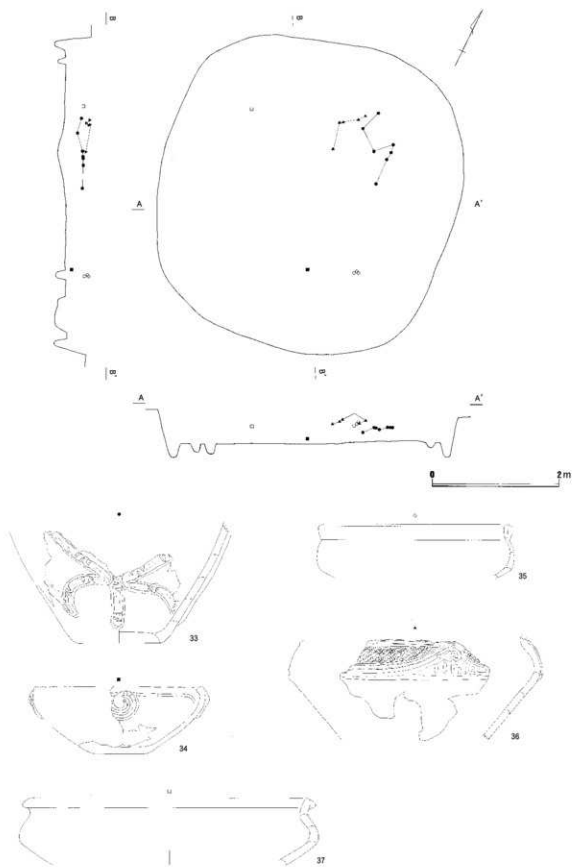
第22图 第7号住居跡土器個体別分布图(2) (L = 39.6m)



第23图 第7号住居跡土器個体別分布图(3) (L = 39.6m)



第24图 第7号住居跡土器個体別分布图(4) (L = 39.6m)



第25图 第7号住居跡土器個体別分布图(5) (L = 39.6m)

フが描出される。胎土は密で、色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

5は口径18cm、現高21cm。胴部が直線状に立ち上がり、頸部で括れ、口縁部が内湾するキャリバー形の深鉢で、口縁部から胴下半部にかけて遺存する。口縁部は2本1対の隆帯により渦巻きつなぎ弧状のモチーフが5単位施文される。頸部はやや幅広の無文帯を形成し、胴部との境に2本1対の隆帯が横走りする。胴部は同様の隆帯で4単位に縦位区画され、区画間に蛇行隆帯が垂下する。地文は口縁部・胴部ともLの燃糸文が縦位に施文されるが、口縁部は一部燃糸文上に沈線が付加されている。胎土は粗く、砂粒・小石を含み、色調は明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。

6は口径（27cm）、現高15cm。口縁部が内湾するキャリバー形の深鉢で、口縁部から頸部2/3が遺存する。口縁部は2本1対の隆帯による突起渦巻文と横「S」字状のモチーフが施文され、区画内に棒状工具による単沈線が充填される。頸部は無文帯を形成し、下位に隆帯が横走りする。胎土は密で、砂粒を多く含み、色調はにぶい黄褐色（10YR6/4）を呈する。

7は口径30.7cm、底径10cm、器高34cm。胴部があまり張らず、直線状に立ち上がり、口縁部がラッパ状に開く深鉢で、接合によりほぼ完形に復元できた。大木系の影響下にある土器で、口縁部は4単位の緩い波状を呈し、口辺部にめぐる沈線外周部にヘラ状工具による刻みが施される。頸部は幅広の無文帯を形成し、胴部との境に断面蒲鉾状の隆帯が1条めぐる。胴部は単節RL縄文地上に棒状工具の先端による沈線が3本平行して垂下し4単位に縦位区画され、区画内に2本沈線による渦状のモチーフが描出される。胎土は密で、色調は赤褐色（2.5YR4/8）を呈する。

8は口径（30cm）、現高13cm。口縁部が朝顔形に開く深鉢で、口縁部から頸部1/3が遺存する。7同様大木系の影響下にある土器で、口縁部は3単位の波状を呈し、幅狭の口辺部に沈線文、交互刺突文、刻目文が施される。頸部は無文帯を形成し、胴部との境に2本1対の隆帯が横走りする。胴部は単節RL縄文地に沈線が垂下する。胎土は密で、砂粒・赤色粒を多く含み、色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

9は口径22.3cm、底径8.2cm、器高26.3cm。胴部下半がやや膨らみ、無文の口縁部がラッパ状に開く深鉢で、口縁部から底部2/3が遺存する。頸部と胴部の境に1条隆帯が横走りする。胴部はLの燃糸文を地文とし、隆帯による横位に展開する渦巻状のモチーフから2本1対の隆帯が垂下する。胎土は粗く、小石を多く含み、色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

10は口径（27.5cm）、現高15.1cm。無文の口縁部が外傾し、口端部が僅かにする内湾する深鉢で、口縁から胴部上半1/4が遺存する。胴部と頸部との境に2本1対の隆帯が横走りし、胴部はLの燃糸文地上に同様の2本隆帯が垂下する。胎土は粗く、小石を多く含み、色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

11は口径16.5cm、底径7.4cm、器高17.1cm。無文の口縁部がラッパ状に外反して開き、頸部で括れ、胴中央部で僅かに膨らみつつ底部に至る小形の深鉢で、口縁から底部4/5が遺存する。頸部と胴部の境に隆帯が横走りし、地文はRの燃糸文が全面斜位に施される。胎土は密で、砂粒・石英を含み、色調は明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。

12は現高9.8cm。最大径を胴部中位にもつ小形の深鉢で、胴部2/3が遺存する。胴部は円

形の渦状モチーフを間に置く2本1対の隆帯が4単位垂下する。地文はLの捺糸文が縦位に施される。胎土は密で、砂粒・小石・長石を含み、色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

13は底径8.2cm、現高4.6cm。深鉢の胴部下半で、全周する。地文はLの捺糸文が縦位に施される。胎土は密で、色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

14は底径7.2cm、現高10cm。深鉢の胴部下半で、全周する。13同様、地文はLの捺糸文が縦位に施される。胎土は密で、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

15は底径(12.4cm)現高9.8cm。深鉢の胴部下半で、1/4が遺存する。縦位のLの捺糸文地上に蛇行隆帯と隆帯が交互に垂下する。胎土は粗く、砂粒・小石を含み、色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

16は底径10.6cm、現高6.5cm。深鉢の胴部下半で、全周する。縦位のLの捺糸文地上に隆帯と蛇行隆帯が垂下する。隆帯脇は沈線で押さえている。胎土は粗く、赤色粒を多く含み、色調は赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。

17は底径8.5cm、現高4.1。底部3/4が遺存する。縦位のLの捺糸文地上に蛇行隆帯と2本隆帯が交互に垂下する。隆帯脇は沈線で押さえている。胎土は粗く、砂粒・石英・長石を含み、色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。

18は口径(12.4cm)、現高7.8cm。口縁部が内湾する小形のキャリパー形深鉢で、口縁から頸部1/4が遺存する。口縁部は2本1対の隆帯による弧状のモチーフと連結部に渦巻き文が施文される。地文は単節RL縄文が口縁部・胴部とも斜位に施される。頸部には無文帯を有するが胴部との区画は見られない。胎土は粗く砂粒・小石を含み、色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

19は口径(21.8cm)、現高16.4cm。口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢で、口縁から頸部1/4が遺存する。口縁部は1単位把手が付され、把手下と連繋して2本1対の隆帯による弧状のモチーフと隆帯上部を2分割した隆帯で渦巻き状のモチーフが施文される。地文は単節RL縄文が斜位に施される。胎土は密で、砂粒・小石を含み、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

20は現高11.8cm。胴部上半から口縁部にかけて開く深鉢の胴部破片である。頸部と胴部の境に1条隆帯がめぐり、胴部は単節RL縄文地上に隆帯と蛇行隆帯が垂下する。胎土は密で、砂粒・小石を含み、色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

21は現高18.2cm。深鉢の胴部破片である。単節RL縄文を地文とし、隆帯と蛇行隆帯が交互に垂下する。胎土は粗く、小石を多く含み、色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

22は現高15.9cm。深鉢の胴部破片である。頸部と胴部の境に1条隆帯がめぐり、胴部は単節RL縄文地上に隆帯が垂下する。胎土は密で、色調は赤褐色(2.5YR4/8)を呈する。

23は底径(9.4cm)、現高8.8cm。深鉢の胴部下半で、2/3が遺存する。0段多条の縄文を地文とし、2本1対の隆帯と蛇行隆帯が垂下する。胎土は密で、砂粒・小石を含み、色調は赤褐色(2.5YR4/8)を呈する。

24は口径14cm、現高11.1cm。頸部が緩く「く」の字状に括れ、無文の口縁部が外傾して立ちあがる小形の深鉢で、口縁から胴部4/5が遺存する。口縁部は2単位小突起が付き、頸部に沈線が2条平行してめぐり、地文は単節RL縄文が全面斜位に施される。胎土は密で、雲

母を多量に含み、色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

25は現高9.1cm。深鉢の胴部上半である。頸部に沈線が2条平行してめぐり、胴部は単節RL縄文地上に蛇行沈線が垂下する。胎土は粗く、砂粒・小石を含み、色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。

26は底径8.6cm、現高12.8cm。胴部中位に膨らみをもつ深鉢の胴部下半で、胴部中位から底部1/2が遺存する。胴部は単節RL縄文を地文とし、半截竹管の腹による蛇行沈線と懸垂沈線が交互に垂下する。胎土は粗く、白色粒を多く含み、色調は赤褐色（2.5YR4/8）を呈する。

27は底径（13cm）、現高14.4cm。深鉢の胴下半部で、胴下半部から底部2/3が遺存する。単節RL縄文を地文とし、棒状工具の先端による単沈線、波状沈線、2本沈線によるクランク状のモチーフが垂下する。胎土は粗く、色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。

28は底径9.8cm、現高6.2cm。深鉢の胴部下半で、胴部下半から底部1/5が遺存する。地文は単節RL縄文が斜位に施文される。胎土は密で、砂粒・小石を多く含み、色調は明赤褐色（5YR4/6）を呈する。

29は底径（9.4cm）、現高6.2cm。深鉢の胴下半部で、1/5が遺存する。単節LR縄文を地文とし、棒状工具による3本沈線が垂下する。胎土は密で、砂粒・小石を含み、色調は明赤褐色（5YR4/6）を呈する。

30は底径6.8cm、現高12.5cm。深鉢の胴下半部で、単節RL縄文を地文とし、平行して垂下する2本沈線間が磨消されている。胎土は密で、色調は橙色（7.5YR6/8）を呈する。加曾利E3式に比定される資料で、本住居跡へは埋没完了後の流れ込みと思われる。

31は口径（16.7）cm、現高10.9cm。胴部上半から外反して立ち上がる小形の深鉢で、口縁から胴部中位1/4が遺存する。口縁部は内側に小さく内折し、口唇部は幅広く平坦に作出されている。頸部から胴部中位にかけて半截竹管の腹による半隆起線を横位多段に施し、一部に同施文具による押引文が加えられる。胎土は密で、色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

32は底径（8cm）、現高5.8cm。深鉢の胴下半部で、1/2が残存する。地文は半截竹管の腹による平行沈線が縦位基調に施される。胎土は密で、砂粒を含み、色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。

33～37は浅鉢である。33は胎土に砂粒・金雲母を含み、交互刺突を伴う隆帯で文様が表出され、縦位の隆帯を中心に横位・弧状のモチーフがシンメトリーに描出されるものと思われる。胎土は密で、色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

34は口縁下に沈線をめぐらせ、直下に円状の粘土帯を貼付け、上部に沈線による渦巻状のモチーフと沈線間に一部刻みが施される。胎土は粗く、色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

35・37は無文の浅鉢で、35は肥厚した口縁部が直立する。37は肩部が「く」の字状に屈曲し口縁部が若干外傾する。胎土は密で、35が赤褐色（2.5YR5/8）、37が橙色（7.5YR6/8）を呈する。

36は肩部が「く」の字状に内屈する器形で、胴部上半に隆・沈線による渦巻つなぎ弧状のモチーフが描出される。地文は単節RL縄文が斜位に施される。胎土は密で、砂粒・白色粒を含み、色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。

38は有孔罅付土器である。口縁部が内折し、胴部が強く張り出す器形で、頸部に断面「コ」の字状の隆帯がめぐる。隆帯の直上に小孔が約3.5cm間隔で横位に連続して穿たれ全周するものと思われる。胎土は金雲母を多く含み、内外面とも赤彩される。

39~74は拓形資料である。39は口縁部無文帯下に刻みを有する隆帯を横位に配し、直下に棒状工具による縦位・横位の平行沈線と渦巻状のモチーフが表出される。胎土は密で、砂粒を多く含み、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。40は胴部上半に丸棒状工具を押しつけた隆帯をめぐらし、直上に異方向の短沈線、下位は地文にLの無節縄文が施される。胎土は密で、色調は橙褐色(5YR6/6)を呈する。41は半截竹管の腹による平行沈線を縦位に施文し、沈線間に施文具の異なる刻みが間隔を置いて施される。胎土は密で、砂粒を多く含み、色調は橙色(7.7YR6/6)を呈する。42は棒状工具による沈線により曲線状のモチーフと縦位の単沈線、三叉文が施される。胎土は密で、色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈する。43は爪形状の刻みを伴う沈線を横位・縦位に施し、区画内に棒状工具による沈線が縦位に施される。胎土は粗く、小石を多く含み、色調は明褐色(7.5YR5/4)を呈する。44は半肉彫り手法による矩形・長方形のモチーフが横位に施文される。胎土は密で、色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈する。

45~51・53・56・57は撚糸地文の土器で、45~51・53は深鉢の口縁部破片、56・57は胴部破片である。45は口縁部に把手を有し、把手から繋がる断面三角の高い隆帯を横位に貼付け、把手下には隆帯上部を2分割した隆帯で蕨手状のモチーフとそこから横位に延びる弧状のモチーフが隆帯で描出される。地文はLの撚糸文が横位に施される。46は2本1対の隆帯による横S字状文が貼付けされる。地文はLの撚糸文が斜位に施される。胎土は密で、色調は45がにぶい赤褐色(2.5YR4/4)、46が明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。47は口縁部上位を断面蒲鉾状の隆帯で横位に区画し、区画内に2本1対の隆帯で弧状のモチーフが描出される。隆帯脇は棒状工具による沈線で押さええている。地文はLの撚糸文が縦位に施文される。48・49は、48が断面三角、49が断面蒲鉾状の隆帯で口縁部上位が横位区画される。胎土は密で、色調は48・49とも灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。50は口縁部上下位を隆帯で横位区画し、区画内に2本1対の隆帯と沈線による渦巻きつなぎ弧状のモチーフが施文される。地文はLの撚糸文が縦位に施文される。51は口縁部上位を断面蒲鉾状の隆帯で横位に区画し、区画内に2本1対の隆帯による弧状のモチーフが施文される。地文はLの撚糸文が縦位に施される。53は口縁部上位を隆帯により横位に区画し直下に帯状の隆帯による横長の半円状モチーフが施され隆帯上には単沈線が縦位に施文される。56・57は、56が蛇行隆帯、57が隆帯と蛇行隆帯が胴部に垂下する。色調はともに明褐色(7.5YR5/4)を呈する。

52・54・55は沈線地文の土器で、52は口縁部に2本1対の隆帯による弧状と剣先状のモチーフが施文される。54は横位に展開する楕円状モチーフが2本1対の隆帯で表出され、連結部には横位渦巻き文が施文される。55は隆帯による上位弧状のモチーフが施文される。

58~60・62~64(60a・60bは同一個体片)は縄文地文の土器で、58~60は深鉢の口縁部破片、62~64は胴部破片である。58~60は口縁部文様が隆帯で表出されるもので、58が楕円状、59が菱形状、60は横長楕円状のモチーフが施文される。頸部はともに無文帯を形成する。62は頸部と胴部の境が上部に沈線を伴う隆帯で区画され、胴部に平行する2本沈線と蛇行沈

線が垂下する。63は拓影図では不明瞭だが3本沈線で区画された「棒」状文内部に沈線が垂下する。64は一部突起状を呈する隆帯を頸部にめぐらし、突起下から2本沈線が垂下する。地文は58・63・64が単節LR縄文、ほかは単節RL縄文で、色調は58・60・63・64がにぶい赤褐色(2.5YR4/4)、59が明褐色(7.5YR5/6)、62が橙色(2.5YR6/8)を呈する。

61は口縁部から頸部片で、口縁部は無文地に沈線による渦巻状のモチーフが施文される。

65a・65b・65cは同一個体片で、燃系地文の小形の深鉢である。波状口縁を呈し、胴部との境に刺突文を伴う半隆起線を2条めぐらし、胴部に同様のモチーフを3本沈線で表出する。地文はLの燃系文が縦位に施文される。

66~70は曽利系土器である。66・67は頸部に粘土紐による蛇行隆帯がめぐる土器で、67は半截竹管の腹による斜位の平行沈線を地文に施し、横位にめぐる隆帯を挟んでその上下に蛇行隆帯が施されている。68は口縁部無文帯下に「瘤」状の小突起が付され、それを起点に棒状工具による沈線を横位に3条めぐらせ、胴部には同施工具による沈線を平行して垂下させている。69は反気味に立ち上がる口縁部で、口縁部に幅狭の無文帯を有し、以下胴部に棒状工具による沈線が縦位に施文される。沈線上には一部渦状のモチーフが認められる。70は半截竹管の背による平行沈線を横位多段に施し、平行沈線間に上下間隔を空け刻目状の刺突文が加えられる。胎土はともに砂粒・白色粒を多く含み、色調は67・69がにぶい赤褐色(2.5YR4/4)、68がにぶい褐色(7.5YR5/4)、66・70が灰赤色(2.5YR4/2)を呈する。

71~74は無文の浅鉢で、72は外面、73は内外面に赤彩の痕跡が認められる。胎土は密で砂粒・白色粒を多く含み、72・73とも丁寧に磨きかけられている。

土器片錘 (75~80)

総数6点出土し、すべて図示した。80は、切目は確認できないが、両側縁中央に擦れ痕が認められるため本種に含めた。平面形状は75が方形、76が楕円形、78が長方形、ほかは不整長方形を呈する。使用部位は6点とも胴部で、切目は80を除き両側縁ほぼ中央に1対作出されている。使用土器の時期を有文の4点(75~78)でみると、75・76が加曽利E1式、77が勝坂式、78が加曽利E2式併行と思われる。

器台 (81)

1点出土した。破損しているため受け面の状態が判然としないが、図上復元では受け面より脚部幅が若干広がる様相がみられる。現高4cm、脚端部(8cm)を測る。孔とみられる整形が1ヶ所確認できるが形状・単位を含め詳細は不明である。

石器 (82~101)

82~87は、石鏃である。86が右脚部、87が器体上半、84が左脚部先端を欠損している。すべて凹基鏃で、82~84には素材面の一部が残されている。86を除いていずれも側縁は鋸歯状に整形されている。石質は82・83・87がチャート、84~86が透明で不純物を含まない黒曜石で、82が長さ2.48cm、幅1.8cm、厚さ0.43cm、重量1.7g、83が長さ2.81cm、幅1.65cm、厚さ0.44cm、重量1.8g、87が残存部で長さ1.46cm、幅1.45cm、厚さ0.46cm、重量1.1g、84が長さ2cm、幅1.39cm、厚さ0.29cm、重量0.8g、85が長さ2.14cm、幅1.18cm、厚さ0.49cm、重量1.2g、86が長さ2cm、幅1.47cm、厚さ0.41cm、重量0.8gを量る。

88~97は打製石斧である。88・89・91は撥形を呈し、88は表面に原礫面を多く残している。

小形で薄手であることから削器の可能性も考えられる。石質は粘板岩で、長さ5.17cm、幅4.47cm、厚さ0.75cm、重量21gを量る。89は表面に原礫面の残る剥片を素材として、両側縁は両面から入念に調整されている。石質は泥岩で、長さ8.31cm、幅5.27cm、厚さ1.57cm、重量70.8gを量る。91は裏面に原礫面を有する剥片を素材として、原礫面をそのまま刃部に活かし、表面側から細かな剥離を連続して施し刃部を整形している。石質は砂岩で、長さ8.32cm、幅5.49cm、厚さ1.78cm、重量105.4gを量る。90・92～96は短冊形を呈し、90は両側縁中央と基部に着柄時に伴うと思われる磨耗痕が認められる。石質は泥岩で、長さ7.82cm、幅3.65cm、厚さ1.22cm、重量54.8gを量る。92は節理に沿って割られた板状の剥片を素材としている。表面下半から刃部にかけて研磨が施されている。石質は緑泥片岩で、長さ12.4cm、幅4cm、厚さ2.1cm、重量151.7gを量る。93は剥片を素材として裏面には原礫面を多く残している。左側縁には平坦な剥離がみられ、縁辺が鋭く作出されていることから削器として使用された可能性もある。石質は砂岩で、長さ9.78cm、幅3.8cm、厚さ1.35cm、重量62.1gを量る。94～96は破損品で、94が斧身下半、95が刃部、96が斧身上半を欠損する。石材は94・95が安山岩、96がホルンフェルスである。97は分銅形の製品で、斧身上半を欠損する。石材は砂岩である。

98・99は磨製石斧である。98は基端部に剥離痕、刃部には使用時に生じたと思われる刃こぼれ状の剥離痕がみられる。基端部は、折れ面の稜線を切って研磨痕が認められることから、二次加工されているものと考えられる。石質は緑色凝灰岩で、長さ6.54cm、幅4.12cm、厚さ1.97cm、重量88.1gを量る。99は刃部のみ遺存する。石質は緑色凝灰岩である。

100はスクレイパーである。裏面に原礫面を残す厚手の剥片を素材として、下端に刃部が作出されている。石質はチャートで、長さ6.1cm、幅8.1cm、厚さ3cm、重量128gを量る。

101は磨石である。角状の扁平礫を素材として、表面及び下面・左側面に磨面が認められる。石質はチャートで、長さ6.2cm、幅5.3cm、厚さ5.1cm、重量220gを量る。

第8号住居跡（第36図、写真図版8）

位置 調査区北側のQ・R-7・8グリッドで検出した。周辺には8m南西に第10・12号住居跡、5m西に第25号住居跡が位置する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、Ⅱ層上位で住居プランを確認した。

形状・規模 ほぼ円形を呈し、長短径約3.9mを測る。主軸方位は、柱穴間の間隔の狭いP4・P9間を出入り口部とすればP4・P9間と奥壁P1・P2間を結ぶラインでN-75°-E、P3・P8間を出入り口部とすればP3・P8間と炉(F)₁・P1を結ぶラインでN-18°-Eを示す。

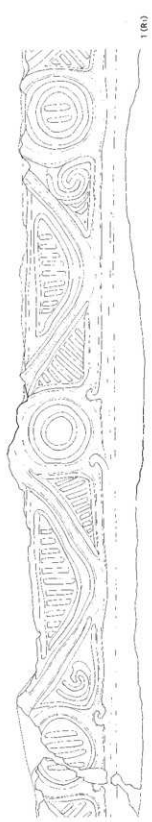
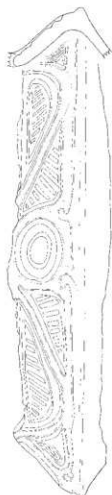
覆土 3層に分層した。

第1層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

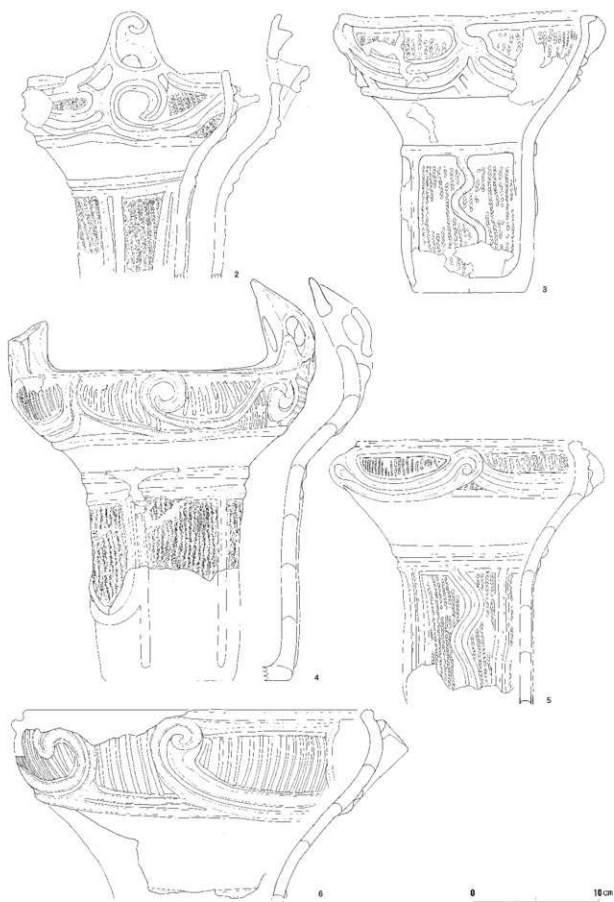
第2層 褐色土 ローム粒及び焼土粒を少量含む。

第3層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

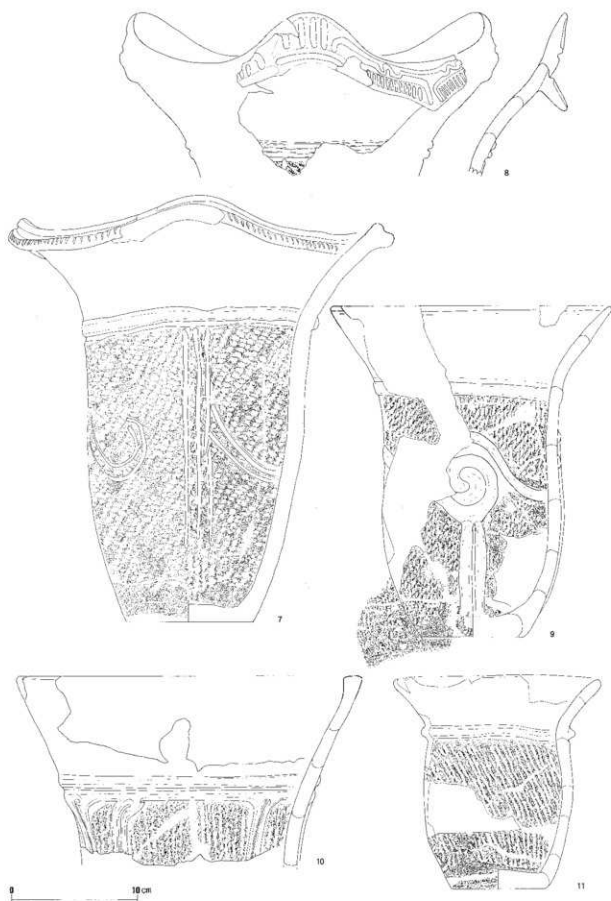
壁・床面 壁は開き気味に立ち上がり、残存壁高15～20cmを測る。床はⅡ層下位にあり、概ね平坦である。床面精査中に土坑2基（第23・34号土坑）を検出した。本住居調査終了後



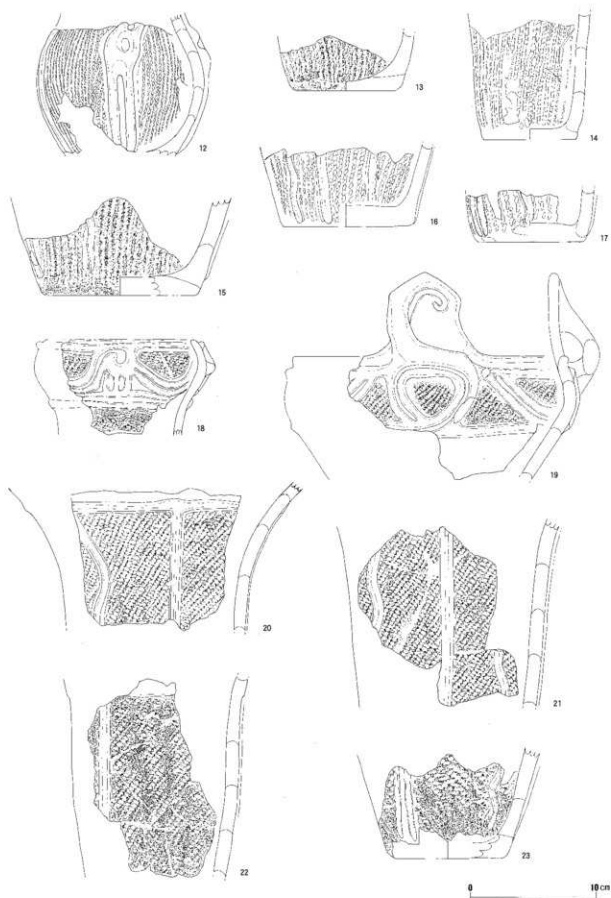
第26図 第7号住居跡出土遺物 (1)



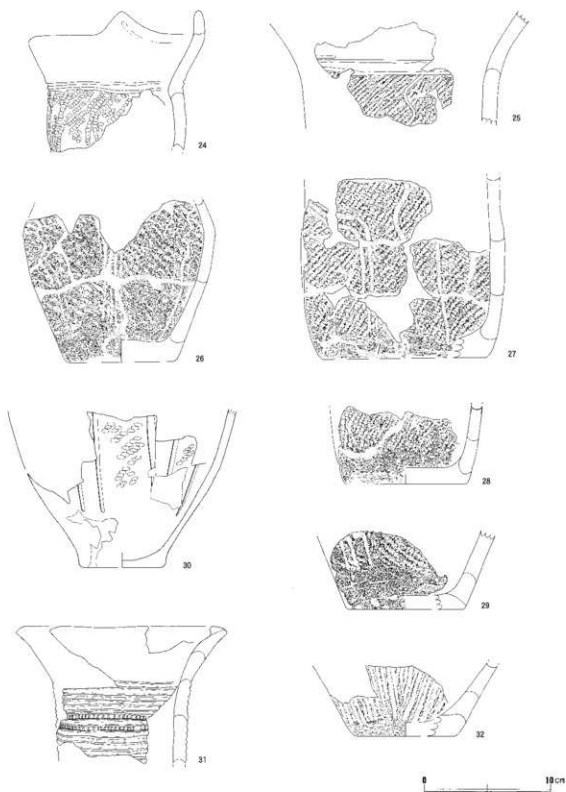
第27图 第7号住居跡出土遺物(2)



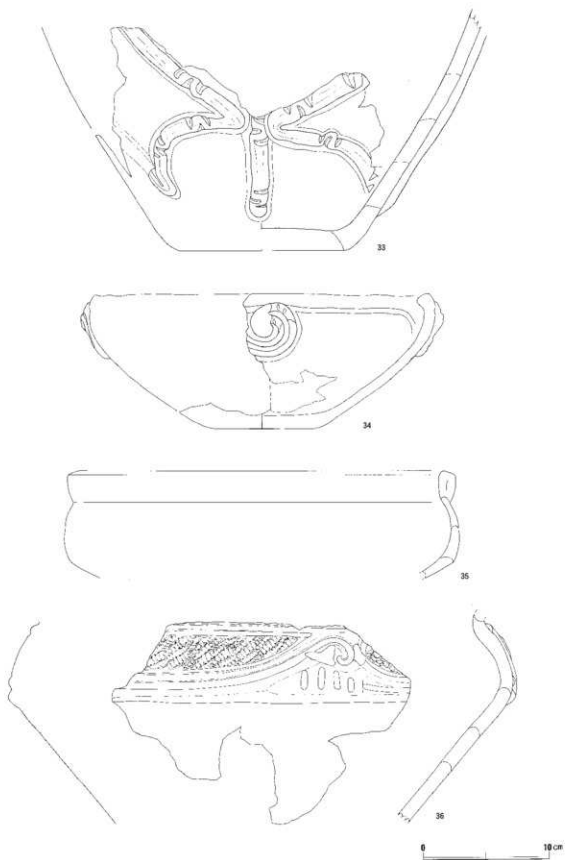
第28图 第7号住居跡出土遺物(3)



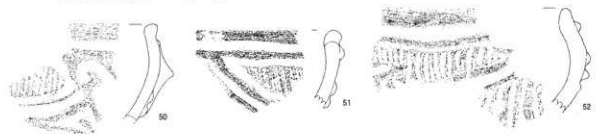
第29图 第7号住居跡出土遺物(4)



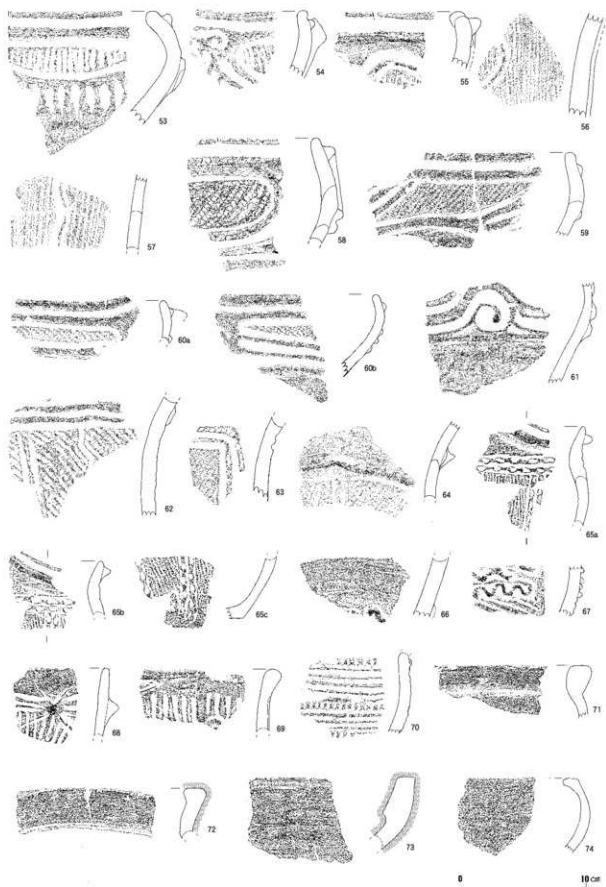
第30图 第7号住居跡出土遺物(5)



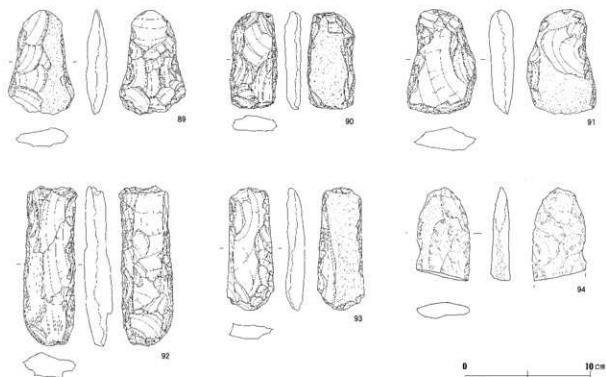
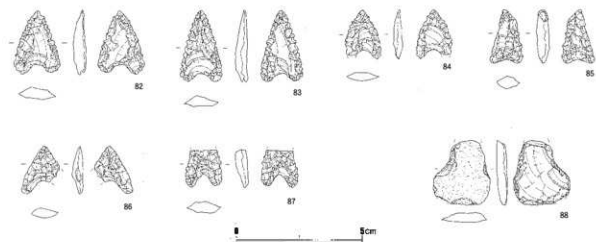
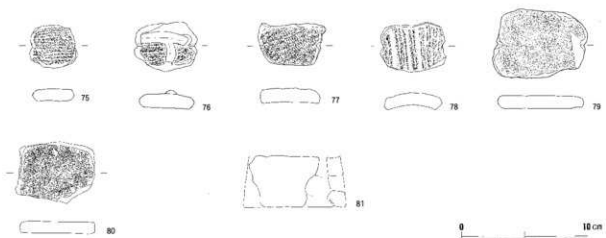
第31图 第7号住居跡出土遺物(6)



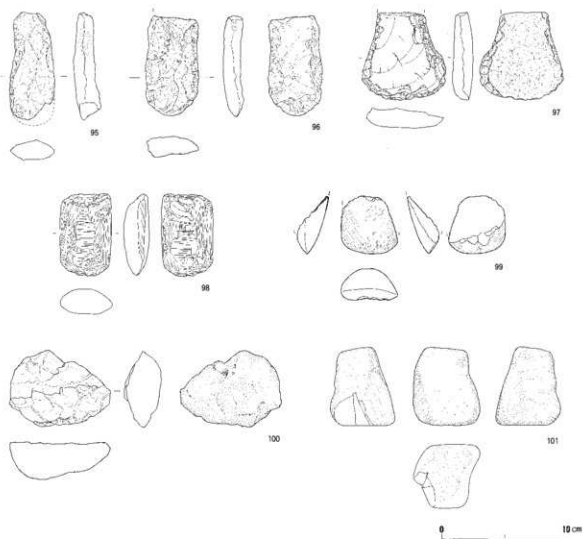
第32图 第7号住居跡出土遺物(7)



第33图 第7号住居跡出土物(8)



第34图 第7号住居跡出土遺物(9)



第35図 第7号住居跡出土遺物(10)

に掘り下げたところ、第34号土坑が中期後半、第23号土坑が早期前半の撚糸文系土器の時期の土坑であることが推測された。

主柱穴 炉を中心に五角形に配置されたP1・P2・P3・P4およびP5・P6が想定される。重複するP5・P6の新旧関係は、P6→P5（古→新）である。

周溝 検出されなかった。

炉跡 床面ほぼ中央で地床炉2基（F₁・F₂）を検出した。新旧関係はF₁→F₂（古→新）である。2基とも炉底部に焼け込みを有するが、赤化はF₁が顕著であった。

覆土は各3層（F₂：第1～3層、F₁：第4～6層）に分けられる。

第1層 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第2層 明赤褐色土 焼土主体。

第3層 黄褐色土 被熱したロームブロック土。

第4層 暗褐色土 焼土粒を微量含む。

第5層 赤褐色土 焼土主体。

第6層 明褐色土 焼土粒・ブロックを少量含む。

埋裏 検出されなかった。

時期 加曽利E3式期

備考 新旧の柱穴や炉跡の重複、また前述したP3・P4、P4・P5間の外側に位置するP8・P9を新旧出入り口施設に伴うピットとすれば、本住居は最低1回以上の改修もしくは補修が推測される。

遺物の出土状況（第37図）

遺物の分布は住居中央に集中し、その周辺では疎らな平面分布を呈している。断面上での分布は、床面との間に若干の間層を挟んでその上位に遺物が集中している。つまり、住居廃絶後、壁際から覆土の形成が進み、廃絶堅穴の床面が埋没土に覆われた直後に遺物の廃棄が集中した様相が窺われる。図示した1点(1)は、覆土2直上から出土した接合資料で、住居内には周辺に分布する土器片とともに一括廃棄されたものと思われる。

出土遺物（第38図1～18・写真図版24）

土器（1～18）

呈示した18点は、覆土下層出土の個体資料1点と破片資料17点で、10a・10b、13a・13bは同一個体片である。

1は口径18cm、現高14.2cm。いわゆる両耳壺で、幅広の口縁部が外反しつつ立ち上がり、頸部で括れ、胴部上半に最大径をもつ。口縁部は無文で、頸部には断面「凸」状の太い隆帯が一周する。肩部は橋状把手が2ヶ所付き、胴部には幅広の断面「U」字状の沈線で「枠」状文が施文される。縄文は無節Lである。区画内は斜位に施される。胎土は密で、砂粒・白色粒を含み、色調は赤褐色（5YR4/6）を呈する。

2～18は拓影資料で、2・3は縦位のLの撚糸文地上に2本1対の隆帯を横位に配し、2は隆帯下に頂部が円状の貼付文が付される。色調は2が明赤褐色（5YR5/6）、3がにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、胎土に2・3とも砂粒・小石を含む。4は口唇部に1条沈線がめぐり、沈線外側は口縁に沿って押捺文が連続して施文される。縄文は単節RLである。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土に砂粒・小石・長石を含む。5は隆・沈線で文様が表出される土器で、隆帯脇に強いなぞりが加えられている。縄文は単節RLである。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土に砂粒・白色粒・小石を含む。6～14は縄文地文の胴部片で、6は隆帯と蛇行隆帯、7は隆帯、8・9は半截竹管の腹による平行沈線、10～13は平行する2本もしくは3本沈線が垂下し、10～13は垂下する沈線間が磨消されている。縄文は6～9が単節RL、10～13が単節LRである。色調は6・12が明赤褐色（5YR5/6）、7が赤褐色（5YR4/6）、8・9がにぶい褐色（7.5YR5/4）、10・11・13が橙色（5YR6/6）を呈し、胎土に6～8は砂粒・小石・長石、10～13は砂粒・小石を多く含む。14は沈線による「枠」状文が施される。縄文は無節Lである。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土に赤色粒・小石・長石を含む。15は連丸文系の土器で、地文にRの撚糸文を施文し、口縁部に沿って平行する2本沈線がめぐり。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土に砂粒・赤色粒・小石を含む。16・17は条線地文の口縁部（16）および胴部破片（17）で、16は縦位に、17は斜方向に集合条線が施文される。色調は16が明赤褐色（5YR5/6）、17がにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、

胎土とともに砂粒・小石・長石を含む。18は浅鉢である。無文口縁で、色調は暗赤褐色(2.5 YR3/6)を呈し、胎土に砂粒・小石を多く含む。

第9号住居跡(第39図、写真図版8)

位置 調査区北側のT-10グリッドで検出した。周辺には4m南東に第7号住居跡、約5m南西には土坑群が位置する。また本遺構東側には第65号土坑、北西側には第1号土坑がそれぞれ重複する。重複する第1・65号土坑との新旧関係は、第65号土坑とは不明だが、第1号土坑とは本遺構→第1号土坑(古→新)である。

検出状況 II層下位で炉跡を確認した。この時点で壁および住居西半が攪乱により大きく壊されていた。周囲を精査したところピットが検出され、炉跡とピットとの位置関係から住居跡とした。

形状・規模 規模は不明であるが、形状は柱穴の配置状況から円形の可能性が想定される。

覆土 確認されなかった。

壁・床面 壁は覆土の流出・削平が著しく検出することができなかった。床は炉跡検出面をもって床面とした。とくに硬化した部分もなかった。

主柱穴 全容不明だが、床面からの深度50cm前後のP1・P3・P4が想定される。このほか深度の浅いP2があるが、隣り合うP3との柱間の間隔が他の柱穴間に比し極めて狭いこと等を考慮すると、このP2は入り口施設に伴うピットの可能性がある。

周溝 検出されなかった。

炉跡 床面中央やや北寄りに地床炉(F)を検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、長径62cm、短径55cm、深さ16cmを測る。炉底は被熱により底面が著しく硬化していた。

覆土は3層に分けた。

第1層 暗褐色土 焼土粒及びローム粒を少量含む。

第2層 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを含む。

第3層 褐色土 ローム粒及び焼土粒を含む。

埋壘 検出されなかった。

時期 加曽利E3式期

出土遺物(第40図1a～3b、写真図版25)

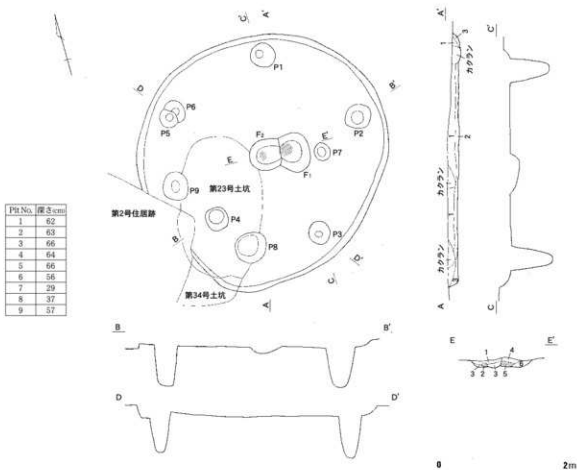
土器(1a～3b)

呈示した6点は、2を除きすべて炉跡直上からの出土で、1a～1c、3a・3bはそれぞれ同一個体片である。

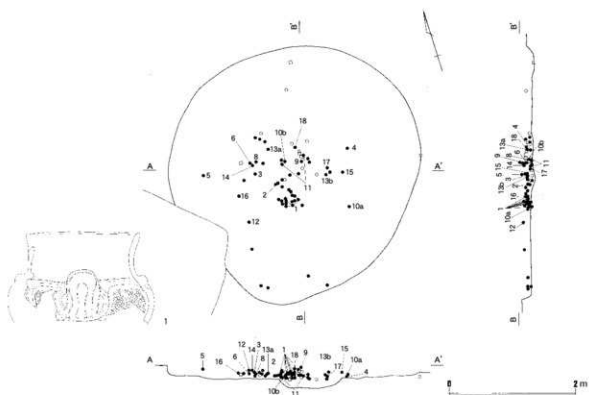
1a～1c・2は胴部破片で、ともに単節LR縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調は1a～1cがにぶい褐色(7.5YR5/4)、2がにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、胎土はともに砂粒・小石を多く含む。3a・3bは条線地文の胴部片である。色調はともににぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、胎土に砂粒・小石・長石を含む。

第10号住居跡(第41図、写真図版9)

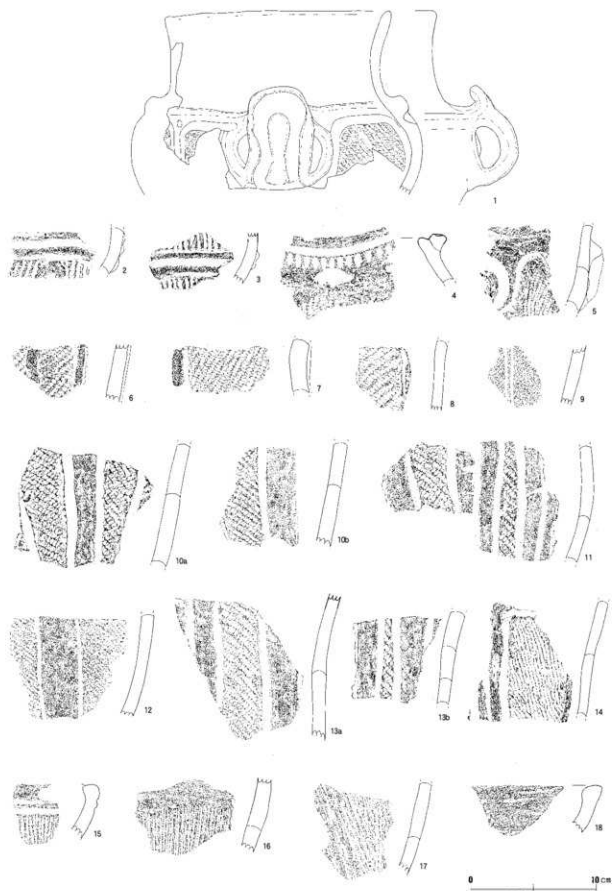
位置 調査区ほぼ中央西寄りのQ・R-5グリッドで検出した。周辺には土坑・ピットが



第36図 第8号住居跡平・断面図 (L = 39.6m)

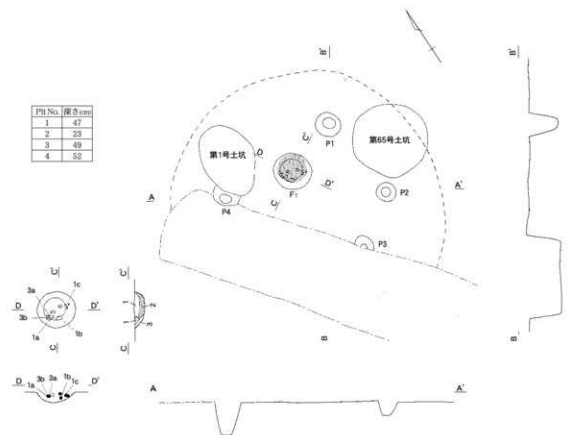


第37図 第8号住居跡土器個体別分布及び遺物出土図 (L = 39.6m)

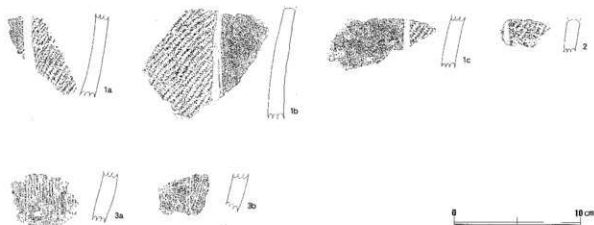


第38图 第8号住居跡出土遺物

Pl. No.	厚 (mm)
1	47
2	23
3	49
4	52



第39图 第9号住居跡平・断面图 (L = 39.6m)



第40图 第9号住居跡出土遺物

分布し、3 m北西には第12号住居跡、8 m北には第8号住居跡が位置する。また北壁には該期の第22号土坑が重複する。第22号土坑との新旧関係は現地調査では観察不備のため明確にし得なかったが、第22号土坑→本遺構(古→新)と思われる。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、円形プランの住居覆土を確認し調査を開始した。

形状・規模 ほぼ円形を呈し、長短径3.6m前後を測る。主軸方位はN-5.5°-Eを示す。

覆土 耕作による流出・削平が著しく1層のみ確認した。

第1層 暗褐色土 ローム粒を多量含む。

壁・床面 壁は開き気味に立ち上がり、残存壁高約10cmを測る。床はⅢ層上面に構築されており、全体にほぼ平坦で炉周辺の硬化が顕著であった。

主柱穴 深度の浅いP8、出入口施設に伴うと思われるP4を除き、炉(F₁)を中心に五角形に配置されたP1~P3・P5・P6とP7が想定される。重複する2基(P1・P7)の新旧関係はP7→P1(古→新)である。

周溝 検出されなかった。

炉跡 床面はほぼ中央で埋甕炉(F₁)を検出した。主軸方向の奥壁側へやや傾斜した状態で、胴部上半以上と底部を欠く深鉢の胴部(R₁)のみが埋設されていた。掘り方の平面プランは不整形を呈し、長径70cm、短径58cm、深さ20cmを測る。炉底の赤化、ロームの焼け込みは顕著であったが、土器内の赤化は認められなかった。なお北壁にピットを伴う浅い掘り込み(1土坑)が重複するが、柱穴の配置や現況の炉との位置関係・形状等から推測するとこの掘り込みは本来の炉であった可能性が想定され、西壁寄りに位置するピット状の浅い掘り込みは「炉体土器」を抜き去った掘り方とも考えられる。

覆土は6層に分けられる。5・6層は土器(R₁)内堆積土である。

第1層 褐色土 焼土粒を少量含む。

第2層 明褐色土 焼土粒を多量含む。

第3層 赤褐色土 焼土主体。

第4層 黄褐色土 被熱したローム土。

第5層 暗褐色土 焼土粒を微量含む。

第6層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

埋甕 検出されなかった。

時期 加曾利E2式期

備考 前述した新旧柱穴の重複、炉跡の付け替えを想定すると本住居跡は最低1回以上の改修あるいは補修の可能性が推測される。

出土遺物 (第42図1~8、写真図版25)

土器 (1~7)

呈示した7点は、炉体土器1点と覆土出土の6点である。

1は現高22.2cm。炉内に埋設されていた深鉢である。連弧文系の土器で、胴部上半以上と底部を欠損する。地文に櫛歯状工具による集合条線を縦位に施し、平行して垂下する2本沈線と胴部上位に横位弧線文が施文される。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土に砂粒・小石を多く含む。

2～7は拓影資料で、2は撚糸地文に隆帯が垂下する。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、胎土に砂粒・小石・長石を含む。3は内弯する口縁部破片で、頸部に断面蒲鉾状の隆帯をめぐらせ、口縁部は地文に付加条縄文が施文される。色調は暗赤褐色(2.5YR3/6)を呈し、胎土に砂粒・小石・長石を含む。4は口縁部付近の破片で、平行沈線を伴う刺突文を横位にめぐらせ、横走りする沈線から単沈線が垂下する。5は胴部破片で、平行して垂下する2本沈線間が磨消されている。6は横位の刺突文列と垂下する波状沈線が施文される。縄文は4～6とも単節RLである。色調は4が暗赤褐色(2.5YR3/6)、5がにぶい黄褐色(10YR5/4)、6が暗赤褐色(2.5YR3/6)を呈し、胎土はともに砂粒・小石・赤色粒を含む。7は直線的に立ち上がる口縁部破片で、口縁部下に横位の沈線、胴部に「ハ」の字状文が粗雑に施文される。色調は暗赤褐色(2.5YR3/6)を呈し、胎土に砂粒・小石を多く含む。

石器(8)

8は定角式磨製石斧である。形状は撥形を呈し、基端部や側縁部に敲打痕がみられ、刃部には使用時の衝撃により生じたと思われる大きな剝離痕がみられる。石質は緑色凝灰岩で、長さ8.09cm、幅4.38cm、厚さ1.79cm、重量106.3gを量る。

第11号住居跡(第43図、写真図版25)

位置 調査区南西側のN・O-3グリッドで検出した。周辺には9m北東に第12号住居跡、12m東に第10号住居跡、11m南東に第24号住居跡が位置し、周囲には近接して該期の土坑・ピットが分布する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、II層中で暗褐色の住居覆土を確認し調査を開始した。

形状・規模 西側半分が調査区域外に位置するため全容は判然としないが、現況から径4m前後の円形プランが想定される。

覆土 攪乱による削平が著しく、2層のみ確認した。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 褐色土 ローム粒を多量含む。

壁・床面 壁は開き気味に立ち上がり、残存壁高10cm前後を測る。床はII層下位にあり、ほぼ平坦に構築されている。とくに硬化面は確認されなかった。

支柱穴 深度からP1・P2が支柱穴と考えられる。

周溝 検出されなかった。

炉跡 床面中央やや南側寄りに地床炉(F₁)を検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、長径65cm、短径60cm、深さ約20cmを測る。炉底面は赤化が著しく、焼け込みが顕著にみられた。

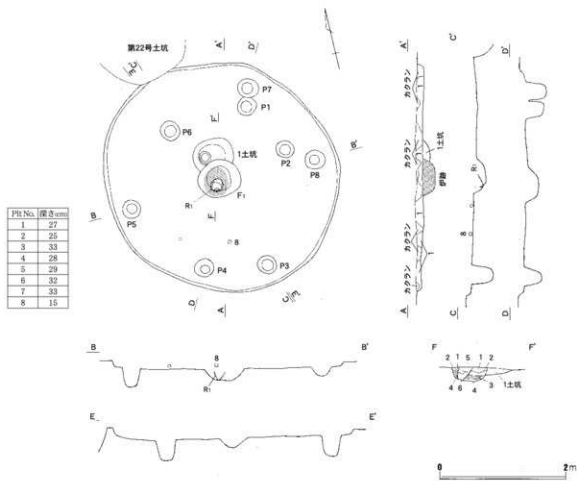
覆土は3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

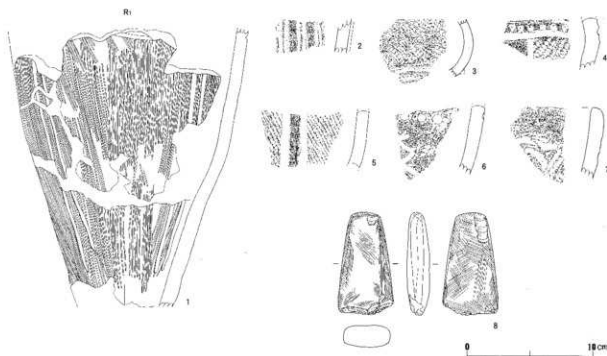
第2層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を少量含む。

第3層 赤褐色土 焼土主体。

埋壘 検出されなかった。



第41図 第10号住居跡平・断面図 (L=39.6m)



第42図 第10号住居跡出土遺物

時期 加曾利E3式期

出土遺物 (第44図1～9b、写真図版25)

土器 (1～9b)

呈示した9点は、炉跡直上出土3点(7・9a・9b)のほか覆土出土6点で、9a・9bは同一個体片である。

1はキャリバー形深鉢の口縁部破片で、口縁部上位を隆帯で横位区画後内部に沈線による渦状のモチーフを横位に描出し、周囲の空間を縦位の単沈線で埋めている。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈し、胎土に砂粒・小石・白色粒を含む。2は頸部破片で、頸部と胴部を画する2本隆帯が横走りする。地文はLの撚糸文である。色調は明赤褐色を呈し、胎土には白色粒・小石・長石を含む。3～8は胴部破片とともに縄文を地文とし、5は不明だが他は2本沈線が垂下し、6・7・8は沈線間が磨消されている。4は垂下する2本沈線間に蛇形沈線が垂下する。3は平行沈線が半載竹管の腹で表出されている。縄文は3・5・8が単節RL、4・6・7が単節LRである。焼成はともに良好で、色調は3がにぶい黄褐色(10YR5/4)、4～7がにぶい赤褐色(5YR5/4)、8がにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土に砂粒・小石を多く含む。9(9a・9b)は櫛歯状工具による集合条線を地文とし、無文の口縁部下に1条沈線がめぐる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。

第12号住居跡 (第45図、写真図版26)

位置 調査区西側の0・P-5・6グリッドで検出した。周辺には3m南東に第10号住居跡、8m北東に第8号住居跡、4m北西に第13号住居跡、すぐ北側に第25号住居跡、南東側に第70・71号土坑が位置する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、II層下位で炉跡と埋甕を検出したがこの時点で壁を失っており床面も明確に確認することができなかった。周囲を精査したところピットが検出され、炉跡・埋甕、ピットとの位置関係から住居跡とした。

形状・規模 炉と埋甕の位置から北東側に張出し部をもつ柄鏡形が推測されるが、削平が著しいため全容は不明である。主軸方位はP2・炉・埋甕を結ぶラインで、N-28°-Eである。

覆土 確認できなかった。

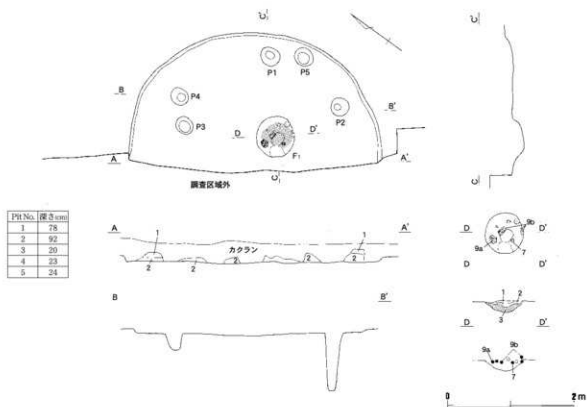
壁・床面 前述したように、壁は失われており検出できなかった。床は炉と埋甕の検出レベルを基に推定した。とくに硬化面等は検出されなかった。

主柱穴 P1～P5の5基が想定される。柄鏡形を推測すれば、P1～P3は壁柱穴、P4・P5は連結部の対ピットの可能性が考えられる。

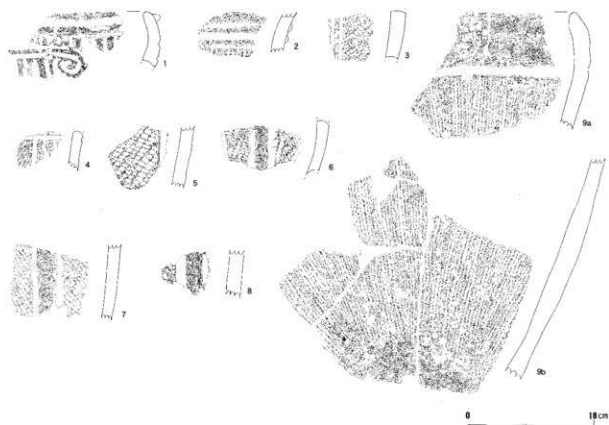
周溝 検出されなかった。

炉跡 P1～P5を結んだピット間のほぼ中央に埋甕炉(F₁)を検出した。深鉢の胴部のみが正位に埋設されていた。炉の掘り方は平面プランが隅丸長方形を呈し、長径55cm、短径35cm、深さ15cmを測る。土器内は赤化が著しく、炉底面の焼け込みも顕著であった。覆土は3層に分けられ、第1層が土器内覆土、第2・3層が掘り方の充填土である。

第1層 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを含む。



第43図 第11号住居跡平・断面図 (L = 39.9m)



第44図 第11号住居跡出土遺物

第2層 褐色土 ローム粒を多量、焼土ブロックを少量含む。

第3層 明黄褐色土 硬化したロームブロックを多量含む。

埋嚢 住居主軸上のP4・P5間のほぼ中央に1基検出された。埋設土器(U₁)は二次的に攪乱を受けているものと思われる、掘り方内に潰れた状態で遺存していた。掘り方の平面プランはほぼ円形を呈し長径55cm、短径50cm、深さ15cmを測る。覆土は4層に分けられ、第1・2層が土器内覆土、第3・4層が掘り方の充填土である。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム塊を少量含む。

第3層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第4層 明褐色土 ローム粒を含む。

時期 加曽利E4式期

出土遺物 (第47図、写真図版26)

土器 (1～5)

呈示した5点は、炉体土器・住居埋嚢各1点のほか、埋嚢の掘り方周辺に分布していた3点である。

1は現高16cm。深鉢の胴部を転用した炉体土器である。条線地文の土器で、胴部が2本沈線で縦区画され、区画内外が磨消されている。垂下する2本沈線間は施文幅が異なりややランダムに施されている。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には砂粒・白色粒・小石を含む。

2は口径(33cm)、器高29.8cm。住居の埋設土器に転用された鉢形土器である。内湾する口縁部から小さな底部へ緩やかに移行する器形で、最大径を胴部上位に測る。口縁部下に断面三角形の微隆起帯をめぐらせ、以下胴部に櫛歯状工具による条線文を縦位基調に密に施す。焼成は良好で、色調は橙色(5YR6/6)を呈し、胎土に砂粒・赤色粒・小石を含む。

3～5は口縁部破片である。3・4は条線地文でともに口縁部下に1条沈線がめぐる。色調は3が明褐色(7.5YR5/3)、4が明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、胎土に砂粒を多く含む。5は器体に厚みのある土器で、口縁部は無文で、口唇部は丸頭状を呈する。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。

石器 (6・7)

6は打製石斧である。形状は撥形を呈し、刃部は二次加工されている。石質は安山岩で、長さ8.8cm、幅4.4cm、厚さ1.6cm、重量67gを量る。

7は敲石である。表面下半と底面に使用時に生じたと思われる剝離痕が認められる。石質は砂岩で、長さ11.7cm、幅6.1cm、厚さ6.8cm、重量540gを量る。

第13号住居跡 (第48図、写真図版10・11)

位置 調査区北西側の0-7グリッドで検出した。周辺には近接して南東側に第25・12号住居跡、9m東側には第8号住居跡がそれぞれ位置する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、II層中で埋嚢を検出した。しかし、この時点で壁を失っており、床も明確に確認することができなかった。周囲を精査したところ、柱穴と

炉跡が検出され住居跡とした。

形状・規模 住居北西側が調査区外にかかり全容を把握できなかった。検出できた範囲では、径4 m前後の円形プランを呈するものと思われる。主軸方位は埋裏と炉跡を結ぶラインで、 $N-46^{\circ}-W$ を示す。

覆土 調査区北西壁面で2層のみ確認された。

第1層 暗黒褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

壁・床面 壁は失われており検出できなかったが、調査区壁面では残存壁高約20cmを確認した。床は炉跡と埋裏の検出レベルを基に推定した。

主柱穴 P1・P2とも掘り込みが浅いが、2基とも主柱穴と考えたい。

周溝 検出されなかった。

炉跡 P1・P2を結ぶラインのややP1寄りに重複して2基(F_1 ・ F_2)検出された。新旧関係は $F_2 \rightarrow F_1$ (古→新)である。 F_1 は掘り方の縁辺に大形礫が置かれており、本来は石囲炉であった可能性が高い。 F_2 は地床炉であろう。掘り方は F_1 が径35cm、深さ約15cm、 F_2 が径約1m、深さ約25cmを測る。炉底は F_1 ・ F_2 とも赤化し、焼け込みが顕著であった。覆土は各3層(F_1 :第3～5層、 F_2 :第6～8層)に分けられる。

第3層 明褐色土 ローム粒及び焼土粒を微量含む。

第4層 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを多量含む。

第5層 明褐色土 硬化したロームブロックを多量含む。

第6層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を微量含む。

第7層 明褐色土 ローム粒及び焼土粒を少量含む。

第8層 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量含む。

埋裏 炉(F_2)の端部から約50cm東側に1基検出された。当初1個体と思われたが、深鉢の胴部下半から底部2個体($U_1-1 \cdot 2$)が U_1-1 を下に入れ子状を呈し、 $U_1-1 \cdot 2$ が正位に埋設されていた(写真図版11)。掘り方の平面形は楕円形を呈し、長径60cm、短径45cm、深さ15cmを測る。覆土は3層に分けられ、第1層が土器(U_1-2)内覆土、第2・3層が掘り方充填土である。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

時期 加曾利E3式期

出土遺物 (第49図1・2、写真図版26)

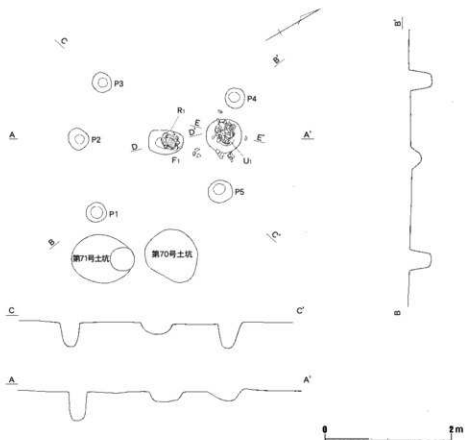
土器 (1・2)

呈示した2点は、住居埋裏2点である。

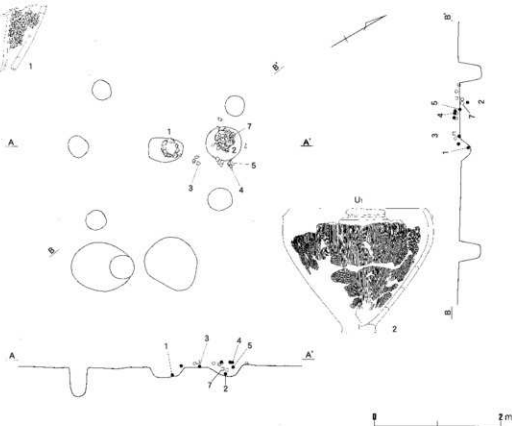
1は底径6.4cm、現高13.7cm。胴部下半から底部が遺存する深鉢である。胴部は単節LR縄文を地文とし、平行して垂下する2本沈線間が磨消されている。色調はにぶい褐色(7.5YR 5/4)を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。

2は底径5.8cm、現高6cm。深鉢の胴部下半で、単節RL縄文を地文とし、平行して垂下す

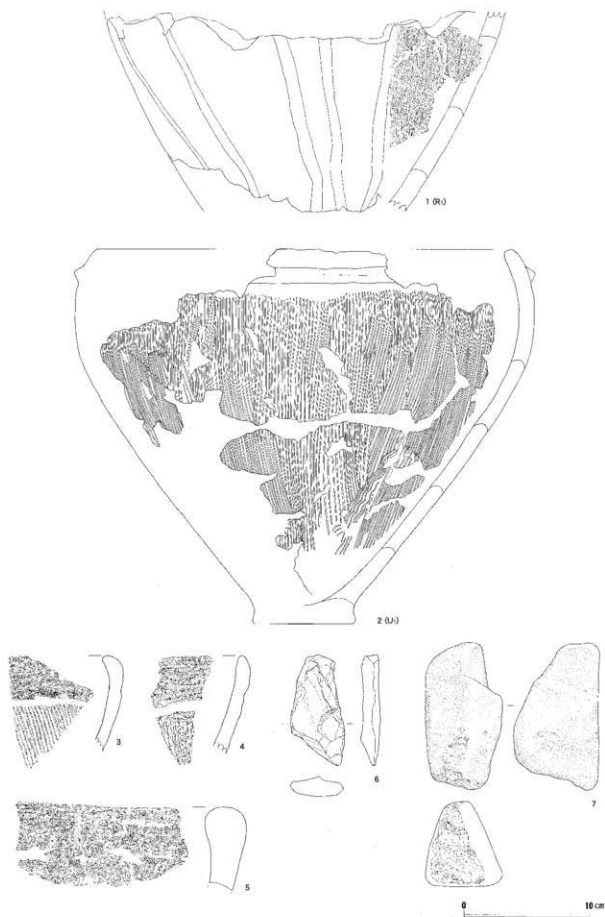
Pt No.	径 3 cm
1	36
2	45
3	38
4	35
5	40



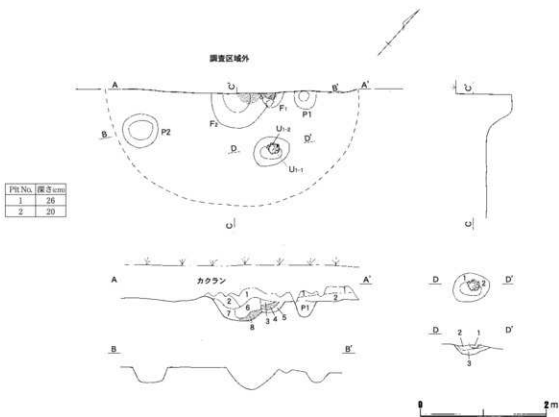
第45図 第12号住居跡平・断面図 (L = 39.6m)



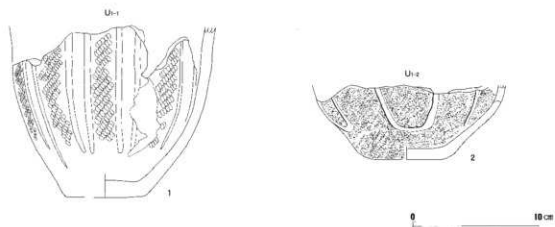
第46図 第12号住居跡土器個体別分布及び遺物出土図 (L = 39.6m)



第47图 第12号住居跡出土遺物



第48図 第13号住居跡平・断面図 (L = 39.7m)



第49図 第13号住居跡出土遺物

る単沈線下端が連結され「U」字状のモチーフが描出される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土に砂粒・小石を含む。

第24号住居跡（第50図）

位置 調査区南西側のQ・R-25・1グリッドで検出した。周辺には約12m北西に第11号住居跡、約14m北に第10号住居跡がそれぞれ位置する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、Ⅲ層上面で第32号土坑（陥し穴）と重複する炉跡を検出した。この時点で壁面と床面が削平されていたが、炉跡を中心に周囲を精査したところ、柱穴が検出され住居跡とした。

形状・規模 炉の位置及び周囲に分布するピットの分布範囲から、直径5m前後の円形プランが想定される。主軸方位は柱穴間の間隔の狭いP1・P2間を入口部とすればP1・P2間と炉を結ぶラインでS-37°-W、P3・P4間を入口部とすればP3・P4間と炉を結ぶラインでN-42°-Wを示す。

覆土 確認されなかった。

壁・床面 前述したように、壁は失われており検出できなかった。床は炉の検出レベルをもって床面とした。

主柱穴 炉を中心に廻る7基の内、P7・P1・P4を除くP2・P3・P5・P6が想定され、4基を結んだ平面形は長方形を呈する。

周溝 検出されなかった。

炉跡 柱穴の配置から推測して床面ほぼ中央に地床炉（F）を検出した。炉の掘り方は平面プランが楕円形を呈し、長径70cm、短径50cm、深さ25cmを測る。炉底は焼土が厚く堆積し、被熱硬化が顕著に見られた。覆土は2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を少量含む。

第2層 暗赤褐色土 焼土主体。

埋壘 検出されなかった。

時期 加曾利E1式期

出土遺物（第51図1～3、写真図版27）

土器（1～3）

呈示した3点は、いずれもピット中出土である。

1は波状口縁を呈し、頂部に橋状把手が付される。口縁部文様は面取りされた低平な隆帯で波状モチーフが施される。地文はLの撚糸文が縦位に施文される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、胎土に砂粒・小石・長石を含む。2は深鉢の口縁部片で、横位に2本隆帯をめぐらせ、隆帯脇は沈線が併走する。縄文は単節LRである。胎土は密で、砂粒・小石を含み、色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。3は波状口縁を呈し、頸部に幅広の無文帯をもつ。口縁部文様は面取りされた低平な隆帯で楕円状モチーフが施される。縄文は単節LRである。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、胎土に砂粒・小石・長石を含む。

第25号住居跡（第52図、写真図版11）

位置 調査区北西側の0・P-6・7グリッドで検出した。周囲には北西に第13号住居跡、南側に第12号住居跡、約5m北東には第8号住居跡が位置する。

検出状況 表土除去後の遺構確認の際に、一部遺物の集中が認められ、それらの範囲を中心にトレンチを設定して掘り下げを行ったが、その時点で壁を削平されており住居跡と認定することができなかった。後に周囲を精査したところ、埋裏と柱穴が検出され住居跡とした。

形状・規模 埋裏を起点に廻るビットの分布範囲から、直径4m前後の円形プランが想定される。

覆土 確認されなかった。

壁・床面 壁は失われており、確認できなかった。床は埋裏の検出レベルを基に推定した。

主柱穴 ビット6基のうち、P2を除くP1・P3～P6が想定される。重複する2基（P5・P6）の新旧関係はP6→P5（古→新）である。

周溝 検出されなかった。

炉跡 検出されなかった。

埋裏 住居南東側にP4と接し1基検出された。胴部下半から底部が遺存する深鉢（U）が正位に埋設されていた。掘り方の平面プランは円形を呈し、長短径約40cm、深さ15cmを測る。掘り方の覆土は2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

時期 加曽利E3時期

備考 前述した新旧柱穴の重複を想定すると本住居跡は最低1回以上の改修もしくは補修の可能性が推測される。

出土遺物（第53図1～4、写真図版27）

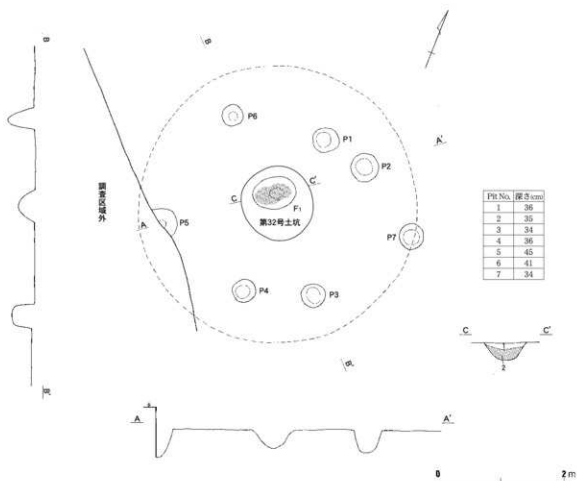
土器（1～4）

提示した4点は、住居埋裏1点とビット出土の3点である。

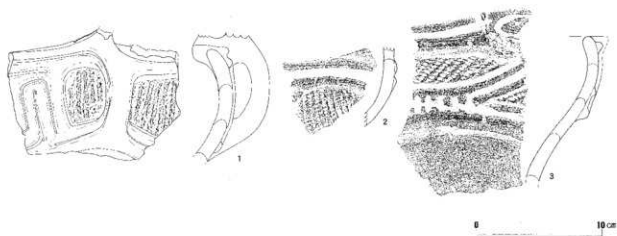
1は底径7.6cm、現高13.3cm。住居埋裏に転用された埋設土器である。深鉢の胴下半部から底部で、地文に歯状集合条線文が縦位に施される。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土に赤色粒・小石を多く含む。

2～4は拓影資料で、2は深鉢の口縁部破片、3・4は胴部片である。2は単節RL縄文を地文とし、口縁部下に1条沈線がめぐる。胴部は垂下する2本沈線間に逆「U」字状文が施文される。3は単節LR縄文を地文とし、2本沈線を地文とし、2本沈線が垂下する。色調は、2がにぶい褐色（7.5YR5/4）、3が明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土に砂粒・小石・白色粒を含む。4は条線地文の深鉢の胴部片である。色調は灰褐色（7.5YR4/1）を呈し、胎土に砂粒・白色粒を含む。

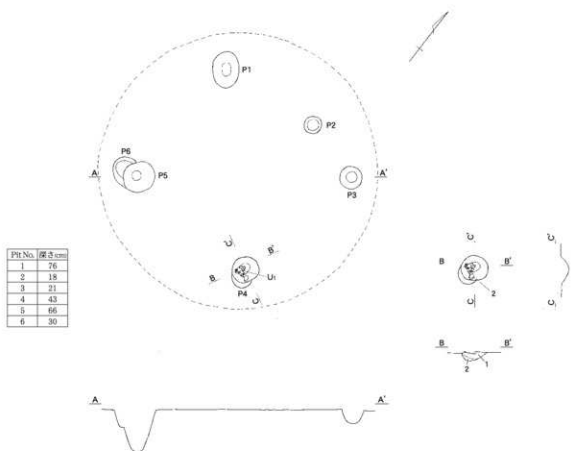
（前田秀則）



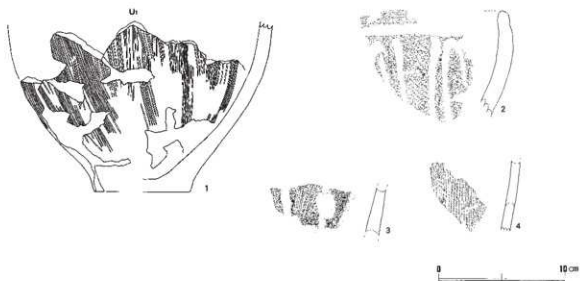
第50图 第24号住居跡平・断面图 (L = 39.5m)



第51图 第24号住居跡出土遺物



第52图 第25号住居跡平・断面图 (L = 39.6m)



第53图 第25号住居跡出土遺物

土坑・ピット

今回の調査では、土坑もしくはピットと認定した遺構は総数111基（土坑62基、ピット49基）である。調査区における分布状況は、土坑・ピットとも住居分布に沿うようにその内外に分布する傾向が見られ、概して西半にはピットが多く、北半には土坑が多いなどの傾向が窺われる（第12図）。特徴的な土坑としては、「陥し穴」と呼ばれる土坑が1基（第32号土坑）、埋設土器を伴うものが3基（第1・8・13号土坑）、大形土器片を伴うものが1基（第38号土坑）、大珠を伴うもの1基（第11号土坑）等が検出されている。

以下、土坑・ピットの詳細について記述するが、出土遺物については図化可能なものを第62～67図に呈示した。ただその大半が覆土中からの出土であり、それらが全て直接的な時期決定には至らないことを注意したい。

土坑（第12・54～59図、第4表）

第1号土坑（第54図、写真図版12）

位置 調査区北側T-10グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。第9号住居跡と重複している。新旧関係は第9号住居跡→本遺構（古→新）である。周辺には南東側に第65号土坑が近接する。

長軸方位 N-11°-E。

形状・規模 楕円形を呈し、長径114cm、短径84cm、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 埋設土器内の覆土（第3・4層）を含め4層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び炭化粒を微量含む。

第2層 褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 暗黒褐色土 ローム粒を微量含む。

第4層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

出土遺物 底面に接して逆位に埋設されていた埋設土器のほか、土器20点、礫1点が出土した。そのうち、第62図に埋設土器1点（第62図1）を呈示した。

備考 本遺構は埋設土器の出土状況から墓坑と思われる。

第2号土坑（第54図、写真図版14・15）

位置 調査区北側S-8・9グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。周辺には北側にP1・第4号土坑、東側に第5号土坑、南西側に第6・30号土坑が位置している。

長軸方位 N-30°-W。

形状・規模 開口部で長径134cm、短径130cmの円形、坑底部で長径102cm、短径94cmの不整形円形を呈し、確認面から深さ45cmを測る。底面は平坦で、径39×31cm、深さ40cmのピットが検出された。壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 5層に分けられる。

第1層 明褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒及びスコリアを微量含む。

第3層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

第4層 褐色土 ローム粒及びスコリアを含む。

第5層 明褐色土 ローム粒・塊を含む。

出土遺物 土器19点が出土した。そのうち、第62図に土器3点(第62図2～4)を呈示した。

第3号土坑(第54図、写真図版14・15)

位置 調査区北側S-9グリッドに位置し、II層下位で確認した。北東壁はP65と重複している。新旧関係は本遺構→第65号ピット(古→新)である。周辺には南東側に第69号土坑、南側にP1・第4号土坑が位置している。

長軸方位 N-60°-E。

形状・規模 開口部で長径128cm、短径126cmの隅丸方形、坑底部で長径97cm、短径94cmの不整形を呈し、確認面から深さ33cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器13点が出土した。そのうち、第62図に土器2点(第62図5・6)を呈示した。

第4号土坑(第54図、写真図版14・15)

位置 調査区北側S-9グリッドに位置し、II層下位で確認した。北壁はP1と重複している。新旧関係は本遺構→P1(古→新)である。周辺には北側にP65・第3号土坑、北東側に第69号土坑、南側に第2・5号土坑が位置している。

長軸方位 N-26°-E。

形状・規模 不整形を呈し、検出した範囲で長径58cm、短径54cm、深さ29cmを測る。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器6点が出土した。

第5号土坑(第54図、写真図版14・15)

位置 調査区北側S・T-8・9グリッドに位置する。II層下位で確認し、周辺には東側に第9号土坑、西側に第2号土坑が位置している。

長軸方位 N-47°-E。

形状・規模 不整形を呈し、長径166cm、短径136cm、深さ44cmを測る。底面は平坦で、径42×35cm、深さ25cmのピットが検出された。壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 6層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒及び赤色スコリアを微量含む。

第3層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第4層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

第5層 明黄褐色土 ローム主体に褐色土が少量混じる。

第6層 黄褐色土 ローム主体、土質は軟質。

出土遺物 土器20点が出土した。そのうち、第62図に土器3点（第62図7～9）を呈示した。

第6・30号土坑（第54図、写真図版14）

位置 調査区北側S-8グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。新旧関係は第30号土坑→第6号土坑（古→新）である。周辺には北東に第2号土坑が位置している。

長軸方位 第6号土坑：N-76°-W、第30号土坑：N-11°-E。

形状・規模 第6号土坑が不整円形、第30号土坑が不整楕円形を呈する。規模は第6号土坑が長径114cm、短径104cm、深さ30cm、第30号土坑が長径115cm、短径102cm、深さ47cmを測る。底面は第6号土坑が平坦で、ほぼ中央に径37×35cm、深さ27cmのビットが検出された。第30号土坑の底面は南側に傾斜している。壁は2基ともやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 第6号土坑から土器1点、第30号土坑から土器4点が出土した。

第8号土坑（第54図、写真図版12）

位置 調査区西側P-4グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には北西に第42号土坑、南西には第43号土坑が位置している。

長軸方位 N-28°-E。

形状・規模 不整円形を呈し、長径36cm、短径35cm、深さ12cmを測る。底面は丸底で壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒及び赤色スコリアを微量含む。

出土遺物 埋設土器1点が出土し、第62図（第62図10）に呈示した。

備考 本遺構は、包含層の削平・消失を考慮すると住居埋襲の可能性が考えられる。

第9号土坑（第55図・写真図版14・15）

位置 調査区北側T-8・9グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。周辺には北東に第14号土坑、東側に第18号土坑・P66が位置している。

長軸方位 N-32°-W。

形状・規模 不整円形を呈し、長径160cm、短径149cm、深さ48cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

第3層 明褐色土 ローム塊を少量含む。

出土遺物 土器14点が出土した。そのうち、第62図に土器3点（第62図11～13）を呈示した。

第10号土坑（第55図）

位置 調査区中央S-5グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には東側にP2・5が位置している。

長軸方位 N-18°-W。

規模・形状 不整形を呈し、長径76cm、短径75cm、深さ13cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

第2層 明黄褐色土 ローム主体。

出土遺物 土器27点、石器1点、礫8点が出土した。そのうち、第62図に土器2点（第62図14・15）、石器1点（第62図16）を呈示した。

第11・16号土坑（第55図、写真図版13）

位置 調査区北西側R-7グリッドに位置し、II層下位で確認した。P4と重複している。新旧関係は第16号土坑→第11号土坑→P4（古→新）である。周辺には北西側に第8号住居跡が位置している。

長軸方位 第16号土坑：不明、第11号土坑：N-55°-E。

形状・規模 形状は第11号土坑が開口部で楕円形、坑底部で略円形を呈し、規模は開口部で長径207cm、短径179cm、坑底部で長径142cm、短径134cm、深さ50cmを測る。第16号土坑は形状・規模ともに不明である。底面は2基とも平坦で、壁は、第16号土坑は緩やかに、第11号土坑はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 7層（第1～3層は第16号土坑、第4～7層は第11号土坑）に分けられる。

第1層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

第3層 明黄褐色土 ローム土と褐色土の混土。

第4層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第5層 暗褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

第6層 明褐色土 ローム塊を少量含む。

第7層 明黄褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 第11号土坑から土器21点、石製品1点（大珠）が出土した。大珠は西壁下から土坑中央に向かって約20cm内側に位置し、坑底部から5cm程浮いた状態で出土した。第63図には、土器3点（第63図17～19）、石製品1点（第63図20）を呈示した。

備考 第11号土坑は大珠の出土状況から墓坑と思われる。

第12号土坑（第55図・写真図版15）

位置 調査区北西側 O・P-6 グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には北東側に第25号住居跡、南東側に第12号住居跡が位置している。

長軸方位 N-13°-E。

規模・形状 開口部で円形、坑底部で不整形円形を呈し、規模は開口部で長径126cm、短径120cm、坑底部で長径115cm、短径98cm、深さ44cmを測る。底面は平坦で、東側に径29cm×27cm、深さ15cmのビットが検出された。壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 6層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

第3層 明褐色土 ロームブロックを少量含む。

第4層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

第5層 褐色土 ロームブロックを少量含む。

第6層 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

出土遺物 土器5点が出土した。そのうち、第63図に土器1点（第63図21）を呈示した。

第13号土坑（第55図、写真図版12）

位置 調査区中央 T-4 グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には北西側に P2・5 が位置している。

長軸方位 N-38°-W。

形状・規模 不整楕円形を呈し、長径53cm、短径48cm、深さ16cmを測る。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 褐色土 ロームブロックを少量含む。

出土遺物 埋設土器1点が出土し、第63図（第63図22）に呈示した。

備考 本遺構は、包含層の削平・消失を考慮すると住居埋塞の可能性が考えられる。

第14号土坑（第55図、写真図版14・15）

位置 調査区北側 T・U-9 グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には南側に P66・第18号土坑が位置している。

長軸方位 N-19°-E。

形状・規模 不整形円形を呈し、長径120cm、短径112cm、深さ37cmを測る。底面は平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

出土遺物 土器25点、石器1点が出土した。そのうち、第63図に土器2点（第63図23・24）を呈示した。

第15号土坑（第55図・写真図版13・17）

位置 調査区中央寄りU-5グリッドに位置し、Ⅲ層上位で確認した。周辺には東側にP11が位置している。

長軸方位 N-22°-W。

形状・規模 不整形円形を呈し、長径28cm、短径24cm、深さ7cmを測る。底面は平底で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

出土遺物 土器3点が出土した。そのうち、第63図に土器1点（第63図25）を呈示した。

第17号土坑（第56図）

位置 調査区北側R-10グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。周辺には南側に第4号住居跡が位置している。

長軸方位 未完掘のため不明。

形状・規模 調査区外へ延長しているため形状は不明だが、検出した範囲で長径100cm、短径50cm、深さ22cmを測る。底面は平坦で、径95cm、深さ27cmのピットが検出された。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器5点、礫1点が出土した。そのうち、第63図に土器1点（第63図26）を呈示した。

第18号土坑（第56図、写真図版14・15）

位置 調査区北側T・U-8・9グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。P66と重複している。新旧関係は本遺構→P66（古→新）である。周辺には北側に第14号土坑、西側に第9号土坑が位置している。

長軸方位 N-52°-W。

形状・規模 ほぼ円形を呈し、長・短径約95cm、深さ34cmを測る。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器14点が出土した。そのうち、第63図に土器2点（第63図27・28）を呈示した。

第19号土坑（第56図）

位置 調査区北側Q・R-9グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。周辺には北東に第

4号住居跡・P3、西側にP19が位置している。

長軸方位 N-80°-E。

形状・規模 開口部で不整楕円形、坑底部で楕円形を呈し、規模は開口部で長径144cm、短径125cm、坑底部で長径115cm、短径89cm、深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦で、南側で径24×22cm、深さ10cmのビットが検出された。壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 5層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 暗褐色土 ローム粒及び赤色スコリアを少量含む。

第4層 褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

第5層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 土器6点が出土した。そのうち、第63図に土器1点（第63図29）を呈示した。

第20号土坑（第56図、写真図版15）

位置 調査区北西側Q-7グリッドに位置し、II層上位で確認した。周辺には北側に第2号住居跡、西に第25号住居跡が位置している。

長軸方位 N-72°-W。

形状・規模 開口部で不整形円形、坑底部で不整楕円形を呈し、規模は開口部で長径177cm、短径164cm、坑底部で長径131cm、短径104cm、深さ41cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を多量、炭化粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 明褐色土 ローム塊を多量含む。

出土遺物 土器11点、石器1点が出土した。そのうち、第64図に石器1点（第64図30）を呈示した。

第21号土坑（第56図）

位置 調査区北西側P・Q-8グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には東側に第2号住居跡、南側にP15、西側に第26号土坑が位置している。

長軸方位 N-56°-E。

形状・規模 開口部で楕円形、坑底部で不整楕円形を呈し、開口部で長径154cm、短径133cm、坑底部で長径90cm、短径73cm、深さ56cmを測る。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 4層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び赤色スコリアを微量含む。

第2層 褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 明褐色土 ローム粒を少量含む。

第4層 明黄褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 土器1点が出土した。

第22号土坑 (第56図)

位置 調査区中央寄りQ・5・6グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。第10号住居跡と重複している。新旧関係は本遺構→第10号住居跡(古→新)である。周辺には西側に第46号・第47号土坑が位置している。

長軸方位 N-40°-W。

形状・規模 形状は不整楕円形を呈し、規模は長径167cm、短径140cm、深さ56cmを測る。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 4層に分けられる

第1層 明褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 明黄褐色土 ソフトローム主体。

第4層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 土器43点が出土した。そのうち、第64図に土器11点(第64図31~41)を呈示した。

第23・34号土坑 (第56図、写真図版15)

位置 調査区北西側Q・R-7・8グリッドに位置し、平面プランはⅢ層上位で確認した。第2号・第8号住居跡と重複している。新旧関係は第23号土坑→第34号土坑→第8号住居跡→第2号住居跡(古→新)である。周辺には南東側にP4・第11・16号土坑が位置している。

長軸方位 第23号土坑：N-18°-E、第34号土坑：N-88°-E。

形状・規模 2基とも不整楕円形を呈し、第23号土坑が長径225cm、短径130cm、深さ56cmを測る。第34号土坑が長径212cm、短径153cm、深さ26cmを測る。底面は2基とも平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

出土遺物 土器が第23号土坑から63点、第34号土坑から土器4点が出土した。そのうち、第64図に第23号土坑から出土した土器18点(第64図42~58)を呈示した。

第24号・54号土坑 (第56図、写真図版13・17)

位置 調査区中央寄りU・V-5グリッドに位置し、平面プランはⅢ層上位で確認した。P64と重複している。新旧関係は第54号土坑→第24号土坑→P64(古→新)である。周辺には北側にP5、南西側にP11・第15号土坑が位置している。

長軸方位 第24号土坑：N-45°-W、第54号土坑：N-50°-W。

形状・規模 第24号土坑が不整楕円形、第54号土坑が残存部分で不整楕円形を呈し、規模は第24号土坑が長径35cm、短径31cm、深さ20cmを測る。第54号土坑が長径不明、短径64cm、深さ19cmを測る。底面は第24号土坑が丸底、第54号土坑が平坦で、壁は2基とも急傾斜で立ち

上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

出土遺物 第24号土坑から土器9点が出土した。そのうち、第64図に土器1点(第64図59)を呈示した。

第25号土坑(第57図)

位置 調査区北西側0-6グリッドに位置し、平面プランはⅡ層下位で確認した。P10と重複している。新旧関係は本遺構→P10(古→新)である。

周辺には南東側にP9が位置している。

長軸方位 未完掘のため不明。

形状・規模 調査区外へ延長しているため形状は不明だが、規模は検出した範囲で長径56cm、短径32cm、深さ26cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第26号土坑(第57図)

位置 調査区北西側P-8グリッドに位置し、平面プランはⅡ層下位で確認した。周辺には東側に第21号土坑、南側にP13が位置している。

長軸方位 N-10°-E。

形状・規模 不整円形を呈し、径53cm、深さ17cmを測る。底面は平底で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第27号土坑(第57図)

位置 調査区北側Q-9グリッドに位置し、平面プランはⅡ層上位で確認した。周辺には東側にP19、南側にP18が位置している。

長軸方位 N-2°-W。

形状・規模 不整楕円形を呈し、長径92cm、短径77cm、深さ29cmを測る。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器4点が出土した。

第28号土坑(第57図)

位置 調査区南東側P-2グリッドに位置し、平面プランはⅡ層下位で確認した。周辺には北西側にP61が位置している。

長軸方位 N-72°-E。

形状・規模 不整楕円形を呈し、長径100cm、短径84cm、深さ45cmを測る。底面は丸底で、東側が25cm深く掘り込まれている。壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 4層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

第2層 暗褐色土 ローム土を少量含む。

第3層 暗褐色土 ローム粒及び炭化粒を微量含む。

第4層 褐色土 ローム土を少量含む。

出土遺物 土器15点が出土した。そのうち、第64図に土器2点(第64図60・61)を呈示した。

第29号土坑(第57図)

位置 調査区南西側P・Q-1グリッドに位置し、II層下位で確認した。P25と重複している。新旧関係は本遺構→P25(古→新)である。周辺には北西側に第28号土坑、南側にP26が位置している。

長軸方位 N-2°-E。

形状・規模 形状は残存部分で不整楕円形を呈し、規模は長径83cm、短径62cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。(坂口由加里)

第31号土坑(第57図)

位置 調査区南側S-2グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には土坑・ピットが散在し北側に第33号土坑、P22、東側に第36号土坑、南東側にP27・28・35・36が位置する。

長軸方位 N-48°-E。

形状・規模 開口部で径98×87cmの不整楕円形、坑底部で径75×69cmの不整円形を呈し、確認面から深さ25cmを測る。坑底面は平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器2点が出土した。

第32号土坑(第57図、写真図版16)

位置 調査区南側Q-25グリッドに位置し、II層上位で確認した。第24号住居跡の跡跡と重複する。新旧関係は本遺構→第24号住居跡(古→新)である。

長軸方位 N-33°-W。

形状・規模 開口部で径119×112cmの不整円形、坑底部で径77×72cmの不整円形を呈し、確認面から深さ81cmを測る。坑底面は平坦で、小穴5基が穿たれている。壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び炭化粒を少量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第3層 明褐色土 ローム粒・塊を多量含む。

出土遺物 土器39点が出土した。

備考 本遺構は形態的特徴から陥し穴と思われる。

第33号土坑（第57図）

位置 調査区南側S-2グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には土坑・ピットが散在し北東側に第37号土坑、南側に第31・36号土坑、P27・28・35・36、西側にP22が位置する。

長軸方位 N-5°-W。

形状・規模 開口部で径74×60cmの不整楕円形、坑底部で径56×39cmの不整楕円形を呈し、確認面から深さ25cmを測る。坑底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器2点が出土した。

第35・41・66号土坑（第57図）

位置 調査区南西側P-2・3グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。新旧関係は不明である。周辺には土坑・ピットが集中し、すぐ北側に第39・40号土坑、P40・41、南側に第28号土坑、P61が位置する。

長軸方位 第35号土坑：N-46°-W、第41号土坑：N-72°-W、第66号土坑：N-16°-E。

形状・規模 第35号土坑が径85×74cmの不整円形で、深さ26cm、第41号土坑が径66×55cmの楕円形で、深さ19cm、第66号土坑が径60×42cmの不整楕円形で、深さ26cmを測る。3基とも坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 第41・66号土坑は記録不備により詳細は不明であるが、第35号土坑は2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒・塊を多量含む。

出土遺物 第35号土坑から土器14点、第41号土坑から土器4点が出土した。そのうち、第64図に第35号土坑から出土した土器3点（第64図62～64）を呈示した。

第36号土坑（第57図）

位置 調査区南側T-2グリッドに位置し、Ⅲ層上位で確認した。周辺には土坑・ピットが散在し北側に第33号土坑、南側にP27・28・35・36、西側に第31号土坑が位置する。

長軸方位 N-7°-E。

形状・規模 開口部で径62×61cmの不整円形、坑底部で径42×38cmの不整円形を呈し、確認面から深さ25cmを測る。坑底面西側に深さ25cm程のピットが1基検出された。壁は緩やか

に立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第37号土坑 (第57図)

位置 調査区中央やや南側 T-3 グリッドに位置し、II 層下位で確認した。周辺には3.5 m北側に第67号土坑、3 m南西側に第33号土坑が位置する。

長軸方位 N-53°-W。

形状・規模 開口部で径62×57cmの不整形、坑底部で径43×32cmの楕円形を呈し、確認面から深さ27cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第38号土坑 (第58図・写真図版13)

位置 調査区東側 W-4・5 グリッドに位置し、III 層上位で確認した。周辺には4.5 m北側に第51号土坑、西側にはピット・土坑が集中している。

長軸方位 N-82°-W。

形状・規模 開口部で径170×147cmの不整形楕円形、坑底部で径142×117cmの不整形楕円形を呈し、確認面から深さ26cmを測る。坑底面中央に深さ7cm程の掘り込みがあり、その北側はマウンド状に若干高くなっている。坑底面南側壁下に半円状の窪みがある。壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器394点、礫58点が出土した。そのうち、第65図に土器14点(第65図65～78)を呈示した。

第39号土坑 (第57図)

位置 調査区南西側 P-3 グリッドに位置し、II 層上位で確認した。周辺には土坑・ピットが集中し、北側に P20・42、南側に P40、南西側に第35・40・41・66号土坑、P41が位置する。

長軸方位 N-40°-W。

形状・規模 開口部で径76×70cmの不整形円形、坑底部で径約53cmの円形を呈し、確認面から深さ23cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器6点が出土した。

第40号土坑 (第58図)

位置 調査区南西側 P-3 グリッドに位置し、II 層上位で確認した。北側に P41と重複するが新旧関係は不明である。周辺には土坑・ピットが集中し、東側に第39号土坑・P40、南

側に第35・41・66号土坑が位置する。

長軸方位 N-42°-W。

形状・規模 開口部で径67×60cmの不整楕円形、坑底部で径54×41cmの楕円形を呈し、確認面から深さ28cmを測る。坑底面北側に深さ10cm程の掘り込みがある。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器8点が出土した。

第42号土坑（第58図）

位置 調査区西側0・P-4グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には北側に第44号土坑、南東側に第8号土坑、南側にP43、南西側に第43号土坑、西側にP39、北西側にP57が位置する。

長軸方位 N-88°-W。

形状・規模 開口部で径112×109cmの不整円形、坑底部で径65×58cmの不整円形を呈し、確認面から深さ36cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 出土しなかった。

第43号土坑（第58図）

位置 調査区西側0-3・4グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には北側にP39、北東側に第42号土坑、東側に第8号土坑、P43、南側にP23、南西側に第11号住居跡が位置する。

長軸方位 N-88°-W。

形状・規模 開口部で径86×80cmの不整円形、坑底部で径65×60cmの不整円形を呈し、確認面から深さ38cmを測る。坑底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器7点が出土した。

第44号土坑（第58図）

位置 調査区西側P-5グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には北側に第12号住居跡、第71号土坑、南側に第42号土坑が位置する。

長軸方位 N-85°-W。

形状・規模 開口部で径84×75cmの不整円形、坑底部で54×47cmの不整円形を呈し、確認面から深さ23cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器3点、土製品1点が出土した。そのうち、第66図に土器1点（第66図79）、土製品1点（第66図80）を呈示した。

第45号土坑（第58図）

位置 調査区西端N-4グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には東側にP52、南側に第11号住居跡が位置する。

長軸方位 N-70°-W。

形状・規模 開口部で径59×55cmの不整楕円形、坑底部で径35×32cmの不整円形を呈し、確認面から深さ36cmを測る。坑底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第46・47号土坑（第58図、写真図版16）

位置 調査区中央やや西寄りP・Q-5・6グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。2基が重複し、新旧関係は第47号土坑→第46号土坑（古→新）である。周辺には東側に第10号住居跡、第22号土坑、西側には第12号住居跡、第70・71号土坑が位置する。

長軸方位 第46号土坑：N-40°-E、第47号土坑：N-37°-W。

形状・規模 第46号土坑が径218×165cmの不整楕円形、第47号土坑が径129×99cmの楕円形（推定）を呈する。深さは第46号土坑が約45cm、第47号土坑が約33cmを測る。坑底部には両遺構ともピットを有し、第46号土坑が底面中央付近に径40×36cm、深さ22cm、南側に径33cm、深さ38cm、第47号土坑が底面南側に32×28cm、深さ20cm程のピットが検出された。

覆土 第46号土坑が4層（第1～4層）、第47号土坑が2層（第5・6層）に分けられる。

第1層 暗黒褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第3層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第4層 明褐色土 ローム主体。

第5層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

第6層 黄褐色土 ローム土を多量含む。

出土遺物 第46号土坑から土器184点、第47号土坑から土器1点が出土した。そのうち、第66図に第46号土坑から出土した土器6点（第66図81～86）を呈示した。

第48・50号土坑（第58図、写真図版14）

位置 調査区北側U-8グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。遺構間にP67が重複する。新旧関係は第50号土坑→第48号土坑→P67（古→新）である。周辺には北側に第7号住居跡、北西側に第9・14・18号土坑、P66が位置する。

長軸方位 第48号土坑：N-38°-E、第50号土坑：N-10°-W。

形状・規模 第48号土坑が径約80cmの不整円形、深さ28cm。第50号土坑が径約140cmの不整円形、深さ38cm。両遺構とも坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 第48号土坑が2層（第1・2層）、第50号土坑が3層（第3～5層）に分けられる。

第1層 褐色土 ローム粒を少量含む。

第2層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

第3層 褐色土 ローム粒を少量含む。

第4層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

第5層 黄褐色土 ローム粒・塊を多量含む。

出土遺物 第48号土坑から土器4点、第50号土坑から土器5点、石器1点が出土した。

第49号土坑 (第59図)

位置 調査区中央S・T-5・6グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。周辺には南にP56、西にP62が位置する。

長軸方位 N-50°-E。

形状・規模 開口部で径122×120cmの不整形円形、坑底部で径68×56cmの不整形円形を呈し、確認面から深さ40cmを測る。坑底面は若干中央部が窪む。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。

覆土 3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 土器15点が出土した。

第51号土坑 (第59図、写真図版16)

位置 調査区東端W-6グリッドに位置し、Ⅲ層下位で確認した。周辺には約7m北に第56号土坑、6m南に第38号土坑が位置する。

長軸方位 N-64°-W。

形状・規模 開口部で径約134cmの円形、坑底部で径約107cmの円形を呈し、確認面から深さ29cmを測る。坑底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を多量、炭化粒を微量含む。

第2層 褐色土 ローム粒を多量含む。

出土遺物 土器22点が出土した。そのうち、第66図に土器3点(第66図87~89)を呈示した。

第52号土坑 (第59図、写真図版17)

位置 調査区東側V-5グリッドに位置し、Ⅲ層上位で確認した。周辺には土坑・ピットが集中し、東側にP21、南東側に第53号土坑、南西側にP54、北西側に第15・24・54号土坑、P11・53・55・64が位置する。

長軸方位 N-35°-E。

形状・規模 開口部で径93×92cmの不整形円形、坑底部で径68×60cmの不整形円形を呈し、確認面から深さ36cmを測る。坑底面は平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第53号土坑（第59図、写真図版17）

位置 調査区東側V-4・5グリッドに位置し、Ⅱ層下位～Ⅲ層上位で確認した。周辺には北側にP21、東側に第38号土坑、西側にP54、北西側に第52号土坑が位置する。

長軸方位 N-80°-W。

形状・規模 開口部で径118×115cmの不整形円形、坑底部で径83×60cmの楕円形を呈し、確認面から深さ44cmを測る。坑底面は平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 土器45点が出土した。そのうち、第66図に土器4点（第66図90～93）を呈示した。

第55号土坑（第59図）

位置 調査区中央T-5グリッドに位置し、Ⅱ層下位で確認した。周辺には南西側に第13号土坑、P2、西側に第10号土坑、P5、北西側に第49号土坑、P56が位置する。

長軸方位 N-85°-E。

形状・規模 開口部で径143×80cmの楕円形、坑底部で径65×38cmの楕円形を呈し、確認面から深さ31cmを測る。坑底面は平坦で、壁はやや急な傾斜で立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第2層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 土器7点が出土した。そのうち、第66図に土器2点（第66図94・95）を呈示した。

第56号土坑（第59図、写真図版16）

位置 調査区北東端X-8グリッドに位置し、Ⅲ層上位で確認した。周辺には6.5m南側に第51号土坑、8m北西側に第7号住居跡が位置する。

長軸方位 N-90°-W（真西）。

形状・規模 開口部で径114×110cmの不整形円形、坑底部で径55×46cmの不整形楕円形を呈し、確認面から深さ37cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 褐色土 ローム粒・塊を少量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第65号土坑（第59図）

位置 調査区北端T-10グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。第9号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。周辺には北東側にP58、南東側に第7号住居跡、第68号土坑、北西側に第1号土坑が位置する。

長軸方位 N-30°-W。

形状・規模 開口部で径120×114cmの不整形円形、坑底部で径62×59cmの略円形を呈し、確認面から深さ32cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 4層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 褐色土 ローム粒を多量含む。

第4層 黄褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第67号土坑 (第59図)

位置 調査区中央やや南よりT-4グリッドに位置し、II層下位で確認した。周辺には南側に第37号土坑、北西側に第13号土坑が位置する。

長軸方位 N-28°-E。

形状・規模 開口部で径88×74cmの不整形楕円形、坑底部で径56×43cmの楕円形を呈し、確認面から深さ20cmを測る。坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第2層 明褐色土 ローム土と褐色土の混土。

出土遺物 土器1点が出土し、第66図(第66図96)に呈示した。

第68号土坑 (第59図)

位置 調査区北端U-10グリッドに位置し、II層上位で確認した。周辺には南東側に第7号住居跡、北西側に第9号住居跡、第65号土坑、P58が位置する。

長軸方位 N-29°-W。

形状・規模 開口部で径133×118cmの楕円形、坑底部で径72×55cmの楕円形を呈し、確認面から深さ27cmを測る。坑底面は西側が若干低く、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ローム塊を少量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒・塊を含む。

第3層 黄褐色土 ローム主体。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第69号土坑 (第59図、写真図版14・15)

位置 調査区北側S・T-9グリッドに位置し、II層上位で確認した。半分ほどが攪乱によって壊されている。周辺には土坑・ピットが集中し、南側に第5号土坑、南西側に第2・4号土坑、P1、北西側に第3号土坑、P65が位置する。

形状・規模 平面形、規模とも不明である。検出できた範囲では、深さ約30cmを測り、坑底面は平坦で、壁は西側が急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第70号土坑 (第59図)

位置 調査区西側P-5・6グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。第12号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。周辺には東側に第46・47号土坑、南西側に第71号土坑が位置する。

長軸方位 N-89°-E。

形状・規模 開口部で径84×76cmの不整楕円形、坑底部で径66×51cmの不整楕円形を呈し、確認面から深さ45cmを測る。坑底面中央に径30×25cm、深さ約15cmのビットがある。壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第71号土坑 (第59図)

位置 調査区西側P-5グリッドに位置し、Ⅱ層上位で確認した。第12号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。周辺には北東側に第70号土坑、東側に第46・47号土坑、南西側に第44号土坑が位置する。

長軸方位 N-32°-E。

形状・規模 開口部で径101×75cmの楕円形を呈し、確認面から深さ23cmを測る。坑底面は平坦で、坑底部東側に径38cm、深さ31cmのビットがある。壁はやや急傾斜で立ち上がる。

覆土 記録不備のため不明。

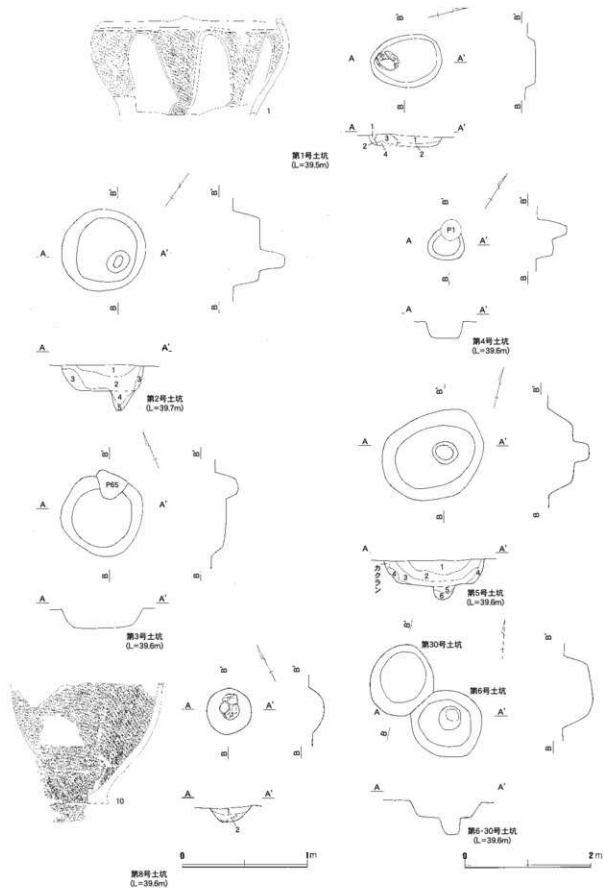
出土遺物 遺物は出土しなかった。

(古川菜穂)

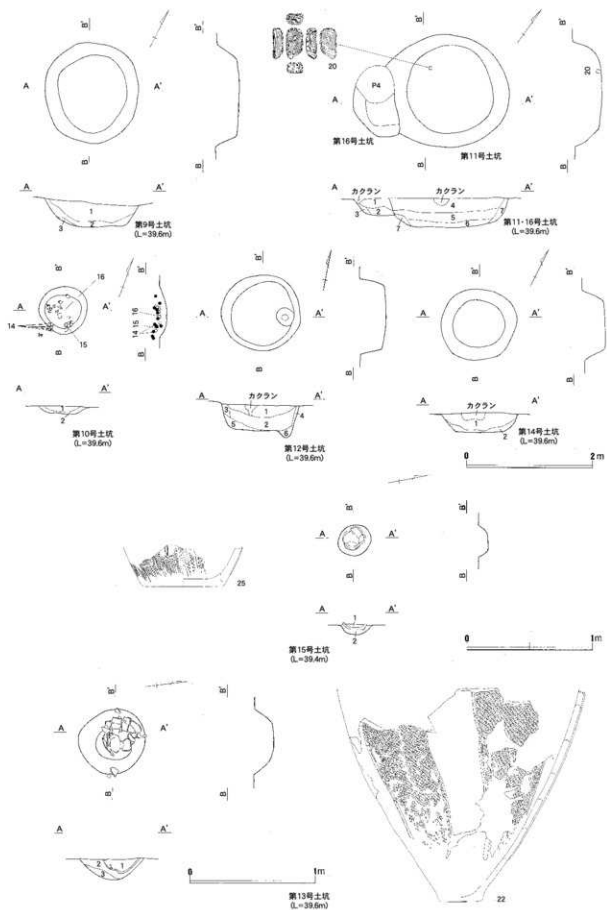
ビット (第12・60・61図、第5表)

総数49基検出された。確認面はいずれもⅡ層中位からⅢ層上位である。調査区内での位置関係は東半より西半に多く分布する傾向が見られた。特に規則的な配置はみられないが、埋設土器を伴う第8・13号土坑は包含層(基本層序第Ⅱ層)の削平・流出を考慮すると住居施設の可能性があり、その周囲に分布するビットは柱穴の可能性もある。各ビットの平面形は円形が多数を占め、楕円形を成すものが僅かにみられる(第5表)。覆土は基本層序第Ⅱ層(縄文時代の遺物包含層)に準ずる暗褐色土が基調を成し自然堆積の様相を呈する。平均規模は径43cm、深さ32cmである。ビットの構築時期については遺物を伴うものが少なく所産時期を特定できないが、検出状況が他の縄文時代の遺構と同様であること、また周辺に分布する遺構の時期等から判断して大半が集落の形成される縄文時代中期後半の所産と思われる。遺物の検出があったビットは14基で、そのうち3基(P37・P43・P59)から出土した土器5点を第67図に呈示した。

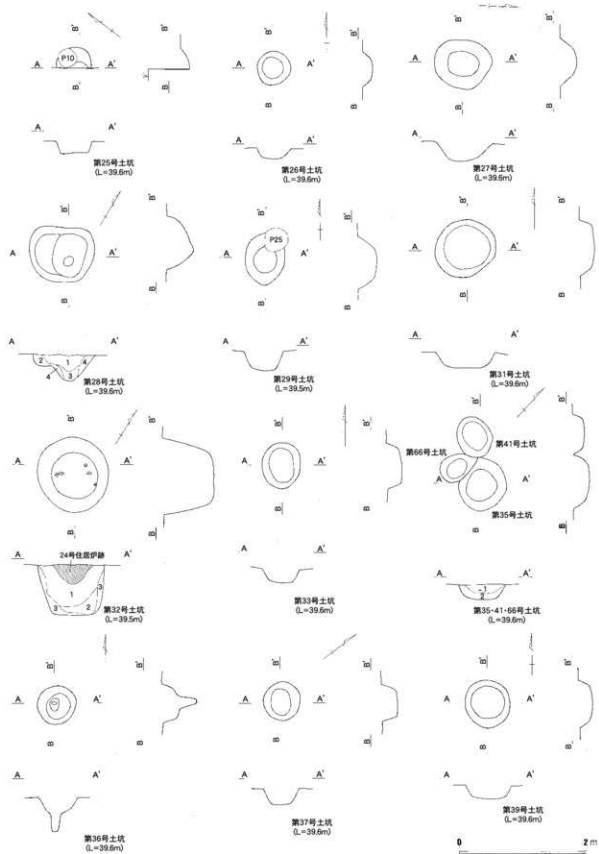
(古川菜穂・前田秀則)



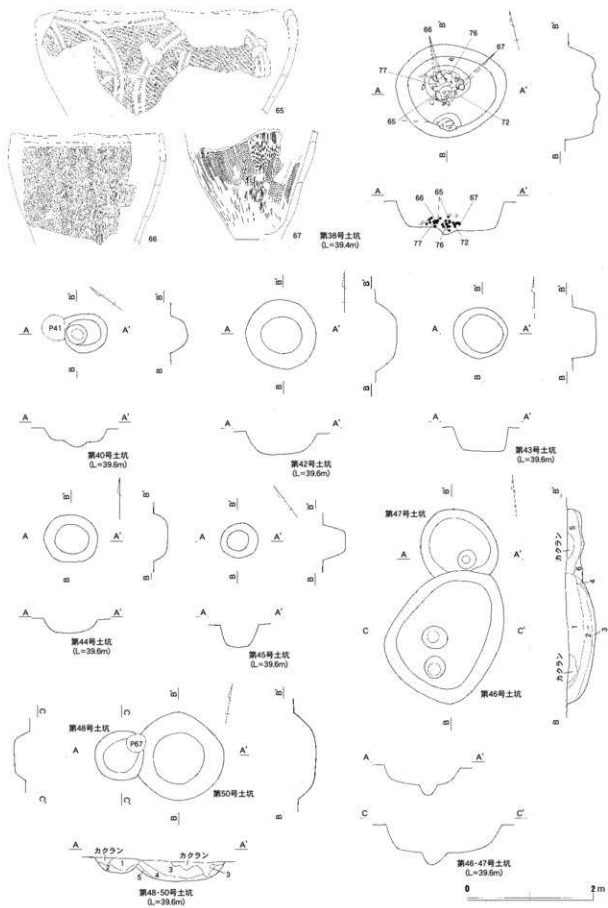
第54图 土坑平·断面图(1)



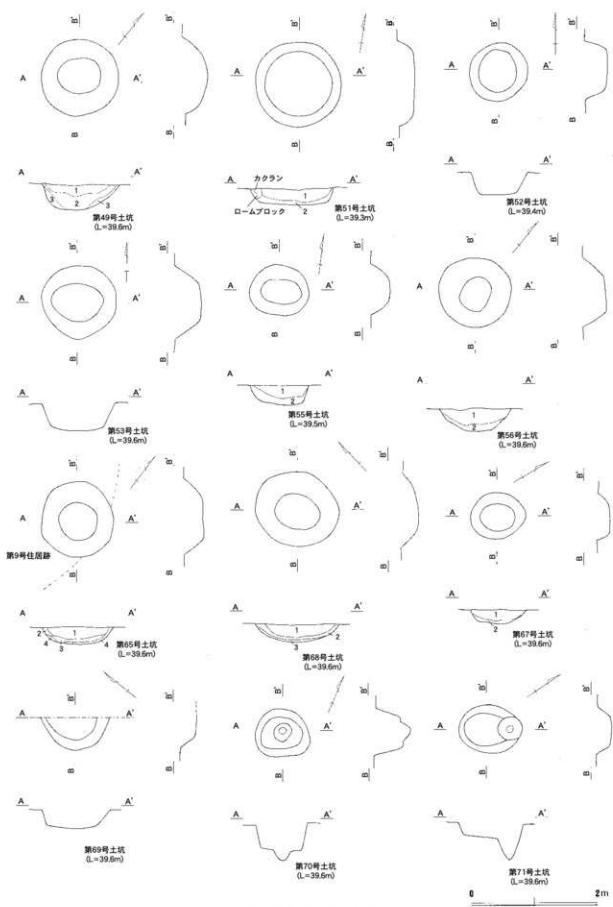
第55図 土坑平・断面図(2)



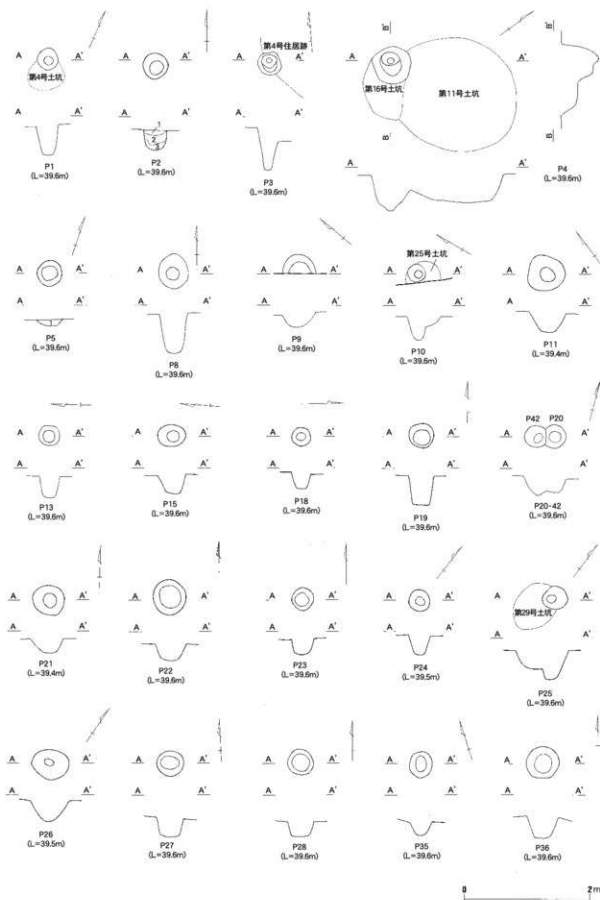
第57图 土坑平·断面图(4)



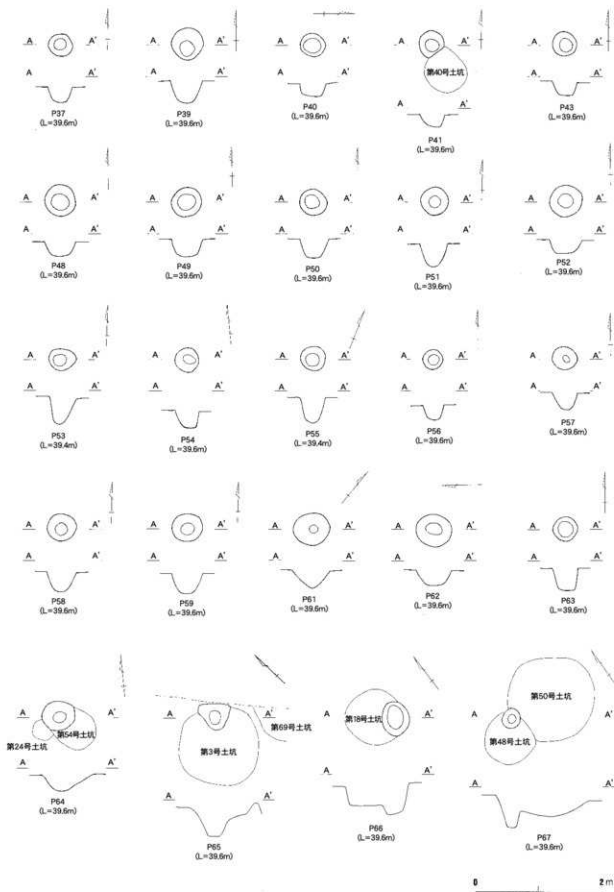
第58図 土坑平・断面図 (5)



第59図 土坑平・断面図(6)



第60図 ビット平・断面図 (1)



第61図 ビット平・断面図 (2)

第4表 土坑観察表(1)

()は推定

遺構名	位置	形状	長軸方位	開口部 (cm)		坑底部 (cm)		深さ (cm)	出土遺物/備考
				長径	短径	長径	短径		
1	T-10	楕円形	N-11°-E	114	84	100	67	20	土器21 縄1 9号住居跡と重複
2	S-8・9	円形	N-30°-W	134	130	102	94	45	土器19
3	S-9	隅丸方形	N-60°-E	128	126	97	94	33	土器13 P65と重複
4	S-9	不整形円形	N-26°-E	58	54	44	37	29	土器6 P1と重複
5	S・T-8・9	不整形円形	N-47°-E	166	136	132	94	44	土器20
6	S-8	不整形円形	N-76°-W	114	104	83	74	30	土器1 30号土坑と重複
8	P-4	不整形円形	N-28°-E	36	35	15	14	12	土器1
9	T-8・9	不整形円形	N-32°-W	160	149	125	109	48	土器14
10	S-5	不整形円形	N-18°-W	76	75	57	52	13	土器27 石器1 縄8
11	R-7	楕円形	N-55°-E	207	179	142	134	50	土器21 ヒスイ大珠 16号土坑・P4と重複
12	O・P-6	円形	N-13°-E	126	120	115	98	44	土器5
13	T-4	不整形円形	N-38°-W	53	48	(29)	(24)	16	土器1
14	T・U-9	不整形円形	N-19°-E	120	112	83	75	37	土器25 石器1
15	U-5	不整形円形	N-22°-W	28	24	14	13	7	土器3
16	R-7	-	-	-	-	-	-	27	遺物なし 11号土坑・P4と重複
17	R-10	-	-	(100)	(50)	-	-	22	土器5 縄1
18	T・U-8・9	円形	N-52°-W	95	95	-	58	34	土器14 P66と重複
19	Q・R-9	不整形円形	N-80°-E	144	125	115	89	35	土器6
20	Q-7	不整形円形	N-72°-W	177	164	131	104	41	土器11 石器1
21	P・Q-8	楕円形	N-56°-E	154	133	90	73	56	土器1
22	Q-5・6	不整形円形	N-40°-W	167	140	130	110	56	土器43 10号住居跡と重複
23	Q・R-7・8	不整形円形	N-18°-E	225	130	191	77	56	土器63 2・8号住居跡・34号土坑と重複
24	U-5	不整形円形	N-45°-W	35	31	15	15	20	土器9 54号土坑・P64と重複
25	O-6	-	-	(56)	(32)	-	-	26	遺物なし P10と重複
26	P-8	不整形円形	N-10°-E	53	53	35	33	17	遺物なし
27	Q-9	不整形円形	N-2°-W	92	77	50	40	29	土器4
28	P-2	不整形円形	N-72°-E	100	84	17	15	45	土器15
29	P・Q-1	不整形円形	N-2°-E	83	62	44	37	30	遺物なし P25と重複
30	S-8	不整形円形	N-11°-E	115	102	84	72	47	土器4 6号土坑と重複
31	S-2	不整形円形	N-48°-E	98	87	75	69	25	土器2
32	Q-25	不整形円形	N-33°-W	119	112	77	72	81	土器39 24号住居跡と重複
33	S-2	不整形円形	N-5°-W	74	60	56	39	25	土器2
34	Q・R-7・8	不整形円形	N-88°-E	212	153	191	121	26	土器4 2・8号住居跡・23号土坑と重複
35	P-2・3	不整形円形	N-46°-W	85	74	50	46	26	土器14 41・66号土坑と重複
36	T-2	不整形円形	N-7°-E	62	61	42	38	25	遺物なし
37	T-3	不整形円形	N-53°-W	62	57	43	32	27	遺物なし
38	W-4・5	不整形円形	N-82°-W	170	147	142	117	26	土器394 縄58
39	P-3	不整形円形	N-40°-W	76	70	53	53	23	土器6
40	P-3	不整形円形	N-42°-W	67	60	54	41	28	土器8 P41と重複
41	P-2・3	楕円形	N-72°-W	66	55	48	36	19	土器4 35・66号土坑と重複

第4表 土坑観察表(2)

()は推定

遺構名	位置	形状	長軸方位	開口部 (cm)		坑底部 (cm)		深さ (cm)	出土遺物/備考
				長径	短径	長径	短径		
42	O・P-4	不整形円形	N-88° -W	112	109	65	58	36	遺物なし
43	O-3・4	不整形円形	N-88° -W	86	80	65	60	38	土器7
44	P-5	不整形円形	N-85° -W	84	75	54	47	23	土器3、土製品1
45	N-4	不整形楕円形	N-70° -W	59	55	35	32	36	遺物なし
46	P・Q-5・6	不整形楕円形	N-40° -E	218	165	178	124	45	土器184 47号土坑と重複
47	Q-6	(楕円形)	N-37° -W	129	99	98	86	33	土器1 46号土坑と重複
48	U-8	(不整形円形)	N-38° -E	(80)	(80)	-	49	28	土器4 50号土坑・P67と重複
49	S・T-5・6	不整形円形	N-50° -E	122	120	68	56	40	土器15
50	U-8	(不整形円形)	N-10° -W	(140)	(140)	82	80	38	土器5 石器1 48号土坑・P67と重複
51	W-6	円形	N-64° -W	134	134	107	107	29	土器22
52	V-5	不整形円形	N-35° -E	93	92	68	60	36	遺物なし
53	V-4・5	不整形円形	N-80° -W	118	115	83	60	44	土器45
54	U・V-5	(不整形楕円形)	N-50° -W	-	64	32	27	19	遺物なし 24号土坑・P64と重複
55	T-5	楕円形	N-85° -E	143	80	65	38	31	土器7
56	X-8	不整形円形	N-90° -W	114	110	55	46	37	遺物なし
65	T-10	不整形円形	N-30° -W	120	114	62	59	32	遺物なし 9号住居跡と重複
66	P-2・3	不整形楕円形	N-16° -E	60	42	36	27	26	遺物なし 35・41号土坑と重複
67	T-4	不整形楕円形	N-28° -E	88	74	56	43	20	土器1
68	U-10	楕円形	N-29° -W	133	118	72	55	27	遺物なし
69	S・T-9	-	-	-	-	-	-	30	遺物なし
70	P-5・6	不整形楕円形	N-89° -E	84	76	66	51	45	遺物なし 12号住居跡と重複
71	P-5	楕円形	N-32° -E	101	75	-	51	23	遺物なし 12号住居跡と重複

第5表 ビット観察表(1)

遺構名	位置	形状	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物 / 備考
1	S-9	略円形	34	34	51	遺物なし 4号土坑と重複
2	S-5	略円形	41	40	33	土器5
3	R-9	略円形	35	35	68	遺物なし 4号住居跡と重複
4	R-7	略円形	62	60	58	遺物なし 11・16号土坑と重複
5	S-5	不整形円形	41	39	14	遺物なし
8	O-6・7	略円形	56	46	65	土器4
9	O-6	-	-	-	25	遺物なし
10	O-6	略円形	30	28	38	遺物なし 25号土坑と重複
11	U-5	不整形円形	60	56	34	遺物なし
13	P-7	円形	33	32	36	遺物なし
15	P-7	楕円形	45	35	31	遺物なし
18	Q-8	円形	30	29	26	遺物なし
19	Q-9	略円形	40	38	48	遺物なし
20	P・Q-3	(円形)	38	35	22	遺物なし P42と重複

第5表 ビット観察表(2)

()は推定

遺構名	位置	形状	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物 / 備考
21	V-5	不整形円形	51	47	24	遺物なし
22	S-2	略円形	69	64	28	遺物なし
23	O-3	略円形	36	36	26	土器1
24	P-1	円形	33	33	32	土器2
25	Q-1・2	略円形	40	35	47	遺物なし 29号土坑と重複
26	P-1	楕円形	60	48	33	遺物なし
27	S-1	略円形	43	40	31	遺物なし
28	T-1	略円形	43	41	24	土器1
35	T-1	楕円形	43	36	23	遺物なし
36	T-1	略円形	52	49	36	土器2
37	Q-3	円形	38	35	25	土器5
39	O-4	略円形	51	51	38	遺物なし
40	P-3	略円形	40	37	19	遺物なし
41	P-3	略円形	43	39	20	土器1 40号土坑と重複
42	P-3	略円形	34	31	32	土器1 P20と重複
43	P-3	円形	38	37	23	土器4 覆1
48	Q-3	円形	50	48	24	土器1 覆3
49	Q-3・4	円形	48	46	28	土器2 覆2
50	Q-4	円形	43	42	31	土器3 覆7
51	Q-3	円形	44	43	38	遺物なし
52	N-4	円形	53	50	23	遺物なし
53	V-5	不整形円形	45	34	44	遺物なし
54	U-4・5	略円形	38	38	28	遺物なし
55	U-5	略円形	40	39	42	遺物なし
56	S・T-5	円形	32	32	24	遺物なし
57	O-4	略円形	40	36	27	遺物なし
58	T・U-10	円形	46	43	33	遺物なし
59	U-10	円形	48	44	32	土器3
61	P-2	略円形	58	52	29	遺物なし
62	S-5	円形	56	52	25	遺物なし
63	R-4	円形	40	40	36	遺物なし
64	U-5	略円形	53	46	26	遺物なし 24・54号土坑と重複
65	S-9	不整形円形	42	39	18	遺物なし 3号土坑と重複
66	T・U-8	楕円形	56	43	15	遺物なし 18号土坑と重複
67	U-8	略円形	32	29	26	遺物なし 48・50号土坑と重複

土坑・ピット出土遺物

以下には、土坑・ピット出土遺物について説明を加える。なお、土器の胎土・色調等の詳細については観察表（第6・7表）を提示しているので、併せて参照されたい。

第1号土坑

出土遺物（第62図1、写真図版27）

1は口径28.5cm、現高15.7cm。埋設土器である。胴部中位に括れをもつキャリバー形の深鉢で、胴部下半を輪積より欠損する。口縁部は3単位の小波状を呈し、幅狭の口縁下に単沈線が1条めぐり、胴部は括れ部を境に文様帯を上下に二分する対向「U」字状文を交互させ、区画内に単節LR縄文を充填している。

第2号土坑

出土遺物（第62図2～4、写真図版27）

2は刻み加えた低平な降帯を弧状に施し、内部に沈線による楕円状のモチーフと横位沈線が施文される。

3は口縁に沿って沈線を伴う刺突文が1条めぐり、以下地文に条線文が斜位波状に施文される。

4は胴部破片で、地文に条線文が施文される。

第3号土坑

出土遺物（第62図5・6、写真図版27）

5は早期前半の撚糸文系土器である。夏島式に比定されるもので、条間の狭い原体1の撚糸文が縦位に施文される。6は胴部上半に2本沈線が逆「U」字状文に施文されるものと思われる。地文は単節RL縄文が横位羽状に施文される。

第5号土坑

出土遺物（第62図7～9、写真図版27）

7は縄文部と磨消し部が並びそれを懸垂沈線文で区画している。

8・9は条線地文で、8は口縁下に1条緩い沈線がめぐり、

第8号土坑

出土遺物（第62図10、写真図版28）

10は底径6.6cm、現高19.3cm。埋設土器である。胴部中位以上を欠損する深鉢で、器面全体に複節LRL縄文が施文される。

第9号土坑

出土遺物（第62図11～13、写真図版28）

11は早期前半の撚糸文系土器である。井草Ⅱ式に比定されるもので、外反する肥厚口唇部に原体LRの単節縄文が施文される。口唇部下の無文部分には一部指頭圧痕が認められる。

12は平行して垂下する2本沈線と、それと交差する曲線状のモチーフが同様の施文具で描出される。

13は条線地文で、口縁下に太く浅い沈線が1条めぐり、

第10号土坑

出土遺物 (第62図14~16、写真図版28)

14は波状口縁を呈し、波頂部を繋ぐように幅広の無文帯文様を描き、頂部下に微隆起帯2本1組を逆「U」字状に施文し、区画内に単節 RL 縄文を充填している。

15は地文に集合条線を縦位に施し、口縁下に指頭と思われる太く浅い沈線が1条めぐる。

16は打製石斧である。「撥形」を呈し、表裏面に素材剥片の礫面を多く残している。石質は砂岩で、長さ7.98cm、幅7.59cm、厚さ2.26cm、重量148.2gを量る。

第11号土坑

出土遺物 (第63図17~20、写真図版28)

17は連弧文系で、口縁部に沿って下位に沈線を伴う刺突文が2列めぐる。

18は縄文部と磨消し部が並びそれを懸垂沈線文で区画している。

19は条線地文の胴部破片である。

20は大珠である。長さ4.9cm、幅2.58cm、厚さ1.59cm、重さ44.12gを量る。石質はヒスイで、穿孔部は表面で6mm、裏面で4mmを測る。

第12号土坑

出土遺物 (第63図21、写真図版28)

21は縄文地文の胴部破片で、加曾利 E 式系の土器である。

第13号土坑

出土遺物 (第63図22、写真図版28)

22は底径7.2cm、現高34cm。埋設土器である。大形深鉢の胴部下半から底部で、断面三角微隆起帯により胴部が8単位に縦位区画され、区画内に微隆起帯上から単節 LR 縄文を充填している。

第14号土坑

出土遺物 (第63図23・24、写真図版28)

23・24は条線地文で、23は口縁部に沿って1条沈線がめぐる。

第15号土坑

出土遺物 (第63図25、写真図版29)

25は底径12.8cm、現高6.6cm。深鉢の胴下半から底部である。地文に条線を施し、2本1組の隆帯が垂下する。文様要素から曾利系土器と思われる。

第17号土坑

出土遺物 (第63図26、写真図版29)

26は条線地文で、口縁下に1条沈線がめぐる。

第18号土坑

出土遺物 (第63図27・28、写真図版29)

27・28は早期前半の燃糸文系土器である。稲荷台式に比定されるもので、27は条間のやや広い原体 R、28は原体 1 の燃糸文が縦位に施文され、27は一部燃糸文がナデ消されている。

第19号土坑

出土遺物 (第63図29、写真図版29)

29は縄文部と磨消し部が並びそれを懸垂沈線文で区画している。

第20号土坑

出土遺物 (第64図30、写真図版29)

30は、いわゆる「袂入磨石」である。表裏両面を磨面、左側縁を敲石として使用している。石質は花崗岩で、長さ12.2cm、幅7.7cm、厚さ3.15cm、重量447.1gを量る。

第22号土坑

出土遺物 (第64図31～41、写真図版29)

31～35は早期後半の条痕文系土器である。34を除きいずれも無文のもので、31は口縁部がやや外反する。34は表面に貝殻条痕文が縦位に施文されている。35は尖底の底部片である。

36～39は胴部破片である。36～38は沈線が垂下し、37は不明瞭だが36・38は区画内の縄文が磨消されている。39は文様モチーフが不明だが微隆起帯により文様が描出されるものと思われる。

40・41は条線地文で、ともに口縁下に1条沈線がめぐる。

第23号土坑

出土遺物 (第64図42～58、図版29)

42～58は早期前半の捻糸文系土器である。42・43は井草Ⅱ式に比定されるもので、42がいわゆる「J型」、43が「JY型」の土器で、42は原体LRの単節縄文が口唇部・胴部に斜位に施されている。43は口唇部に原体LRの単節縄文、胴部に原体Lの捻糸文が縦位に施されている。

44・48～51は夏島式に比定されるもので、44は口唇部直下から条間の狭い原体Lの捻糸文が縦位に施されている。48～51は胴部破片で、施文原体は48が捻糸文L、49～51が捻糸文Lである。

45～47・52～58は桶荷台式に比定されるもので、45は口唇部に横ナデ整形が施され、以下胴部に条間の広い原体Lの捻糸文が縦位に施されている。46・47は口縁部が外反し、46は口端部が先細りする。口縁部以下胴部に46は原体L、47は原体Lの捻糸文が斜方向に施され、ともに捻糸文が一部ナデ消されている。52～58は胴部破片で、施文原体は53が捻糸文L、ほかは捻糸文Lである。

第24号土坑

出土遺物 (第64図59、写真図版29)

59は推定口径22.5cm、現高10cm。膨らみをもつ無文の口縁部上端がやや内湾する深鉢で、頸部に断面蒲鉾状の隆帯が2条平行してめぐる。いわゆる下寺田タイプの深鉢（新藤1955）で、加曽利E1式併行と思われる。

第28号土坑

出土遺物 (第64図60・61、写真図版30)

60は口縁部付近の破片で、無文帯が強いナデ調整で作出されている。61は胴部破片で、地文にLの無節縄文が施文される。60は加曽利E3式、61は胎土から後期の土器と思われる。

第35号土坑

出土遺物 (第64図62~64、写真図版30)

62~64は胴部破片で、62は隆帯、63は帯状の無文帯、64は沈線が垂下する。

第38号土坑

出土遺物 (第65図65~78、写真図版30)

65は口径(39cm)、現高16.7cm。大形深鉢の口縁部破片で、2/3が遺存する。口縁部は5単位の小波状を呈し、口縁に沿って断面三角の微隆起帯が1条めぐり、胴部は同様の微隆起帯で渦状のモチーフが描出される。

66・67は、66が口径(23.4cm)、現高17.6cm、67が底径7.6cm、現高17.5cm。2点とも条線地文の土器で、66は口縁下に1条沈線がめぐり、67は胴部下半で、器形は深鉢と思われる。

68~78は拓影資料で、68・74・75は口縁部破片、他は胴部破片である。68は2本1対の隆帯で渦状のモチーフが施文される。

69~74は縄文地文で、69~71は沈線が垂下する。72・73は、72が単沈線による対向「U」字状文、73が逆「U」字状文が施文される。74は口縁部下に断面三角微隆起帯がめぐり、以下縄文が施文される。

75~77は条線地文の土器で、75は口縁下に幅広の深い沈線が1条めぐり、77は条線文が縦位波状に施される。

78は連弧文系で、胴部中に2条1組の交互刺突文を間に置く平行沈線を巡らせ、胴部上下半に3条1組の弧状文が横位施文される。

第44号土坑

出土遺物 (第66図79・80、写真図版31)

79は複節LRL縄文を地文とし、胴部に沈線が垂下する。

80は土器の胴部破片を転用した土製円盤である。略円形を呈し、長さ3.5cm、幅2.7cm、厚さ1.1cm、重量10.8gを量る。

第46号土坑

出土遺物 (第66図81~86、写真図版31)

81は口縁部文様が2本1対の隆帯で表出される。82~84は胴部破片で、82は蛇行隆帯、83・84は2本沈線が垂下し、83は沈線間が磨消されている。85は底部破片で、Lの無節縄文を地文とし棒状工具による沈線が垂下する。

86は浅鉢で、集合条線を地文とし、口縁下は横位にナデ調整される。

第51号土坑

出土遺物 (第66図87~89、図版31)

87は中峠式に比定される土器で、口縁部に眼鏡状把手が付され、把手上には竹管状工具による刻み・沈線文、半截竹管の腹による平行沈線、三角刺突文などが連続して施文される。地文はLの撚糸文である。

88は撚糸文、89は縄文を地文にもつ土器で、89は垂下する3本沈線間が磨消されている。88は胎土から加曽利E1式の最も古い段階に比定される資料と思われる。

第53号土坑

出土遺物 (第66図90～93、写真図版31)

90は波状口縁を呈し、波頂部を繋ぐように強いナデつけによる凹字状の無文帯文様が施される。91は内湾する口縁部で、口縁下に1条沈線がめぐる。92・93は条線地文の胴部破片である。

第55号土坑

出土遺物 (第66図94・95、写真図版31)

94は胴部破片で、単節 RL 縄文地に懸垂沈線文が垂下する。

95は無文の浅鉢である。底径 8 cm。

第67号土坑

出土遺物 (第66図96、写真図版31)

96は深鉢の口縁部破片である。口縁部は緩い波状を呈し、頂部間を繋ぐようにナデつけによる凹字状の無文帯文様が表出される。胴部以下は頂部下に単沈線を逆「U」字状に施文し、区画内に単節 LR 縄文を施文している。

P 37

出土遺物 (第67図1・2、写真図版31)

1は早期前半の撚糸文系土器である。無文の口縁が横ナデされ、以下条間のやや広い撚糸文が縦位に施文される。撚糸文の施文方法から稲荷台式に比定できると思われる。

2は加曾利 E 式系の胴部破片で、地文に R の撚糸文が縦位に施文される。

P 43

出土遺物 (第67図3・4、写真図版31)

3は胴部が断面三角微隆起帯により縦位区画され、区画内に単節 RL 縄文が充填施文される。

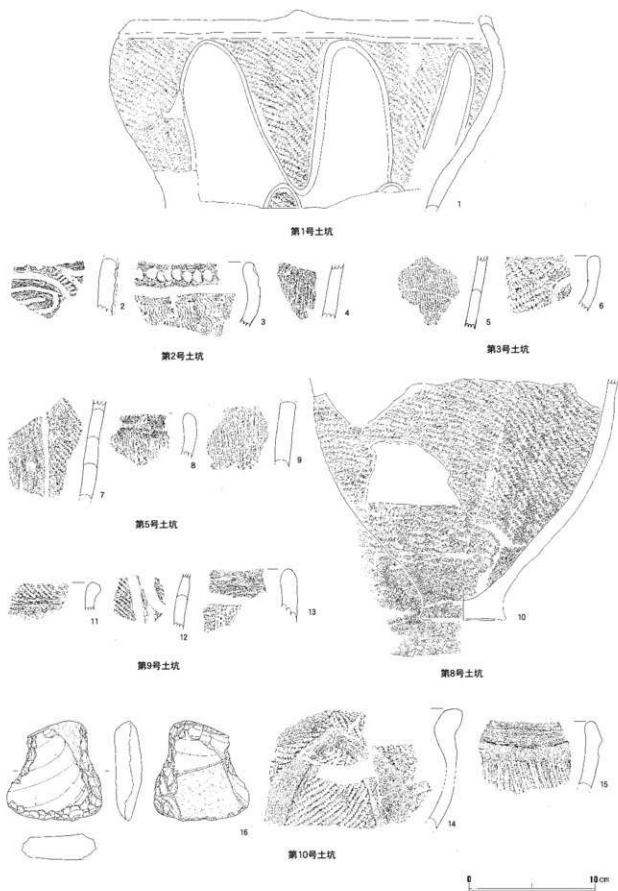
4は胴部破片で、地文に半截竹管による集合沈線が施される。

P 59

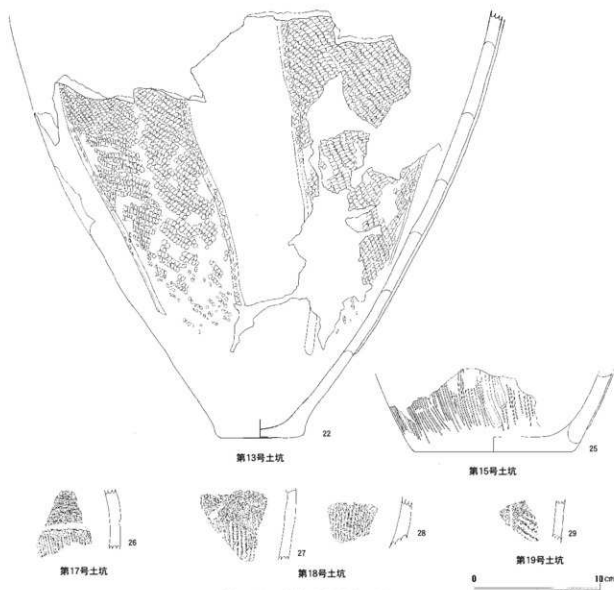
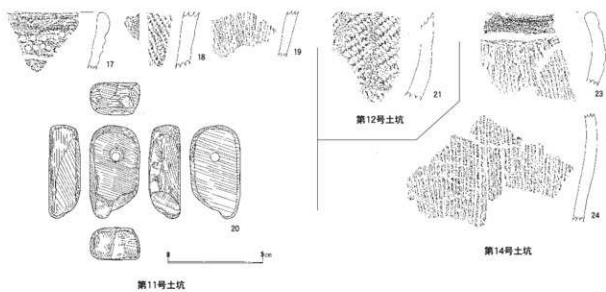
出土遺物 (第67図5、写真図版31)

5は深鉢の口縁部破片で、地文に単節 LR 縄文が横位羽状に施文される。

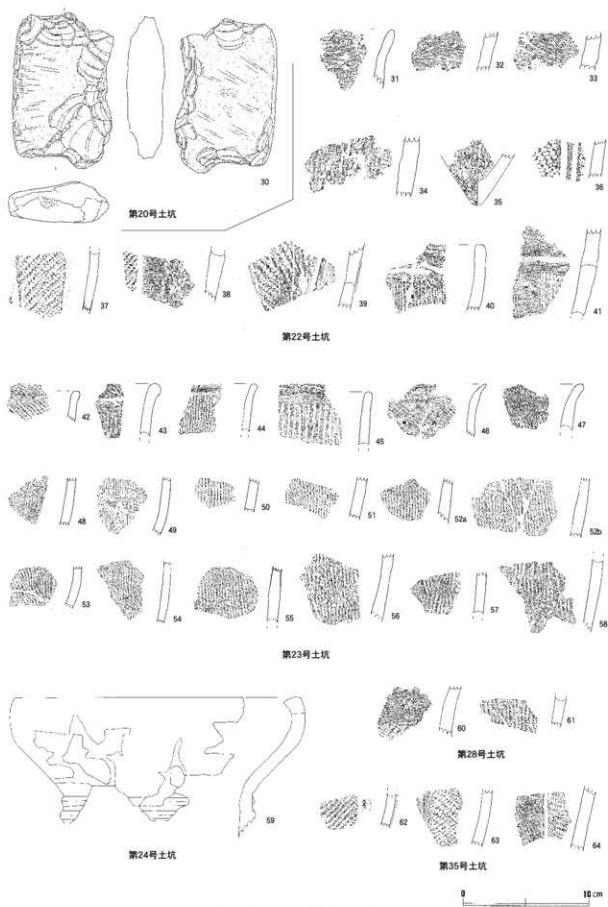
(前田秀則)



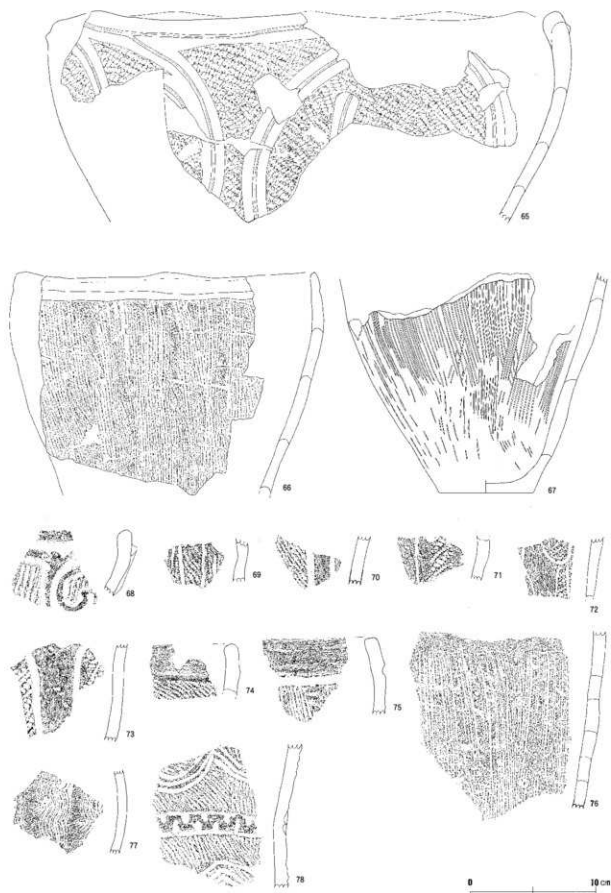
第62图 土坑出土遗物 (1)



第63图 土坑出土遗物 (2)

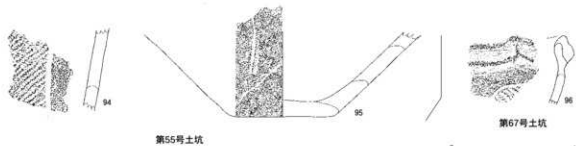
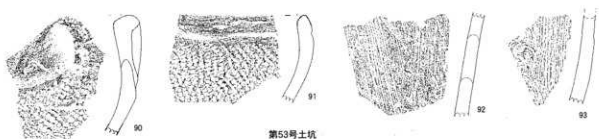
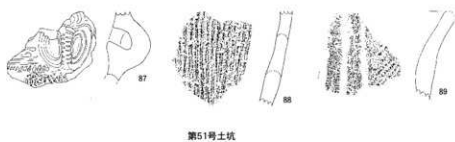


第64图 土坑出土遗物 (3)



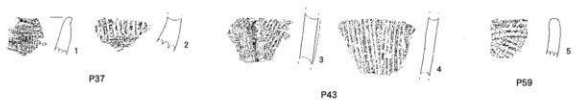
第38号土坑

第65图 土坑出土遗物(4)



第66図 土坑出土遺物 (5)

0 10 cm



第67図 ビット出土遺物

0 10 cm

第6表 土坑出土土器観察表(1)

番号	遺構名	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	第1号土坑	深鉢	口縁～胴	沈線、縄文LR(充填)、内面ナデ	A・B・G	良	橙色	加曾利E4
2	第2号土坑	深鉢	胴	隆帯、沈線、内面ナデ	A・G・H	良	明赤褐色	勝坂3
3		深鉢	口縁	集合条線、刺突文、沈線、内面ミガキ	B・H	良	赤褐色	加曾利E3
4		深鉢	胴	条線、内面ナデ	C・D・H	良	明褐色	曾利系
5		第3号土坑	深鉢	胴	捺糸文r、内面ナデ	A・D	良	赤褐色
6	第5号土坑	深鉢	口縁	RL・RL羽状縄文、沈線、内面ミガキ	D・H	良	にぶい褐色	加曾利E3
7		深鉢	胴	縄文L、沈線、内面ナデ	B・D	良	暗褐色	加曾利E3
8		深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ナデ	A・D	良	赤褐色	曾利系
9		深鉢	胴	集合条線、内面ナデ	B・D	良	にぶい黄褐色	曾利系
10	第8号土坑	深鉢	胴～底	縄文RLR、内面ナデ	A・B・D	良	明赤褐色	加曾利E4
11	第9号土坑	深鉢	口縁	縄文RL、内面ナデ	A・C	良	暗赤褐色	井草Ⅱ
12		深鉢	胴	縄文LR、沈線、内面ナデ	A・B	良	赤褐色	加曾利E3
13		深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ナデ	A・D	良	にぶい黄褐色	加曾利E系
14	第10号土坑	深鉢	口縁	微隆起帯、縄文RL(充填)、内面ナデ	B・D・G	良	明赤褐色	加曾利E4
15		深鉢	口縁	微隆起帯、集合条線、沈線、内面ミガキ	A・B・D	良	暗褐色	曾利系
17	第11号土坑	深鉢	口縁	刺突文、沈線、内面ナデ	C・D	良	明褐色	遠弧文系
18		深鉢	胴	縄文LR、沈線、内面ナデ	A・D	良	にぶい黄褐色	加曾利E3
19		深鉢	胴	条線、内面ナデ	A・B・G	良	にぶい赤褐色	曾利系
21		第12号土坑	深鉢	胴	縄文RL、内面ミガキ	A・B・E	良	にぶい黄褐色
22	第13号土坑	深鉢	胴～底	微隆起帯、縄文LR(充填)、内面ナデ→ミガキ	B・D	良	明赤褐色	加曾利E4
23	第14号土坑	深鉢	口縁	条線、沈線、内面ミガキ	A・C	良	黄褐色	曾利系
24		深鉢	胴	集合条線、内面ナデ	A・B・C	良	明褐色	曾利系
25	第15号土坑	深鉢	底部	集合条線、隆帯、内面ナデ	A・D	良	明褐色	曾利系
26	第17号土坑	深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ミガキ	D・I	良	黄褐色	曾利系
27	第18号土坑	深鉢	胴	捺糸文L、内面ナデ	A・D・G	良	にぶい赤褐色	稲荷台
28		深鉢	胴	捺糸文r、内面ナデ	A・C・D	良	暗赤褐色	稲荷台
29	第19号土坑	深鉢	胴	縄文LR、沈線、内面ナデ	A・B・G	良	明赤褐色	加曾利E3
31	第22号土坑	深鉢	口縁	表裏面磨痕	B・K	普通	褐色	条痕文系
32		深鉢	胴	表裏面磨痕	B・C・K	普通	褐色	条痕文系
33		深鉢	胴	表裏面磨痕	B・K	普通	褐色	条痕文系
34		深鉢	胴	貝殻条痕文、内面磨痕	C・G・K	普通	明褐色	条痕文系
35		深鉢	底部	無文	C・K	普通	褐色	条痕文系
36		深鉢	胴	縄文LR、沈線、内面ナデ	A・C	良	にぶい黄褐色	加曾利E3
37		深鉢	胴	縄文RL、沈線、内面ナデ	A・D	良	赤褐色	加曾利E3
38		深鉢	胴	縄文RL、沈線、内面ナデ	A・B	良	にぶい褐色	加曾利E3
39		深鉢	胴	縄文RL、微隆起帯、内面ナデ	A・D	良	明赤褐色	加曾利E3
40	深鉢	口縁	条線、沈線、内面ナデ	A・D	良	明褐色	曾利系	
41	深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ミガキ	A・B・D	良	赤褐色	曾利系	

第6表 土坑出土土器観察表(2)

番号	遺構名	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
42	第23号土坑	深鉢	口縁	縄文R L、内面ナデ	A・B	良	暗褐色	井草Ⅱ
43		深鉢	口縁	縄文R L(口唇部)、撫糸文R(胴部)、内面ナデ	A・B・G	良	暗褐色	井草Ⅱ
44		深鉢	口縁	撫糸文 r、内面ナデ	A・B・G	良	暗褐色	夏島
45		深鉢	口縁	撫糸文 R、内面ナデ	A・I	良	にぶい黄褐色	稲荷台
46		深鉢	口縁	撫糸文 r、内面ナデ	A・B	普通	暗褐色	稲荷台
47		深鉢	口縁	撫糸文 R、内面ナデ	A・I	良	明赤褐色	稲荷台
48		深鉢	胴	撫糸文 R、内面ナデ	A・C・D	良	にぶい黄褐色	夏島
49		深鉢	胴	撫糸文 r、内面ナデ	A・B・D	良	明褐色	夏島
50		深鉢	胴	撫糸文 r、内面ナデ	A・B	良	暗赤褐色	夏島
51		深鉢	胴	撫糸文 r、内面ナデ	A・B・C	良	暗褐色	夏島
52		深鉢	胴	撫糸文 R、内面ナデ	A・C・I	良	暗褐色	稲荷台
53		深鉢	胴	撫糸文 r、内面ナデ	A・B	良	赤褐色	稲荷台
54		深鉢	胴	撫糸文 R、内面ナデ	A・I	良	明赤褐色	稲荷台
55		深鉢	胴	撫糸文 R、内面ナデ	A・C・D	良	暗褐色	稲荷台
56		深鉢	胴	撫糸文 R	A・B・D	良	赤褐色	稲荷台
57		深鉢	胴	撫糸文 R、内面ナデ	A・C	良	褐色	稲荷台
58		深鉢	胴	撫糸文 R、内面ナデ	A・D	良	赤褐色	稲荷台
59		第24号土坑	深鉢	口縁～胴	陸帯、内面ナデ	A・D	良	褐色
60	第28号土坑	深鉢	口縁	縄文R L、内面横ナデ	A・C	良	にぶい褐色	加曾利E3
61		深鉢	胴	縄文L、内面ミガキ	A・D	良	明黄褐色	後期
62	第35号土坑	深鉢	胴	縄文R L、陸帯、内面ナデ	A・B・C	良	にぶい黄褐色	加曾利E1
63		深鉢	胴	縄文L R、内面ナデ	A・B・D	良	褐色	加曾利E3
64		深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・B・D	良	褐色	加曾利E3
65	第38号土坑	深鉢	口縁～胴	縄文L R、微隆起帯、内面ミガキ	B・D・E	良	褐色	加曾利E3
66		深鉢	口縁～胴	集合条線、沈線、内面ナデ・ミガキ	B・C・D	良	暗褐色	曾利系
67		深鉢	胴～底	集合条線、内面ナデ・ミガキ	A・B・D	良	褐色	曾利系
68		深鉢	口縁	撫糸文L、陸帯、内面ナデ	A・B・D・G	良	暗褐色	加曾利E1
69		深鉢	胴	縄文L、沈線、内面ナデ	A・C	良	褐色	加曾利E3
70		深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ミガキ	A・B	良	明赤褐色	加曾利E3
71		深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・B	良	灰黄褐色	加曾利E3
72		深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	B・C	良	赤褐色	加曾利E4
73		深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	B・H	良	明褐色	加曾利E3
74		深鉢	口縁	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	A・C・H	良	にぶい黄褐色	加曾利E4
75		深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ナデ	A・B・D	良	にぶい褐色	曾利系
76		深鉢	胴	集合条線、内面ナデ	B・C・D	良	明褐色	曾利系
77		深鉢	胴	集合条線、内面ナデ	A・B・C	良	にぶい褐色	加曾利E系
78		深鉢	胴	撫糸文 R、沈線、交互刺突文、内面ナデ	A・B・D	良	暗褐色	連弧文系
79	第44号土坑	深鉢	胴	縄文L R L、沈線、内面ナデ	A・D	良	褐色	加曾利E3

第6表 土坑出土土器観察表(3)

番号	遺構名	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
81	第46号土坑	深鉢	口縁	撫糸文L、隆帯、内面ナデ	C・D	良	灰黄褐色	加曾利E1
82		深鉢	胴	縄文RL、隆帯、内面ナデ	A・D・H	良	明赤褐色	加曾利E1
83		深鉢	胴	縄文RLR、沈線、内面ナデ	C・D	良	明赤褐色	加曾利E3
84		深鉢	胴	縄文RL、沈線、内面ナデ	A・D・I	良	明赤褐色	加曾利E2
85		深鉢	底部	縄文L、沈線、内面ナデ	A・B・D	良	明褐色	加曾利E3
86		深鉢	口縁	集合糸線、内面ナデ	A・D	普通	明褐色	加曾利E系
87	第51号土坑	深鉢	口縁	撫糸文L、刻み、沈線、刺突文、内面ナデ	A・B・C	良	明赤褐色	中峰
88		深鉢	胴	撫糸文L、内面ナデ	B・D・G	良	赤褐色	加曾利E1
89		深鉢	口縁	縄文RL、沈線、内面ナデ	A・B・C	普通	黄褐色	加曾利E3
90	第53号土坑	深鉢	口縁	縄文RL、隆帯、内面ナデ	A・I	普通	灰黄褐色	加曾利E3
91		深鉢	口縁	縄文RL、沈線、内面ナデ	A・I	良	灰黄褐色	加曾利E4
92		深鉢	胴	集合糸線、内面ミガキ	A・I	良	橙色	曾利系
93		深鉢	胴	集合糸線、内面ミガキ	A・D	良	橙褐色	加曾利E系
94	第55号土坑	深鉢	胴	縄文RL、沈線、内面ナデ	A・D・G	良	にぶい橙色	加曾利E3
95		浅鉢	胴～底	無文、内面ミガキ	A・D・G	良	橙色	中期
96	第67号土坑	深鉢	口縁	縄文LR、隆帯、沈線、内面ナデ	A・B・G	良	にぶい黄褐色	加曾利E3

第7表 ビット出土土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	P37	深鉢	口縁	撫糸文r、内面ナデ	A・C・D	良	明赤褐色	稲荷台
2		深鉢	胴	撫糸文R、内面ナデ	A・C・D	良	明褐色	加曾利E系
3	P43	深鉢	胴	微隆起帯、縄文RL(充填)、内面ミガキ	A・B・H	良	にぶい橙色	加曾利E4
4		深鉢	胴	集合糸線、内面ナデ	A・D	良	橙色	曾利系
5	P59	深鉢	口縁	縄文LR(羽状)、内面ナデ	A・B・D	良	明赤褐色	加曾利E3

(3) 古墳時代

概要

今回の調査で検出された古墳時代の遺構は、前期初頭の竪穴住居5軒（第2～6号住居跡）である。個々の確認面は、第2・4・5号住居跡がⅡ層下位、第3・6号住居跡がⅢ層上位である。調査区での位置関係は、東半から北側にかけて分布する傾向が見られ、西側では稀薄であった。遺物は出土量に差があるが、各住居から該期の特徴をもつ土器が出土した。

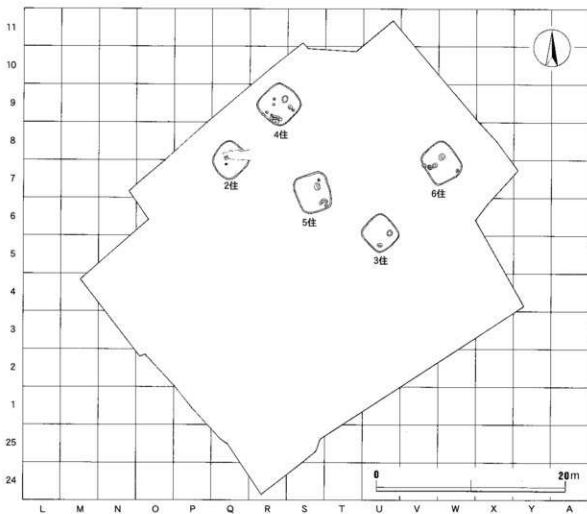
住居跡

第2号住居跡（第69・70図、写真図版32）

位置 調査区北側のQ-7・8グリッドで検出した。周辺には4m北東に第4号住居跡、5m南東に第5号住居跡が位置し、東壁隅は縄文時代の第8号住居跡・第34号土坑と重複する。

遺存状態 住居ほぼ中央から東壁コーナーにかけて幅約1m、深さ約20cmの床面に達する攪乱を受けており、炉跡北側と床および壁が一部破壊されていた。

形状・規模 径3.2×3.5mほどの隅丸方形を呈するが、南西側が外に膨らみ「胴張り」の形状も見られる。主軸方位はN-52°-Wを示す。



第68図 古墳時代遺構全体配置図

覆土 7層に分けた。1～4層が堅穴覆土、5～7層が貼床ならびに掘り方の埋戻し土である。

第1層 黒褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第3層 褐色土 ローム粒を微量含む。

第4層 明赤褐色土 焼土粒を多量含む。

第5層 明褐色土 ローム土主体。

第6層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第7層 黄褐色土 ローム土と褐色土の混合土。

壁・床面 残存壁高10cm前後を測り、北東壁が約75°、ほかは60～65°の角度で立ち上がっている。床面はロームと褐色土の混合土による埋戻し土とローム粒を含む暗褐色土を踏み固めた貼床からなるが、全体に軟弱で起伏が多い。掘り方は、周縁に比べ中央部がやや深く掘り窪められていた。

柱穴 掘り方で小ピット1基(P1)を検出したが、規模や位置などから柱穴として機能したか否かは不明である。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

炉跡 床面中央やや奥壁寄りに地床炉(F₁)を検出した。掘り方はほぼ円形を呈し、長径45cm、短径40cm、深さ約8cmを測る。炉内には焼土の堆積は軽微で、壁・底面とも硬化面は確認されなかった。覆土は以下の2層に分けた。

第1層 明褐色土 焼土粒を微量含む。

第2層 明黄褐色土 ローム粒を多量含む。

時期 遺物から判断して古墳時代前期初頭と思われる。

出土遺物 (第71図1～3、写真図版36)

壺36点、甕37点、鉢3点の計76点と、このほかに縄文土器94点が出土した。遺物の出土分布は南東壁下と南西壁下の覆土下層に纏まった分布が見られ、それ以外は覆土中から散漫に出土した。図示した3点は、1・2が南西壁下、3が東壁下の覆土下層出土である。

土器 (第71図1～3)

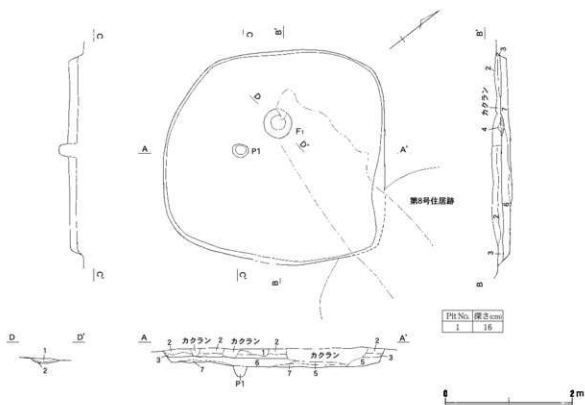
高坏形土器 (1・3)

1は口縁部から胴部1/3片で、推定口径13cmを測る。内面は横方向、外面は横・斜め方向にヘラナデ調整されている。胎土中に砂粒・赤色粒を含み、にぶい黄橙色(10YR6/4)で比較的硬質に焼き上がっている。

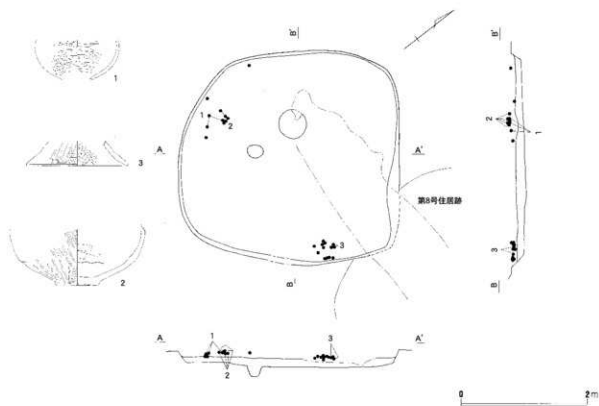
3は脚部の小片で、器台の可能性もある。底径(16cm)を測る。内外面は横・斜め方向、裾部は横方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒・赤色粒を含み、明褐色(7.5YR5/6)で硬く焼き上がっている。

壺形土器 (2)

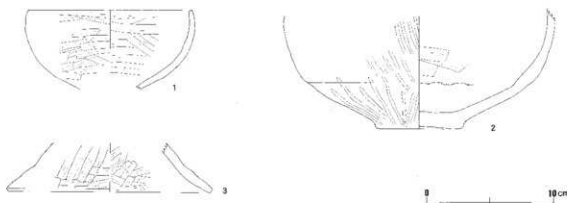
胴部下半から底部1/3片で、底径6.7cmを測る。内面は横方向にヘラナデ、外面は縦方向にミガキ調整される。胎土中に砂粒・赤色粒・小石を含み、明褐色(7.5YR5/6)で硬く焼き



第69図 第2号住居跡平・断面図 (L=39.7m)



第70図 第2号住居跡土器個体別分布及び遺物出土図 (L=39.7m)



第71図 第2号住居跡出土遺物

上がっている。

第3号住居跡 (第72・73図、写真図版33)

位置 調査区ほぼ中央東寄りU-5・6グリッドで検出した。周辺には4m北西に第5号住居跡、約7m北東には第6号住居跡が位置する。

遺存状態 概ね良好である。

形状・規模 径3.4m前後の隅丸方形を呈し、主軸方位はN-44°-Eを示す。

覆土 3層に分層した。1・2層が堅穴覆土、3層が貼床ならびに掘り方の埋戻し土である。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多量含む。

壁・床面 残存壁高10～15cmを測り、北西壁が約72°、ほかは53～60°のやや緩やかな角度で立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを含む暗褐色土の埋戻し土を踏み固めた貼床が全面で確認されたが、硬化面はとくに認められなかった。掘り方は、中央部に比べ周縁がやや深く掘り窪められていた。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 主軸線上右側、南壁コーナーから床面側約40cmの位置に掘り込まれている(P1)。掘り方は東西に長い楕円形を呈し、長径50cm、短径40cm、深さ約20cmを測る。壁は東壁が緩やかに立ち上がり、西壁はやや角度をもって立ち上がる。

炉跡 床面中央北東側に偏って地床炉(F)を検出した。掘り方は略円形を呈し、長径65cm、短径50cm、深さ約13cmを測る。炉内に焼土の堆積は軽微で壁・底面とも明瞭な硬化面は確認されなかった。覆土は以下の2層に分けた。

第1層 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを少量含む。

第2層 明褐色土 ローム粒を多量含む。

時期 遺物から判断して古墳時代前期初頭と思われる。

出土遺物（第74図1・2、写真図版36）

壺17点、甕86点の計103点と、このほかに縄文土器186点が出土した。土器は小破片が多く、図示できたのは2点で、ともに床面直上出土である。

土器（第74図1・2）

手捏土器（1）

略完形で、口径（8.5cm）、底径6.6cm、器高6.1cmを測る。体部から口縁部へはやや内弯気味に立ち上がる。外面は横・斜め方向のヘラケズリ、内面口縁部は横方向にヘラナデ調整される。胎土中に小石を多く含み、器面がザラザラしている。色調は橙色（7.5YR6/6）で硬く焼き上がっている。

甕形土器（2）

口縁部から胴部の大形破片で、口径（20cm）を測る。頸部から口縁部の断面形状は「く」の字状を呈し、最大径を胴部中位に測る。口縁部内外面は横方向にハケメ整形後、内面は横方向にヘラナデ、口唇部は横方向にナデ調整の後、棒状工具によるキザミメが施される。胴部内面は、中位から上位が横・斜め方向にヘラナデ、下位がヘラミガキ、外面は横・斜め方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒・小石を含み、明褐色（7.5YR5/6）でやや軟質に焼き上がっている。

第4号住居跡（第75・76図、写真図版33・34）

位置 調査区北側のR・S-8・9グリッドで検出した。周辺には4m南西に第2号住居跡、6m南には第5号住居跡が位置する。本住居跡は、焼失住居の可能性があり、床面による硬化面と炭化材・片の散在が確認された。

遺存状態 概ね良好である。

形状・規模 径4m前後の隅丸方形を基調とするが、北東側がやや外側に膨らみいびつである。主軸方位はN-45°-Eを示す。

覆土 8層に分層した。1～5層が堅穴覆土、6～8層が貼床ならびに掘り方の埋戻し土である。

第1層 暗褐色土 焼土粒及び炭化粒を少量含む。

第2層 褐色土 焼土粒を微量含む。

第3層 暗褐色土 焼土粒及びブロックを含む。

第4層 明褐色土 被熱し著しく硬化したローム土。

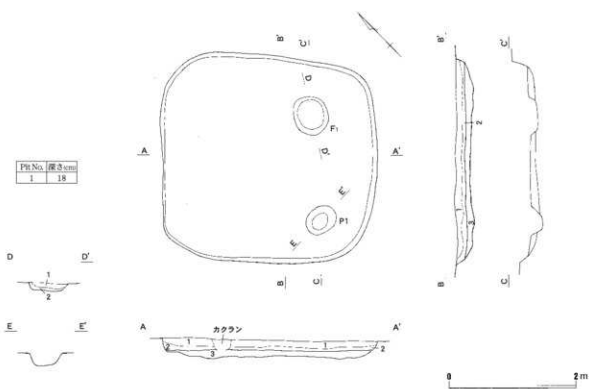
第5層 褐色土 ロームブロックを少量含む。

第6層 褐色土 ローム土と褐色土の混合土。

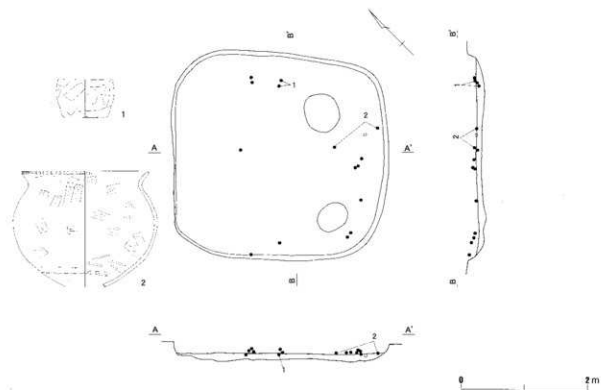
第7層 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多量含む。

第8層 黄褐色土 ロームブロックを多量含む。

壁・床面 南西壁で壁高25cm、北東壁で20cm、南東壁で15cm、北西壁で約10cmを測り、南東壁が85°、南西壁が70°、ほかは60°前後の角度で立ち上がっている。床面は掘り方をロームブロック主体の黄褐色土で5～10cm埋戻し、この上にローム土と褐色土の混合土、ローム粒・ブロック混じりの暗褐色土で貼床が施され、炉跡近辺を中心に硬化する傾向が見られた。



第72図 第3号住居跡平・断面図 (L = 39.5m)



第73図 第3号住居跡土器個体別分布及び遺物出土図 (L = 39.5m)



第74図 第3号住居跡出土遺物

掘り方は、炉跡西側がやや浅く、他は一段深く掘り窪められていた。

柱穴 床面で1基(P1)、掘り方でピット5基(P2～6)を検出したが、掘り方で検出した5基は、いずれも規模や位置などから柱穴として機能したか否かは不明である。南西壁から床面側へ約40cmに位置するP1は出入り口施設に関連するピットと考えられ、長径30cm、短径25cmの略円形を呈し、深さ31cmを測る。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 主軸線上右側、南東隅寄りの壁面に接して掘り込まれ(P7)、底面には壺形土器(第78図7)の破片が集積されていた。平面形は略円形を呈し、長径55cm、短径45cm、深さ22cmを測り、前面には幅25cm前後、高さ6cm程の凸堤が弧状に構築されていた。覆土は以下の2層に分けた。

第1層 暗褐色土 焼土粒及びローム粒を少量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒を多量含む。

炉跡 床面中央奥壁寄りに地床炉(F1)を検出した。南北に長軸をもつ楕円形を呈し、長径75cm、短径60cm、深さ約10cmを測る。炉内には焼土が約5cm厚堆積し、壁及び底面が著しく硬化していた。覆土は以下の3層に分けた。

第1層 暗褐色土 焼土粒及び炭化粒を微量含む。

第2層 褐色土 焼土粒を微量含む。

第3層 暗赤褐色土 焼土粒・ブロックを含む。

時期 遺物から判断して古墳時代前期初頭と思われる。

出土遺物 (第77・78図1～7、写真図版36・37)

壺34点、甕52点、高環3点の計89点と、このほかに縄文土器269点、陶器片2点、礫1点が出土した。遺物の平面分布は、炉跡を中心として東側では希薄で、西側と貯蔵穴周辺に纏まって分布している。また断面上での分布は、床直から覆土下層を中心に出土している。図示した7点は、1・5が覆土下層、4が床面から覆土下層、7が貯蔵穴と床面、ほかは床面

直上出土である。

土器（第77・78図1～7）

壺形土器（1・7）

1は小型壺で、口径9cm、底径5.3cm、器高14.4cmを測る。頸部から口縁部の断面形状は「く」の字状を呈し、最大径を胴部下位に測る。口縁部内外面は縦・横方向にハケメ整形後横方向にヘラナデ、胴部外面は横・斜め方向にハケメ後斜め方向にヘラミガキ、内面は横方向にヘラナデ調整される。胴部下位の穿孔は焼成後の所産である。胎土中に砂粒・黒色粒・小石を含み、明褐色土（7.5YR5/6）で硬質に焼き上がっている。

7は胴部下半から底部の大形破片で、底径9.6cmを測る。内外面は横・斜め方向にヘラナデ後外面は横・斜め方向にヘラミガキ調整される。外面は赤彩される。胎土中に砂粒を多く含み、極暗赤褐色（2.5YR2/4）で硬質に焼き上がっている。

台付壺形土器（2～4）

2は脚部を欠くが、ほかは完形で、口径16.6cm、現高約17cmを測る。頸部から口縁部の断面形状は「く」の字状を呈し、胴部は球胴状で、最大径を中位に測る。口唇部は面取り後キザミメが施される。口縁部外面は縦方向にハケメ整形後横ナデ、頸部外面は縦方向にハケメ、胴部外面は縦・横・斜め方向にハケメ後横・斜め方向にヘラナデ調整され、内面口縁部は横方向にハケメ整形後横ナデ、以下頸部は横方向にハケメ、胴部は横方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒・黒色粒・小石を含み、褐色（7.5YR4/6）で硬質に焼き上がっている。

3は略完形で、口径（16cm）、底径10.1cm、器高21.7cmを測る。頸部から口縁部の断面形状は「く」の字状を呈し、最大径を胴部中位に測る。口縁部内外面は、外面は横ナデ、内面は横方向にハケメ後横ナデ、口唇部は面取り後角状工具によるキザミメが施されている。以下胴部内面は横・斜め方向にヘラナデ、外面は縦・横・斜め方向にハケメ、脚部外面は縦方向にハケメ、内面は横方向にハケメ後ヘラナデ調整される。胎土中に砂粒・赤色粒を含み、にぶい褐色（7.5YR5/4）で、比較的硬質に焼き上がっている。

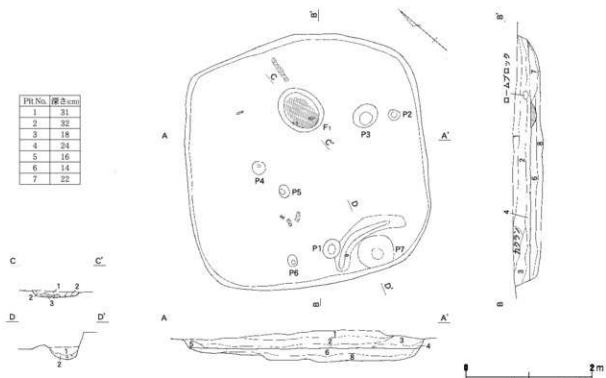
4は略完形で、口径22cmを測る。頸部から口縁部の断面形状は「く」の字状を呈し、最大径を胴部中位に測る。口唇部は丸頭状を呈し、キザミメが施される。口縁部内外面は、内面は横方向にハケメ後横ナデ、外面は縦方向にハケメ後横ナデ調整され、以下胴部外面は縦・斜め方向にハケメ後同方向にヘラナデ、内面は横方向にヘラナデ、脚部内外面は、内面は縦・横方向にヘラナデ、外面は縦方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒を多く含み、にぶい褐色（7.5YR5/4）で軟質に焼き上がっている。

高坏形土器（5・6）

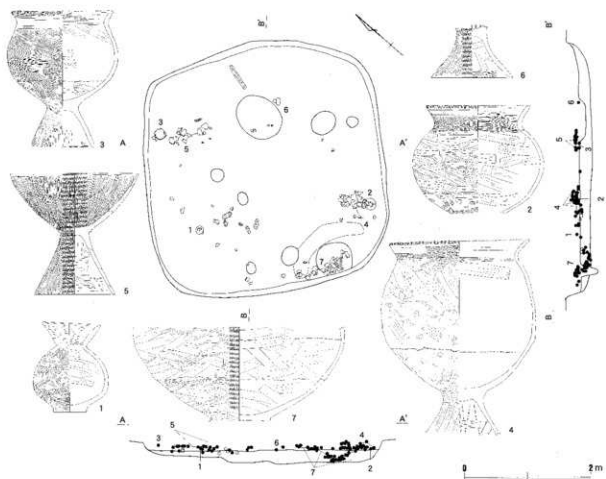
5は完形で、口径20.5cm、底径13cm、器高19.2cmを測る。坏部は塊状を呈し、脚部との接合部に微かに稜を有する。脚部は直線的に開く。脚部内面を除きほかは全面赤彩される。口縁部内外

面は横ナデ調整され、以下坏部内外面は縦方向にヘラミガキ、脚部内面は縦・横方向にヘラナデ、外面は縦方向にヘラミガキ調整される。胎土中に砂粒を多く含み、暗赤色（10R3/6）で硬質に焼き上がっている。

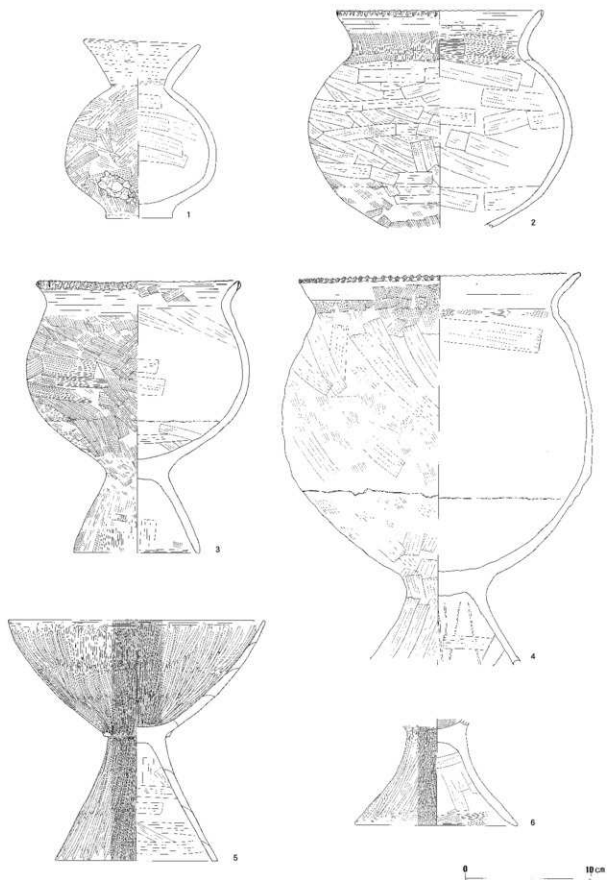
6は脚部で、底径12.7cmを測る。裾部は外反しながらラッパ状に開く。5同様、脚部内面



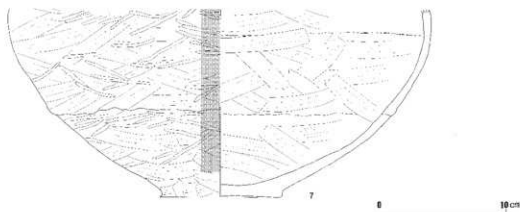
第75图 第4号住居跡平・断面图 (L = 39.7m)



第76图 第4号住居跡土器個体別分布及び遺物出土图 (L = 39.7m)



第77图 第4号住居跡出土遺物(1)



第78図 第4号住居跡出土遺物(2)

を除き全面が赤彩されるものと思われる。内外面は、外面が横・斜め方向にハケメ後縦・斜め方向にヘラミガキ、内面は横方向にハケメ後横・斜め方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒を多く含み、極暗赤褐色(2.5YR2/4)で硬質に焼き上がっている。

第5号住居跡(第79・80図、写真図版34)

位置 調査区中央やや北寄りのS・T-6・7グリッドで検出した。周辺には6m北西に第2・4号住居跡、4m南東に第3号住居跡、10m東には第6号住居跡がそれぞれ位置する。

遺存状態 耕作の影響を受け、西壁を除く各壁と床面が一部破壊されていた。

形状・規模 径4m前後を測り、南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈するが、南側がやや窄まりいびつである。主軸方位はN-16°-Wを示す。

覆土 4層に分層した。1・2層が堅穴覆土、3・4層が貼床ならびに掘り方の埋戻し土である。

第1層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を微量含む。

第2層 褐色土 ローム粒を少量含む。

第3層 暗褐色土 ローム土と褐色土の混合土。

第4層 黄褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

壁・床面 残存壁高25cm前後を測り、66~80°の角度で立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、地山をローム粒・ブロックを含む黄褐色土で整地し、この上にロームと褐色土の混合土による貼床が施されるが、硬化面はとくに認められなかった。掘り方は、北側がやや浅く、他は一様に掘り窪められていた。

柱穴 掘り方で小ピット1基(P1)を検出したが、規模や位置などから柱穴として機能したか否かは不明である。P2は貯蔵穴である。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 主軸線上右側、南東隅寄りの床面側に位置する(P2)。平面形は円形を呈し、長径40cm、短径35cm、深さ30cmを測る。前面には幅30cm前後、高さ5cm前後の凸堤が弧状に構築されていた。覆土は以下の3層に分けた。

第1層 暗褐色土 ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒及び炭化粒を少量含む。

第3層 褐色土 ローム粒を多く含む。

炉跡 床面中央から北東に偏って地床炉(F)を検出した。平面形は不整形を呈し、長さ80cm、短径65cm、深さ17cmを測る。炉内には焼土が約5cm厚堆積し、壁面及び底面が著しく硬化していた。覆土は以下の3層に分けた。

第1層 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

第2層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を少量含む。

第3層 明赤褐色土 焼土及び焼土ブロックを含む。

時期 遺物から判断して古墳時代前期初頭と思われる。

出土遺物 (第81図1～3、写真図版38)

壺4点、甕14点、鉢1点、不明4点の計23点と、このほかに縄文土器69点が出土した。図示した3点は、1・2が覆土下層、3が床面直上出土である。

土器 (第81図1～3)

台付壺形土器 (1・2)

1は口縁部から胴部1/2片で、口径(14.6cm)を測る。頸部から口縁部は小さく外傾しながら直線的に開く。平口縁で内外面は、内面は横方向にハケメ、外面は縦方向にハケメ調整され、以下胴部外面は横・斜め方向にハケメ、内面は横方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒を多く含む、褐色(7.5YR4/4)でやや硬質に焼き上がっている。

2は口縁部1/5片と胴部の大形破片で、口径(16.7cm)を測る。口唇部は平坦に面取りされ、外側にキザミが施されている。口縁部内外面は、内面が横方向、外面が縦方向にヘラナデ調整され、以下胴部内外面は外面が縦・横・斜め方向、内面が横方向にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒・赤色粒を含み、黒褐色(10YR3/2)でやや軟質に焼き上がっている。

高坏形土器 (3)

口縁部から坏部2/3片で、口径(15.5cm)を測る。口縁部内外面は、外面が横方向にヘラナデ後同方向にヘラミガキ、内面が横方向にヘラミガキ、坏部内外面は、外面が横方向にヘラナデ、内面が縦方向にヘラミガキ調整される。内外面とも赤彩される。胎土中に砂粒・小石を含み、暗赤褐色(5YR3/6)で硬質に焼き上がっている。

第6号住居跡 (第82・83図、写真図版35)

位置 調査区東側のV-W-7・8グリッドで検出した。周辺には10m南西に第3号住居跡、16m西には第5号住居跡が位置する。

遺存状態 概ね良好である。

形状・規模 隅丸長方形を基調とし径約4×3.5mを測る。主軸方位はN-40°-Wを示す。

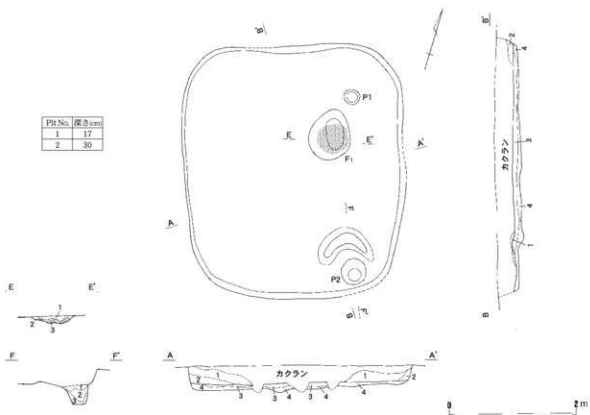
覆土 4層に分けた。1～3層が堅穴覆土、4層が貼り床ならびに掘り方の埋戻し土である。

第1層 黒褐色土 ローム粒を多量含む。

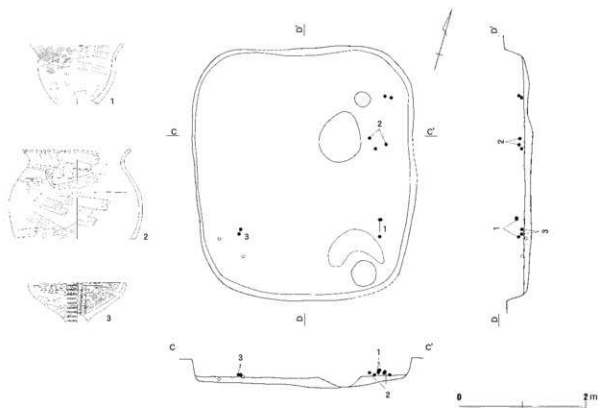
第2層 暗褐色土 ローム粒を多量含む。

第3層 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

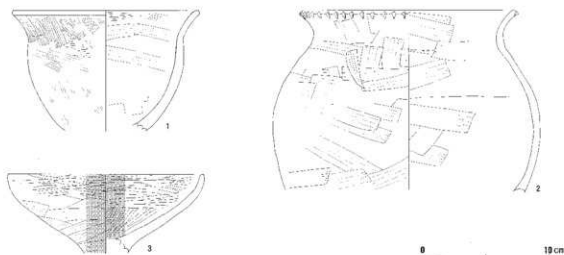
第4層 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多量含む。



第79図 第5号住居跡平・断面図 (L=39.6m)



第80図 第5号住居跡土器個体別分布及び遺物出土図 (L=39.6m)



第81図 第5号住居跡出土遺物

壁・床面 残存壁高15～20cmを測り、床から66～80°の角度で立ち上がっている。床面は地山の上にローム粒・ブロックを含む暗褐色土を約5cm埋戻し、これを直に踏み固めた貼り床が全面に施され、とくに炉跡近辺が堅くしまっていた。掘り方は、ほぼ平坦で一様に掘り窪められていた。

柱穴 床面でピット1基(P1)、土坑1基(1土坑)、掘り方でピット1基(P2)を検出した。ピットは2基とも規模や位置などから柱穴として機能したか否かは不明である。1土坑は炉跡から60cm西側に位置し、60×50cmの楕円形で、深さ約10cmを測る。P2は貯蔵穴と思われる。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 主軸線上右側、東壁隅から床面側20cmの位置に掘り込まれている(P2)。平面形は円形を呈し、長・短径25cm前後で、深さ14cmを測る。

炉跡 床面中央から北東側に偏って地床炉(F₁)を検出した。平面形は略円形を呈し、長径65cm、短径60cm、深さ約20cmを測る。炉内には焼土が5～7cm厚ブロック状に堆積し、壁及び底面が著しく硬化していた。土層は以下の3層に分けた。

第1層 暗黒褐色土 焼土粒を少量含む。

第2層 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを多量含む。

第3層 黄褐色土 被熱したロームブロックと焼土ブロックの混合土。

時期 遺物から判断して古墳時代前期初頭と思われる。

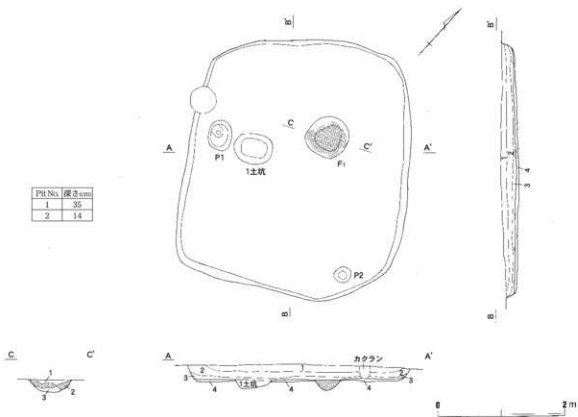
出土遺物 (第84図1～5、写真図版38)

壺15点、甕27点 高坏3点、土製品1点の計46点と、このほかに縄文土器220点、陶器4点、鏝3点が出土した。小破片が多く図化できたのは4点で、3は炉内、ほかは覆土中出土である。

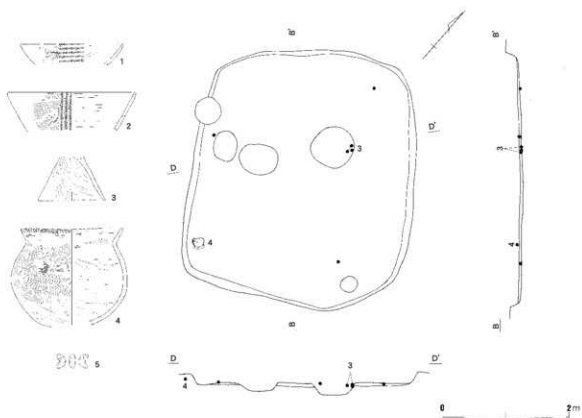
土器 (第84図1～4)

高坏形土器 (1～3)

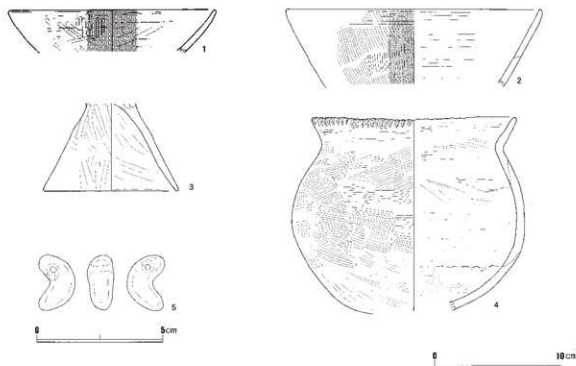
1は口縁部から坏部1/3片で、口径(16.3cm)を測る。内外面とも横方向にヘラナゲ後、



第82図 第6号住居跡平・断面図 (L=39.5m)



第83図 第6号住居跡土器個体別分布及び遺物出土図 (L=39.5m)



第84図 第6号住居跡出土遺物

縦・斜め方向にヘラミガキ調整される。内外面とも赤彩される。胎土中に砂粒を多く含み、暗赤褐色（2.5YR3/6）で硬質に焼き上がっている。

2は口縁部から坏部の大形破片で、口径（20.1cm）を測る。口縁部外面は縦方向にハケメ後横ナデ、以下坏部外面は縦方向にハケメ調整される。内面は横方向にヘラナデ後、不明瞭だが横方向にヘラナデ調整される。外面は赤彩される。胎土中に砂粒を多く含み、赤褐色（5YR4/6）で硬質に焼き上がっている。

3は脚部1/3片で、底径（10.7cm）を測る。裾部に向かって「ハ」の字状に開く。内外面は、内面は斜め方向にヘラナデ、外面は横方向にヘラナデ後縦方向にヘラミガキ調整される。胎土中に砂粒・赤色粒を含み、褐色（7.5YR4/6）で硬質に焼き上がっている。

台付壺形土器（4）

口縁部から胴部3/5片で、口径（16.2cm）を測る。頸部から口縁部の断面形状は「く」の字状を呈し、最大径を胴部中位に測る。口縁部内外面は横方向にハケメ整形後ナデ調整、口唇部は横方向にナデ調整の後キサミメが施されている。以下胴部内外面は、内面が横・斜め方向にハケメ後横方向にヘラナデ、外面が横・斜め方向にハケメ調整される。胎土中に砂粒・赤色粒を含み、暗褐色（7.5YR3/4）で比較的硬質に焼き上がっている。

土製品（第84図5）

勾玉（5）

土製の勾玉で、長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ1cm、重量2.7gを量る。

（前田秀則）

(4) 調査区出土遺物

ここでは、表土・包含層・攪乱層のほか、明らかに時期の異なる遺構から出土した遺物を調査区出土遺物として扱う。図示した遺物は、縄文時代の土器・土製品・石器、旧石器時代の石器、古墳時代の土器・土製品である。以下、時代ごとに遺物の説明を加えるが、縄文時代の土器・石器及び旧石器については観察表を提示しているので併せて参照されたい。

縄文時代の遺物

土器

調査区からは、断続的ではあるが、縄文時代早期前半から中期後半に亘る約3500点の土器が出土した。そのうち、主体となるのは縄文時代中期後半の加曾利E式土器で、量的には全体の9割強を該期の土器が占めている。それ以外では早期前半の撚糸文系土器・後半の条痕文系土器、前期前半の花積下層式土器、中期中葉の勝坂式土器・阿玉台式土器、中期後半の曾利式土器・連弘文系土器等が出土しているがいずれも些少である。土器は大半が小破片・細片で、器形や文様構成が窺えるものは極僅かである。

第I群土器 (第86図1~12、写真図版39)

早期前半の撚糸文系土器を一括する。1・2は、井草Ⅱ式に比定されるもので、1は極端に肥厚しない口唇部が外反し、原体RLの縄文が口唇部と胴部に施文される。2は口唇部の肥厚・外反が弱まり、口唇部直下に横ナデの無文部が見られる。縄文は口唇部・胴部とも原体LRが施文される。3は夏島式に比定されるもので、口唇部直下から原体Lの撚糸文が縦位に施文される。口唇部の形態は井草Ⅱ式的であり、過渡的なものと思われる。4~12は胴部破片である。4・5は条間の狭い撚糸文、6~12は条間の広い撚糸文が縦位・斜方向に施文され、無文部を残すもの(9・12)も見られる。施文原体は4~10が撚糸文L、11・12が撚糸文Rで、撚糸の施文方法から4・5は夏島式、6~12は稲荷台式に比定できるとと思われる。

第II群土器 (第86図13~17、写真図版39)

早期後半の条痕文系土器を一括する。13は外面に貝殻条痕文、内面に繊維束による擦痕、14・15・17は内外面とも貝殻条痕文、16は外面のみ斜方向の貝殻条痕文が施文されている。胎土にはともに繊維を多く含む。

第III群土器 (第86図18~20、写真図版39)

前期前半に相当するものを一括する。18は無文、19・20は繊維束による擦痕で器面調整される。3点とも花積下層式に比定できるとと思われる。

第IV群土器 (第86図21~32、写真図版39)

中期中葉、勝坂式土器・阿玉台式土器を本群とした。

1類 (21~28・30) 勝坂2式土器を一括する。従来の井戸尻編年では藤内式併行期に相当するものと考えられる。文様要素は、従文様の三角押文が波状沈線に代わり、抽象文や縦位・横位区画文(パネル状土器)など多くの型式(タイプ)が見られ、バリエーションに富む時期である。21~23は深鉢の口縁部破片である。21は直立し、22はやや内湾する。23は口唇部がやや外反する。21は斜方向に配された隆帯に沿って角押文が併走する。22は半截竹管による半隆起線で縦位もしくは横位に「パネル」状に区画される土器で、区画内部に連続

爪形文と波状沈線文が施文される。23は横位の隆帯に沿って連続爪形文を上下に併走させ、上位には一部半円形刺突文が認められる。24～28は胴部破片である。24は横位・弧状に配された隆帯に沿って連続爪形文+波状沈線が併走する。25・26は抽象文土器の類で、毛虫状のモチーフが半隆起線と沈線で表出される。27・28は隆帯による楕円区画文が重帯する土器と思われ、27は縦位弧状のモチーフが2本隆帯で表出され、隆帯に沿って半截竹管の端部による爪形状の刺突列が連続施文される。30は横位に配された爪形文に沿って下位に沈線文、上位に半円形刺突文が併走する。

2類 (29・31) 勝坂3式土器を一括する。従来の井戸尻編年では井戸尻式併行期に相当するものと考えられる。29・31は胴部破片である。29は半截竹管の腹による半隆起線上に爪形文が加えられている。31は斜方向の沈線間に爪形状の連続刺突文が充填され、区画内に三叉文が施される。

3類 (32) 阿玉台式土器を一括する。32は胴部破片である。胎土に金雲母を多く含み、波状沈線文と斜方向に爪形文が施される。胎土・文様要素から阿玉台Ⅱ式土器に比定される資料と思われる。

第V群土器 (第85～89図33～120、写真図版39～42)

中期後半、加曾利E式土器・曾利式土器・連弧文系土器及び条線地文の深鉢ならびに鉢形土器を本群とした。

1類 (33～40) 加曾利E1式土器を本類とした。燃糸地文のものをa種、縄文地文のものをb種とした。

a種 (33～35・37～39) 燃糸地文のもの。33はキャリバー形の深鉢で、口縁部に5単位小突起を有し、口唇部は突起上に先端蔵手状の沈線が横位に刻まれる。口縁部文様は隆帯上に沈線を加えて表出した小渦巻文を連結する区画文が5単位施される。34は口縁部上位に隆帯をめぐらせ、直下に沈線による縦位弧状のモチーフが施文される。35は平行する2本隆帯が横位に配される。37～39は胴部破片である。37・38は2本1対の隆帯、39は蛇行隆帯が垂下する。

b種 (36・40) 縄文地文のもの。36は口縁部から頸部に至る破片で、口縁部下位に端部が閉塞する横長楕円状のモチーフを2本隆帯で描出し、直下に隆帯が垂下する。40は胴部破片で、蛇行隆帯が垂下する。

2類 (56・57・94) 加曾利E2式土器を一括する。磨消縄文帯の発生する直前の資料で、56・57は3本1組の懸垂沈線文、94は半截竹管の腹による平行沈線と単沈線が垂下する。

3類 (43～45・47・48・52・54・55・58～77) 加曾利E3式土器を本類とした。出土土器のうち最も安定した出土量を示すが、小破片が多く文様構成が判然としないものが多い。

a種 (43～45) 低平な隆帯と沈線で口縁部文様を表出する土器。44・45は文様構成が判然としないが、43は楕円状モチーフが作出されるものと思われる。

b種 (47・48) 口縁部下に沈線をめぐらせ、以下縄文を施す土器。本資料は4類土器(加曾利E4式土器)の可能性もあるが、文様要素に太沈線が採用されることから本類土器に含めた。47・48は口縁部下に強いなぞりを加えた太沈線をめぐらせ、以下縄文を施す。

c種 (52) 口縁部文様帯を消失し、口縁部直下から逆「U」字状文を垂下させる土器。52

は口縁部直下から太沈線による逆「U」字状文を垂下させ、区画内を磨消している。周囲の文様構成が判然としませんが、4類(加曾利E4式土器)土器の可能性もある。

d種(54・55) 口縁部文様帯を消失し、口縁直下から2本沈線を逆「U」字状に垂下させるもの、あるいは2本沈線を横位弧状に施文する土器。54は逆「U」字状に垂下する2本沈線間が磨消されている。55は指頭状の沈線で弧状モチーフが描出されている。

e種(58～73・76) 縄文地文で、平行して垂下する沈線間の地文が磨消される土器。縄文部と磨消部の間隔が狭いものと広いものがあり、さらに細分可能である。

f種(74・75・77) e種土器の縄文地上に波状沈線、端部が蕨手状の沈線を垂下させる土器。74は縄文地文上に波状沈線、77は端部が蕨手状の沈線が垂下する。75は77と同様のモチーフと思われ本種土器に含めた。

4類(46・49～51・78～93) 加曾利E4式土器を本類とした。口縁部形状は、やや内湾するもの、キャリバー形のもの、口縁部へ直線的に開くバケツ形のもの、屈曲するものがある。

a種(49～51) 口縁部下に沈線をめぐらせ、以下縄文を施文する土器。49～51は口縁部破片で、50はやや内湾し、51はキャリバー状を呈する。49は口縁部下の縄文が横位羽状に施文されている。

b種(78～81) 胴部文様に沈線により「U」字あるいは逆「U」字状のモチーフを施文する土器。78・81は「U」字状、79・80は逆「U」字状のモチーフが施文され、81は区画内に微細縄文が施文される。

c種(46・82～87) 縄文地文で、断面蒲鉾状の微隆起帯で文様を表出する土器。46は口縁下に断面蒲鉾状の微隆起帯をめぐらせ、以下縄文を施す。縄文は微隆起帯上にも施される。82は胴部上半に微隆起帯により逆「U」字状のモチーフを施し、区画内を磨り消している。83・84は口縁部が直線的に立ち上がる器形で、口縁に沿って断面蒲鉾状の微隆起帯をめぐらせ、胴部にも同様の微隆起帯が垂下する。区画内の縄文は微隆起帯上から充填されており、84は区画線上にも縄文が施される。85・86a・86b(86a・86bは同一個体)は胴部破片で、垂下する隆起帯が太い沈線でなぞられている。87は断面蒲鉾状のやや太い微隆起帯で逆「U」字状のモチーフが施文される。区画内の縄文は83・84同様隆起帯上から充填されている。

d種(88～93) 縄文地文で、断面三角形の微隆起帯で文様を表出する土器。88・89は口縁部破片で、88は口縁部の断面形状が「く」の字状に内屈し、89は外面が器面整形され「く」の字状に小さく内傾する。88・89ともその屈曲する部分に断面三角形の微隆起帯をめぐらせ、以下88は斜位に、89は横位基調に縄文が施文される。90～93は胴部破片で、垂下する微隆起帯で縄文部と磨消部が区画されている。

5類(95) 縄文のみ施文される土器。95は底部破片で、外面は縄文のみ施文されている。

6類(96～104) 曾利式土器を一括する。96～98は口縁部破片、99～104は頸部破片である。96・98は口縁部に沈線により弧線文が施される。97は刻みをもつ隆起帯で区画された内部に沈線により同心円状文が施される。99は横走りする沈線下に単沈線を縦位に施し、下位は横長楕円状区画内に三角刺突文が横位施文される。100は半截竹管の腹による平行沈線を横位多段に施し、上位に横位波状に粘土紐が貼付けられる。101も100同様の文様構成と思われる。102は隆帯上に横位波状のモチーフが交互刺突で表出されている。103は隆帯を縦位に貼

り付け、横位に平行する沈線間に刺突文が施される。104は半截竹管の腹による右下がりの平行沈線の上に左下がりの降帯が格子目状に施される。いずれも曾利Ⅱ式と思われる。

7類 (41・42・53) 連弧文系土器を一括する。53は口縁部破片、41・42は胴部破片である。41・42は撚糸地文上に41は半截竹管の腹による波状沈線、42は同様の施文具による2本1組の平行沈線と波状沈線が垂下する。53は縄文地文で、胴部上半に横位波状のモチーフが2本沈線で描出される。

8類 (105~120) 条線地文の深鉢及び鉢形土器を一括する。105は口縁下に幅広の浅い沈線を2本平行してめぐらせ、沈線間に円形刺突文が連続して施される。胴部は同様の施文具による沈線が垂下し、区画内が磨り消されている。106~112は口縁下に沈線をめぐらせ、以下胴部に条線文が施文される。113~115は口縁下の沈線を欠くもので、113は胴部に沈線により逆「U」字状のモチーフが施文される。115は地文の条線が縦位波状に施される。116~119は胴部破片で、116が単沈線と波状沈線、117は2本沈線、118は単沈線が垂下する。119は条線文のみ施されている。120は浅鉢の可能性はある。

第VI群土器 (第89図121~124、写真図版42)

中期中葉から後葉の浅鉢形土器を一括する。121~124は無文の浅鉢である。122は折り返し口縁で、口縁下に沈線が横走りする。123は口唇部外面に刻みが連続して施される。124は頸部破片で、屈曲部に沈線が1条横走りする。

土製品

土製円盤 (第89図125、写真図版42)

125は土器の胴部破片を利用した土製円盤である。右側縁を中心に周縁1/3が研磨調整されている。形状は不整形を呈し、長径3cm、短径2.7cm、重量10.3gを量る。

石器

石鏃 (第89図126、写真図版42)

126は左脚部を欠損している。平面形状は二等辺三角形を呈し、基部中央がやや深く窪入する。側縁調整は表裏面から入念に施されている。石質は黒曜石で、重量0.8gを量る。

打製石斧 (第89・90図127~136、写真図版42~43)

平面形状は127・131~134・136が短冊形、128・129・135が分銅形、130が撥型を呈する。127は砂岩製で、大形の剥片を素材とし、表面には原礫面を多く残している。128は粘板岩製で、両側縁中央には潰し加工により抉りが入られている。刃部には使用時の衝撃により剥離したと思われる細かい剥離痕が見られる。129は泥岩製で、刃部を欠損する。表面には原礫面を多く残し、両側縁は両面から入念に調整されている。130はホルンフェルス製で、比較的大形の剥片を素材とし、表面には素材の礫面を多く残している。刃部は斜位に二次加工されている。131~136は欠損品で、131・135は斧身下半、ほかは斧身上半を欠損する。石質は131が泥岩、135が砂岩、132・134が安山岩、133が珪質頁岩、136がホルンフェルスである。

スクレイパー (第90図137~139、写真図版43)

137・138は小型の製品で、138は下端に、137は上端を除く周縁に複数刃部を整形している。139は原礫面の残る円形の剥片を素材とし、下端に刃部を整形している。石質はともにチャートである。

敲石（第90図140・141、写真図版43）

140は下端部と右側縁中央から上端にかけて敲打痕が見られる。141は下端部に敲打痕が見られ、その個所が白く潰れている。石質は140が砂岩、141が安山岩である。

磨石（第91図142、写真図版43）

小型の円盤を素材とするもので、表面が磨面で覆われ面取り状になるまでよく使い込まれている。石質は凝灰岩で、重量83.7gを量る。

石皿（第91図143、写真図版43）

砂岩製の石皿で、表裏両面とも磨耗している。端部には敲打痕が見られる。重量105.4gを量る。

旧石器時代の遺物

ナイフ形石器（第91図144・145、写真図版43）

144は縦形剥片を素材とし、表面には左側縁上半に背部整形、基部に細部調整、先端部に表裏両面から打点調整が施される。長さ31mm、幅12mm、厚さ8mm、重量1.9gを量り、石質は黒曜石である。

145は縦形剥片を素材とし、左側縁の背部整形は連続的である。基部には両側縁に細部調整が施される。長さ35mm、幅12mm、厚さ6mm、重量2.4gを量り、石質は安山岩である。

尖頭器（第91図146・147、写真図版43）

146は縦形剥片を素材とし、裏面に主要剥離面を大きく残し、平形細部調整が一部に施される両面調整尖頭器である。先端部の調整は入念であり、断面は三角形を呈する。裏面の調整はバブルを切り取るため左側縁に施される。長さ22mm、幅12mm、厚さ4mm、重さ0.9gを量り、石質は黒曜石である。

147は片面調整尖頭器で、先端部を一部折損する。細部調整は周縁に限られる。長さ28mm、幅15mm、厚さ5mm、重量2.3gを量り、石質は黒曜石である。

古墳時代の遺物

土器

壺（第91図148、写真図版43）

平底で、外面はヘラミガキ調整される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、胎土に砂粒・小石を多く含む。底径7.5cm、現高4.5cm。

土製品

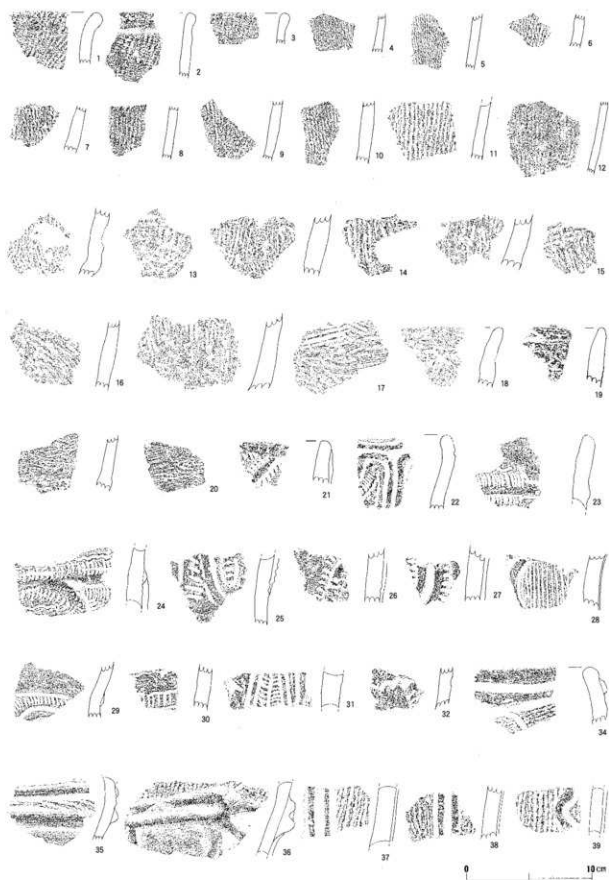
土錘（第91図149～152、写真図版44）

管状の土錘で、丸棒芯巻付けによる成形が成されている。平均法量は長さ2.7cm、幅0.7cm、厚さ0.7cm、重さ1.2gを量る。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色を呈する。

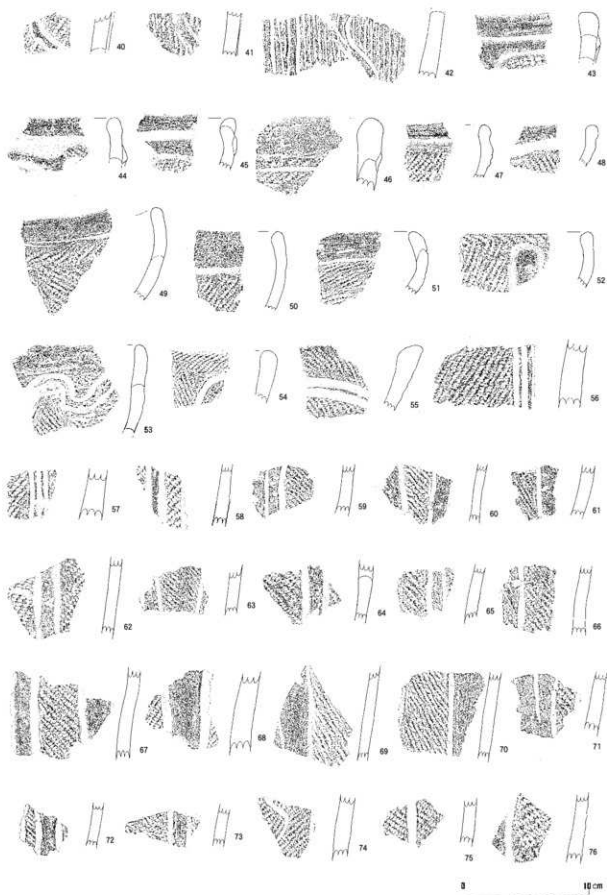
（前田秀則）



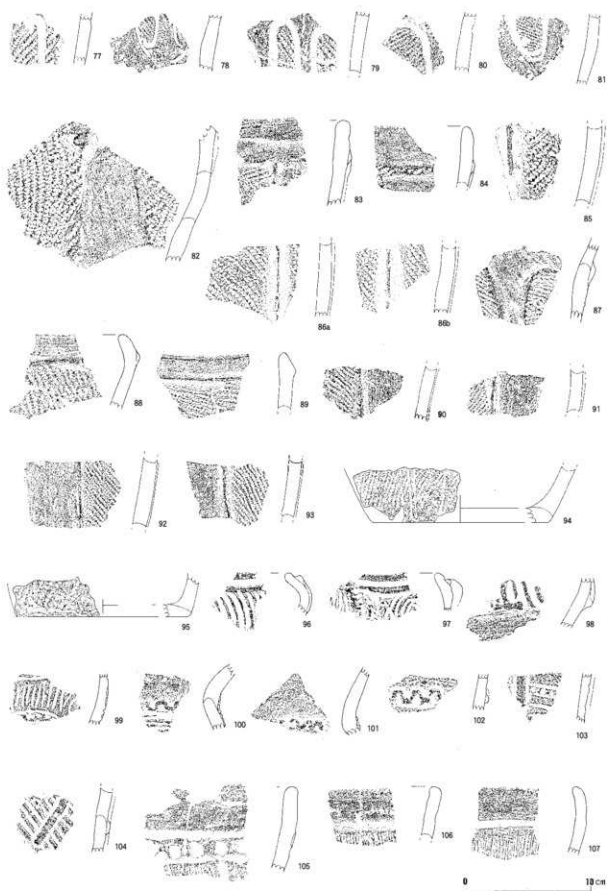
第85図 調査区出土遺物 (1)



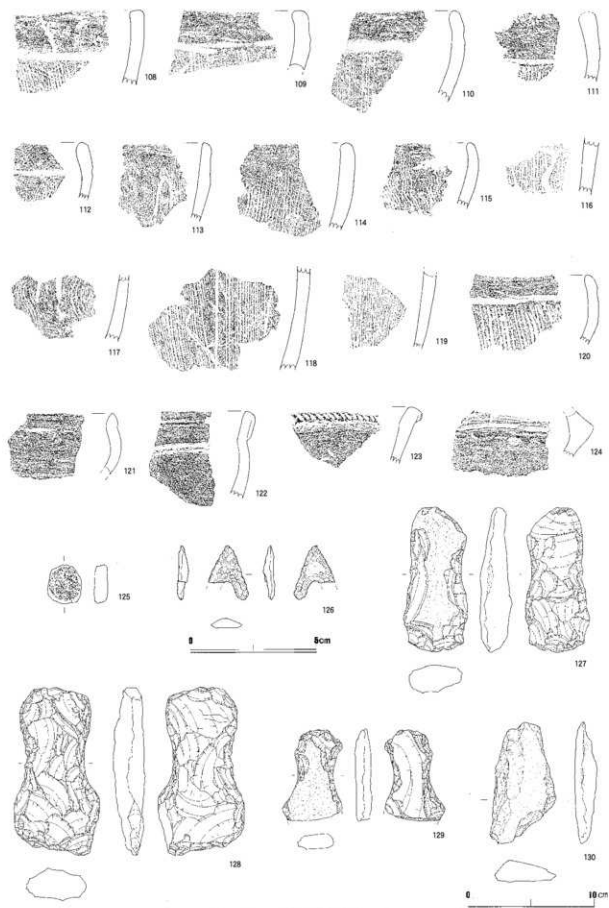
第86図 調査区出土遺物(2)



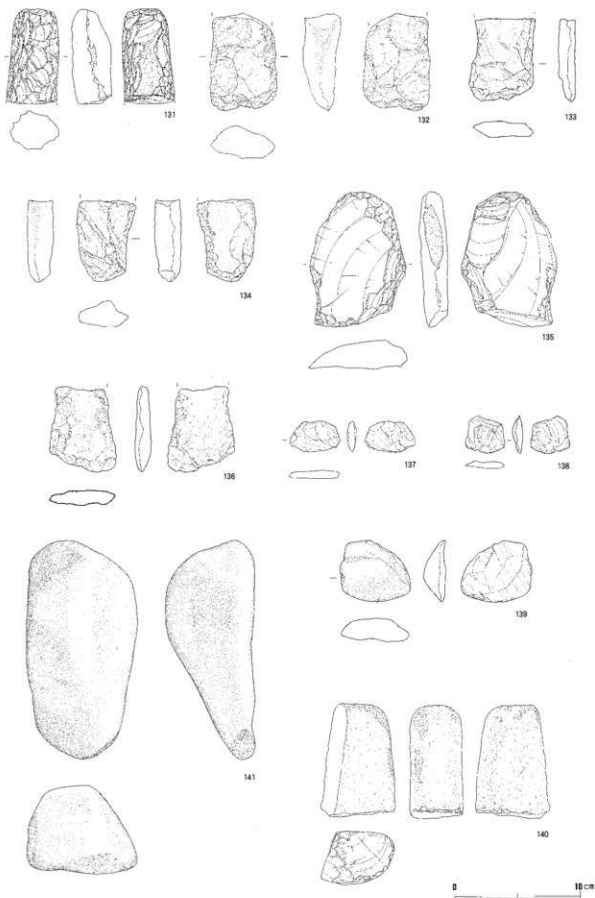
第87図 調査区出土遺物 (3)



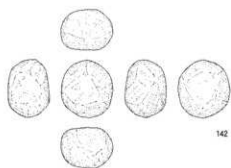
第88図 調査区出土遺物(4)



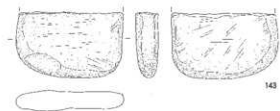
第89図 調査区出土遺物 (5)



第90図 調査区出土遺物 (6)

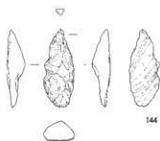


142

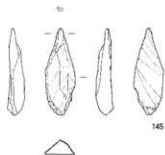


143

0 10 cm



144



145



146



147

0 5 cm



148



149



150



151



152

0 10 cm

第91図 調査区出土遺物 (7)

第8表 調査区出土土器観察表(1)

番号	出土位置	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	Q-8	深鉢	口縁	縄文LR、内面ナデ	A・C・G	良	黒褐色	井草Ⅱ
2	R-9	深鉢	口縁	縄文RL、内面ナデ	A・D・I	良	褐色	井草Ⅱ
3	T-4	深鉢	口縁	縄余文R、内面ナデ	A・C	良	茶褐色	夏島
4	表探	深鉢	胴	縄余文R、内面ナデ	A・C・D	良	茶褐色	夏島
5	U-5	深鉢	胴	縄余文R、内面ナデ	A・C・D	良	茶褐色	夏島
6	Q-8	深鉢	胴	縄余文R、内面ナデ	A・C・D	良	暗茶褐色	稲荷台
7	Q-8	深鉢	胴	縄余文R	A・C・D	良	茶褐色	稲荷台
8	表探	深鉢	胴	縄余文R	A・C・D	良	茶褐色	稲荷台
9	S-7	深鉢	胴	縄余文R、内面ナデ	A・C	良	暗茶褐色	稲荷台
10	一括	深鉢	胴	縄余文R、内面ナデ	A・C	良	茶褐色	稲荷台
11	一括	深鉢	胴	縄余文L、内面ナデ	A・C・D	良	橙褐色	稲荷台
12	一括	深鉢	胴	縄余文L、内面ナデ	C・D・G	良	にぶい橙色	稲荷台
13	一括	深鉢	胴	表面貝殻条痕文、内面磨痕	C・D・K	良	褐色	早期後半
14	一括	深鉢	胴	表裏面貝殻条痕文	B・D・K	良	橙色	早期後半
15	一括	深鉢	胴	表裏面貝殻条痕文	C・D・K	良	褐色	早期後半
16	一括	深鉢	胴	表面貝殻条痕文	A・C・K	良	明赤褐色	早期後半
17	一括	深鉢	胴	表裏面貝殻条痕文	C・D・K	良	橙色	早期後半
18	一括	深鉢	口縁	無文	A・G・K	良	黒褐色	花積下層
19	V-5	深鉢	口縁	表裏面磨痕	C・J・K	良	明赤褐色	花積下層
20	W-7	深鉢	胴	表面磨痕、内面貝殻条痕文	I・J・K	良	明赤褐色	花積下層
21	W-7	深鉢	口縁	陸帯、角押文、内面ナデ	A・B・D	良	明赤褐色	勝坂2
22	S-7	深鉢	口縁	半陸起線区画、連続爪形文、波状沈線、内面ナデ	A・C	良	茶褐色	勝坂2
23	U-5	深鉢	口縁	陸帯、連続爪形文、半円形刺突文、内面ナデ	D・H	良	明褐色	勝坂2
24	P-7	深鉢	胴	陸帯、連続爪形文、波状沈線、内面ナデ	A・C	良	褐色	勝坂2
25	一括	深鉢	胴	半陸起線、沈線、刺突文、爪形文、内面ナデ	A・C・E	良	明赤褐色	勝坂2
26	表探	深鉢	胴	陸帯、沈線、連続爪形文、内面ナデ	A・D	良	にぶい赤褐色	勝坂2
27	表探	深鉢	胴	陸帯、刺突文、内面ナデ	B・C・D	良	明赤褐色	勝坂2
28	U-6	深鉢	胴	陸帯、沈線、内面ナデ	E・H・I	良	茶褐色	勝坂2
29	U-7	深鉢	胴	半陸起線、連続爪形文、内面ナデ	A・B・H	良	暗赤褐色	勝坂3
30	V-8	深鉢	胴	沈線、連続爪形文、半円形刺突文、内面ナデ	A・C・G	良	茶褐色	勝坂2
31	V-9	深鉢	胴	沈線、連続刺突文、三叉文、内面ナデ	A・I	良	橙褐色	勝坂3
32	Q-5	深鉢	胴	波状沈線、爪形文、内面ナデ	A・E・F	良	明褐色	阿玉台Ⅱ
33	R-3	深鉢	口縁	縄余文L、陸帯、沈線、内面ナデ	C・D・H	良	茶褐色	加曾利E1
34	W-7	深鉢	口縁	縄余文L、陸帯、沈線、内面ナデ	C・D	良	明褐色	加曾利E1
35	V-9	深鉢	口縁	縄余文L、陸帯、内面ナデ	A・C・H	良	褐色	加曾利E1
36	U-9	深鉢	胴	縄文RL、陸帯、内面ナデ	B・C・D	良	茶褐色	加曾利E1
37	V-9	深鉢	胴	縄余文L、陸帯、内面ナデ	A・C・D	良	にぶい赤褐色	加曾利E1
38	U-10	深鉢	胴	縄余文L、陸帯、内面ナデ	A・D・H	良	橙色	加曾利E1

第8表 調査区出土土器観察表(2)

番号	出土位置	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
39	P-8	深鉢	胴	縹赤文L、陸帯、内面ナデ	A・D・H	良	茶褐色	加曾利E1
40	R-4	深鉢	胴	縄文R L、陸帯、内面ナデ	A・D	良	明赤褐色	加曾利E1
41	U-9	深鉢	胴	縹赤文L、平行沈線(半截竹管)、内面ナデ	A・D・G	良	明赤褐色	連弧文系
42	一括	深鉢	胴	縹赤文L、平行沈線(半截竹管)、内面ナデ	A・C・D	良	明赤褐色	連弧文系
43	S-4	深鉢	口縁	縄文R L、陸帯、内面横ナデ	A・F・H	良	赤褐色	加曾利E3
44	R-6	深鉢	口縁	縄文L R、陸帯・沈線、内面ナデ	A・C・H	良	にぶい黄褐色	加曾利E3
45	R-6	深鉢	口縁	縄文R L、陸帯、内面ナデ	A・B・D・F	良	褐色	加曾利E3
46	Q-5	深鉢	口縁	縄文R L、微隆起帯、内面ナデ	A・C・D	良	明褐色	加曾利E4
47	R-8	深鉢	口縁	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・C・H	良	にぶい黄褐色	加曾利E3
48	U-8	深鉢	口縁	縄文R L、沈線、内面ミガキ	A・B	良	橙色	加曾利E3
49	S-5	深鉢	口縁	縄文L(羽状縄文)、沈線、内面ミガキ	A・B・C	良	にぶい黄褐色	加曾利E4
50	U-5	深鉢	口縁	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・B	良	明黄褐色	加曾利E4
51	S-5	深鉢	口縁	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・B・C	良	橙色	加曾利E4
52	一括	深鉢	口縁	縄文R L(羽状縄文)、沈線、内面ナデ	A・B・C	良	明黄褐色	加曾利E3
53	X-4	深鉢	口縁	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・C・D	良	赤色	連弧文系
54	U-5	深鉢	口縁	L R羽状縄文、沈線、内面ミガキ	A・C	良	橙色	加曾利E3
55	一括	深鉢	口縁	縄文R L、沈線、内面ミガキ	D・H	良	黒褐色	加曾利E3
56	R-4	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ミガキ	A・B・I	良	明褐色	加曾利E2
57	R-4	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・B・G	良	にぶい黄褐色	加曾利E2
58	P-6	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・D	良	明褐色	加曾利E3
59	P-6	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・C・D	良	暗褐色	加曾利E3
60	X-8	深鉢	胴	縄文L、沈線、内面ミガキ	A・B	良	明褐色	加曾利E3
61	R-6	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・B	良	橙色	加曾利E3
62	R-6	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・B・D	良	赤褐色	加曾利E3
63	一括	深鉢	胴	縄文L、沈線、内面ナデ	A・B	良	明褐色	加曾利E3
64	X-8	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・B	良	橙色	加曾利E3
65	一括	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ミガキ	A・B・C	良	にぶい黄褐色	加曾利E3
66	一括	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・D・I	良	褐色	加曾利E3
67	一括	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	B・I	良	茶褐色	加曾利E3
68	一括	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・C・D	良	明褐色	加曾利E3
69	P-3	深鉢	胴	縄文L、沈線、内面ナデ	B・C・H	良	明褐色	加曾利E3
70	S-4	深鉢	胴	縄文L、沈線、内面ナデ	C・D・H	良	褐色	加曾利E3
71	P-6	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ミガキ	C・D	良	明赤褐色	加曾利E3
72	P-6	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	B・C	良	黒褐色	加曾利E3
73	P-6	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	B・I	良	にぶい橙色	加曾利E3
74	一括	深鉢	胴	縄文R L、沈線、波状沈線、内面ナデ	A・B・C	良	黒褐色	加曾利E3
75	U-4	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・D・G	良	橙褐色	加曾利E3
76	一括	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	B・C・D	良	赤褐色	加曾利E3

第8表 調査区出土土器観察表(3)

番号	出土位置	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
77	U-8	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	B・D	良	茶褐色	加曾利E3
78	P-6	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	C・D	良	明褐色	加曾利E4
79	R-9	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	A・D・G	良	明褐色	加曾利E4
80	V-8	深鉢	胴	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・B	良	橙色	加曾利E4
81	P-6	深鉢	胴	縄文L R、沈線、内面ナデ	C・D	良	赤褐色	加曾利E4
82	一括	深鉢	胴	微隆起帯、縄文R L(充填)、内面ナデ	B・C・D	良	明褐色	加曾利E4
83	P-3	深鉢	口縁	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	A・B・C	良	にぶい橙色	加曾利E4
84	W-7	深鉢	口縁	微隆起帯、縄文R L(充填)、内面ナデ	A・C	良	にぶい橙色	加曾利E4
85	R-2	深鉢	胴	縄文L R L、微隆起帯、内面ナデ	A・B	良	にぶい橙色	加曾利E4
86	W-7	深鉢	胴	縄文L R、微隆起帯、内面ナデ	A・C・D	良	橙色	加曾利E4
87	T-5	深鉢	胴	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	A・B・C	良	橙褐色	加曾利E4
88	Q-3	深鉢	口縁	微隆起帯、縄文R L(充填)、内面ナデ	C・B・G	良	にぶい橙色	加曾利E4
89	Q-3	深鉢	口縁	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	A・C	良	茶褐色	加曾利E4
90	W-7	深鉢	胴	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	A・C・D	良	褐色	加曾利E4
91	W-4	深鉢	胴	微隆起帯、縄文R L(充填)、内面ナデ	B・C	良	にぶい赤褐色	加曾利E4
92	W-7	深鉢	胴	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	A・C・D	良	褐色	加曾利E4
93	Q-3	深鉢	胴	微隆起帯、縄文L R(充填)、内面ナデ	B・C・D	良	明赤褐色	加曾利E4
94	一括	深鉢	底部	縄文R L、沈線、内面ナデ	A・C	良	橙褐色	加曾利E2
95	W-6	深鉢	底部	縄文R L、内面ナデ	C・D・H	良	明赤褐色	加曾利E
96	V-9	深鉢	口縁	隆帯、沈線(同心円文)、内面ミガキ	A・B・C	良	赤褐色	曾利Ⅱ
97	U-4	深鉢	口縁	隆帯、刻み、沈線(同心円文)、刺突文、内面ナデ	A・B・D	良	褐色	曾利Ⅱ
98	U-10	深鉢	口縁～頸	隆帯、沈線、内面ナデ	B・F・H	良	にぶい褐色	曾利Ⅱ
99	P-6	浅鉢	頸	沈線、刺突文、内面ナデ	B・D	良	赤褐色	曾利Ⅱ
100	S-7	深鉢	頸	平行沈線(半截竹管)、粘土紐、内面ナデ	A・D・H	良	橙色	曾利Ⅱ
101	一括	深鉢	頸	隆帯、粘土紐、内面ナデ	B・D	良	橙色	曾利Ⅱ
102	一括	深鉢	頸	隆帯(交互刺突)、内面ナデ	A・D	良	にぶい黄褐色	曾利Ⅱ
103	一括	深鉢	胴	隆帯、沈線、刺突文、内面ナデ	B・C・D	良	褐色	曾利Ⅱ
104	一括	深鉢	頸	平行沈線(半截竹管)、粘土紐、内面ナデ	A・C・D	良	明褐色	曾利Ⅱ
105	R-7	深鉢	口縁	集合条線、沈線、刺突文、内面ナデ	A・B・H	良	明黄褐色	曾利Ⅱ
106	U-5	深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ナデ	A・H	良	明黄褐色	中期後半
107	一括	深鉢	口縁	条線、沈線、内面ナデ	B	良	褐色	中期後半
108	S-8	深鉢	口縁	条線、沈線、内面ミガキ	A・B・E	良	明黄褐色	中期後半
109	T-9	深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ナデ	A・D・I	良	赤褐色	中期後半
110	S-4	深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ミガキ	A・C・G	良	褐色	中期後半
111	一括	深鉢	口縁	条線、沈線、内面ミガキ	A・D	良	赤褐色	中期後半
112	一括	深鉢	口縁	集合条線、沈線、内面ミガキ	A・D・I	良	褐色	中期後半
113	一括	深鉢	口縁	条線、沈線、内面ミガキ	A・G	良	明赤褐色	中期後半
114	O-3	深鉢	口縁	条線、内面ナデ	A・D・I	良	明褐色	中期後半

第8表 調査区出土土器観察表(4)

番号	出土位置	器形	部位	文様要素・内面調整など	胎土	焼成	色調	備考
115	V-5	深鉢	口縁	集合条線、内面ナデ	A・B・C	良	明褐色	中期後半
116	R-6	深鉢	胴	条線、沈線、内面ナデ	A	良	赤褐色	中期後半
117	一括	深鉢	胴	集合条線、沈線、内面ナデ	A	良	明赤褐色	中期後半
118	R-6	深鉢	胴	集合条線、沈線、内面ミガキ	A・B・D	良	明赤褐色	中期後半
119	R-7	深鉢	胴	集合条線、内面ナデ	A・D	良	明赤褐色	中期後半
120	T-9	浅鉢	口縁	条線、沈線、内面ナデ	A・G・I	良	明黄褐色	中期後半
121	O-7	浅鉢	口縁	条線、内面ミガキ	A・C	良	赤褐色	中期
122	一括	浅鉢	口縁	沈線、内面ミガキ	A・B	良	赤褐色	中期
123	一括	浅鉢	口縁	無文、短み、内面ミガキ	A・B・D	良	明褐色	中期
124	U-10	浅鉢	胴部	沈線、内面ミガキ	A・B・D	良	赤褐色	中期

第9表 調査区出土石器観察表(1)

番号	出土位置	遺存度	器種	石質	法 量				備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
126	O-6	1/4欠損	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.4	0.8	
127	R-8	完形	打製石斧	砂岩	11.91	5.32	2.59	171.2	短冊形
128	W-6	完形	打製石斧	粘板岩	13.32	6.84	2.53	259.3	分銅形
129	T-4	一部欠損	打製石斧	泥岩	7.64	4.76	1.20	53.5	分銅形、刃部欠
130	一括	完形	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	5.3	1.8	90.9	櫛形、二次加工跡
131	一括	1/4欠損	打製石斧	砂岩	7.65	4.08	2.91	147.5	短冊形、斧身下半欠
132	R-5	1/3欠損	打製石斧	安山岩	7.7	5.4	3.0	146.7	短冊形、斧身上半欠
133	一括	1/2欠損	打製石斧	珪質頁岩	6.6	5.3	1.3	71.4	短冊形、斧身上半欠
134	S-4	1/2欠損	打製石斧	安山岩	6.5	4.7	2.2	80.2	短冊形、斧身上半欠
135	S-4	1/3欠損	打製石斧	砂岩	10.77	7.59	1.76	218.3	分銅形、二次加工跡、斧身下半欠
136	T-8	1/4欠損	打製石斧	ホルンフェルス	6.8	5.4	1.3	50.6	短冊形、斧身上半欠
137	一括	完形	スクレイパー	チャート	2.5	3.0	0.7	8.0	
138	P-6	一部欠損	スクレイパー	チャート	3.0	3.1	0.9	7.5	
139	U-5	完形	スクレイパー	チャート	4.9	5.6	1.8	52	
140	表探	完形	敲石	砂岩	8.95	5.65	4.38	356.4	
141	S-4	完形	敲石	安山岩	17.4	8.9	7.1	1200	
142	U-5	完形	磨石	凝灰岩	4.6	4.1	3.3	83.7	
143	Q-3	1/2欠損	石皿	砂岩	8.28	5.15	1.55	105.4	
144	表探	完形	ナイフ	黒曜石	3.1	1.2	0.8	1.9	
145	S-5	完形	ナイフ	安山岩	3.5	1.2	0.6	2.4	
146	P-6	完形	尖頭器	黒曜石	2.2	1.2	0.4	0.9	
147	T-7G	一部欠損	尖頭器	黒曜石	2.8	1.5	0.5	2.3	